

観世流・金剛流
宗家本流行元

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (052) 731-7 9 8 4
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
— 部 100円

名古屋能楽堂舞台

落成祝賀能

名古屋市・能楽
協会名古屋支部
4月5、6日

「名古屋に市立の能楽堂を」との各界の要望にこたえ、平成七年から工事が進められてきた「名古屋能楽堂」がこのほど完成、また「名古屋能楽堂」の建設費には、能楽愛好家の会(世話人代表北村利弥氏)、能楽協会名古屋支部が中心となり十九万九千九百九十九名に署名し、平成三年暮に建設費が完了し、二十一世紀に向けて新しい文化の拠点が実現する。

能楽協会名古屋支部主催公演

'97能と狂言

●熱田まつり奉納能
六月五日(木)十一時
熱田神宮能楽殿
●新 能
八月九日(土)五時半
熱田神宮神楽殿前特設舞台
●音 及 能
(新作能シリーズ)
八月二十四日(日)十一時
名古屋能楽堂
●音 及 能
(新作能シリーズ)

八月二十四日(日)二時
名古屋能楽堂
●大 衆 能
九月七日(日)十時半
名古屋能楽堂
●大 衆 能
九月七日(日)二時半
名古屋能楽堂
●歳末助け合い協賛能
十二月七日(日)十時
名古屋能楽堂

●入場料は各催しとも前売二千五百円、当日三千円、学生千五百円(熱田まつり奉納能は入場無料)。
●前売場所は、市内各プレイガイド、チケットぴあ、チケットセゾン、熱田能楽殿、出演楽師宅。

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

(2月)

2日(日)名古屋宝生会定式能 (有料)
9日(日)名古屋観世会定式能 (有料)
15日(土)青陽会定式能 (有料)
16日(日)名古屋観世九皇会定例能 (有料)
23日(日)富 塚 会 (来場歓迎)

(3月)

2日(日)大 蔵 狂 言 会 (来場歓迎)
8日(土)福山大学35周年記念能 (来場歓迎)
15日(土)四 大 学 交 流 能 (来場歓迎)
16日(日)梅 嶺 会 (有料)
20日(祭)幸 友 会 春 の 会 (来場歓迎)
23日(日)靈 泉 会 大 会 (来場歓迎)
30日(日)恵 願 会 大 会 (来場歓迎)

(4月)

12日(土)名 古 屋 興 会 (来場歓迎)
13日(日)名 古 屋 観 世 会 定 式 能 (有料)
19日(土)猶 諷 会 会 (来場歓迎)
20日(日)邦 諷 会 会 (来場歓迎)
27日(日)久 田 観 正 会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了解下さい)

謡初式

能楽協会名古屋支部では、一月三日午前十一時から恒例の新年謡初め式を熱田神宮能楽殿で催し、平成九年の初春を寿いだ。
ひきつづき楽屋で熱田神宮能楽殿運営委員会委員長・岡地熱田神宮能楽殿の諸行事にご協力を頂き心から感謝する。本年は名古屋の能楽界にとって、名古屋能楽堂の

年 新 賀 謹

熱田神宮能楽殿運営委員会

委員長	熱田神宮能楽殿	岡地幸雄
委員	熱田神宮能楽殿	大山剛
委員	熱田神宮能楽殿	宮田理博
委員	熱田神宮能楽殿	伴 明 郎
委員	熱田神宮能楽殿	糸川英夫
委員	熱田神宮能楽殿	野村又三郎
委員	熱田神宮能楽殿	梅田邦久
委員	熱田神宮能楽殿	衣斐正宜
委員	熱田神宮能楽殿	飯富雅介
委員	熱田神宮能楽殿	井上祐一
委員	熱田神宮能楽殿	鬼頭喜太郎
委員	熱田神宮能楽殿	福井啓次郎
委員	熱田神宮能楽殿	藤田六郎兵衛
委員	熱田神宮能楽殿	寛 敏 一
顧問	熱田神宮能楽殿	長谷晴男
顧問	熱田神宮能楽殿	鈴木忠一

年 新 賀 謹

名古屋観世会

観世清和

社団法人鏡仙会

観世鏡之亟

観世栄夫

観世暁夫

幽詠会

片山九郎右衛門

法人研能会

梅若万紀夫

梅若万佐晴

梅若盛義

名古屋観衛会

山本勝一

名古屋正花会

山本博通

〒540 大阪市中央区徳井町一丁目三十一番
電話06(九四二)四〇七〇番

大槻清韻会

大槻文蔵

〒510 大阪市中央区上町A番七号
電話06(七六)八〇五五番

鳳鳴会

武田志房

〒513 名古屋市中千種区今池四丁目
1513 浅井ビル
電話052(733)三三三六

幽花会

片山慶次郎

〒603 京都市北区小山下花ノ木町二丁目
FTXL 四九二二一五三〇九番
FAX 四九二二一五三〇九番

野村四郎

名古屋観世九皇会

観世喜正之

観世喜正之

加藤藤保彦

高木美智子

高山橋圭一

名古屋能楽堂舞台落成 祝賀能

〔四月五日(土)〕 十時半始

翁 梅田 邦久 井上 靖浩
佐藤 友彦 古橋 正邦
能 寛 飯一 杉 市和
福井 昭治 御原 昭忠

末 廣 野村 小三郎 松田 又三郎
後見 大野 弘之

屋 島 武田 志房 清沢 正一
歌 占キリ 梅若 盛哉 泉 嘉一
卷 絹キリ 衣斐 愛 祖父 江修一

東 北キリ 戸田 和 東川 輝夫
葵 上 福川 寿一 辰巳 満次郎

鶴 之 段 佐藤 耕司 地謡 八橋 孝充
吉野 天人 今村 嘉勇 加賀 敏彦

山 姥キリ 中村 雅章 地謡 柳原 昭忠

鶴 竹内 澄子 玉井 博祐
衣斐 正宜 高安 勝久 大 吉田 定男
西村 信広 後藤 孝一郎 鬼頭 喜太郎

後見 辰巳 満次郎 地謡 内藤 飛能
水上 優 久野 幸三 稲川 光輝

〔四月五日(土)〕 二時半始

神 歌 加藤 保彦 黒田 博 地謡 八橋 孝充
古山 幸親

白 田 村 長田 正樹 河村 大
後見 大島 久見 地謡 小森 吉川
大島 久見 地謡 小森 吉川

筑 紫 奥 大野 弘之 佐藤 友彦
後見 井上 礼之助

竹 生 島 八神 孝充 高島 良一
胡 蝶 須部 甫 地謡 加賀 敏彦

国 栖 松山 幸親 地謡 祖父 江修一

老 松 大島 久見 梅田 邦久
小 鍛 治 和谷 衡市 地謡 長田 政忠

嵐 清沢 一政 高橋 昭一 泉 嘉夫
祝賀之式 高安 勝久 大 河村 真之介

山 後見 久野 幸三 地謡 高島 良一
前野 郁子 加賀 敏彦 中川 雅章

神 歌 加賀 敏彦 本田 勲 地謡 高橋 孝充
吉川 周子 福王 茂十郎 柳原 昭忠

〔四月六日(日)〕 十時始

羽 衣 谷口 正喜 助川 希治
床几之物語 小林 忠三 田中 敬文

難 波 山本 勝一 高橋 邦一
網 之 段 片山 廣次郎 武田 邦一

口 真 似 松田 高義 野村 又三郎
後見 井上 祐一

巴 鞍馬 天狗 豊嶋 三千春 竹市 幸三
後見 三村 邦弘 地謡 加藤 保彦

高 砂 祝賀之式 高安 勝久 大 河村 真之介
後見 三村 邦弘 地謡 加藤 保彦



観世芳宏門人会

観世芳宏

観世芳伸

大垣浦声会

浦田 保利

浦田 保浩

浦田 保親

邦 謡 会

梅田 邦久

清沢 一政

須部 甫

本島 良一

高橋 孝充

今沢 美和

名古屋市昭和区山手通3-8-2

電話(052)833-1185

西宮市甲陽園目中山町三三二五

電話(079)824-58

財団法人鎌倉能舞台

中 森 晶 三

中 森 貫 太

井上 嘉久 (〒603) 京都市北区紫野下馬田町六

名古屋橋岡会

名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五

山田 紀子

大阪能楽会館

大西 智久

武田 欣司

武田 邦弘

名古屋淡交会

橋岡 慈観

三交会

瀬戸 三津子

福沢市稲島町二ノ宮六 瀬戸方

電話(058)877-3388

豊中市曾根東町四一三

雄観会中部地区連合会

名古屋和石会

一宮 竹会

岐阜 花会

下呂 雄会

高山 雄会

倭文之屋社

名古屋修観会

梅若修一

山中能舞台

山中 義滋

〒545 大阪市阿倍野区阪南町六十五一八

電話(06)692-1382

松音会

泉 泰孝

佳泉会

泉 雅一郎

〒181 東京都三鷹市幸礼二一三一

電話(042)217-1240

春鶯会

梅若善高

〒585 豊中市新千里南町三丁目18-12

電話(06)831-1785

山本 眞義

山本 章弘

豊中市本町六丁目一〇一六

初陽会

武田 宗和

精古場 名古屋千種区今池四丁目

電話(052)733-3736

上田 観正会

上田 観正会

上田 観正会

上田 観正会

上田 観正会

上田 観正会

〔四月六日(日)〕 二時始

素

廣瀬 瑞弘 佐久間祥夫 地謡 渡辺 道三 伊藤 芳雄 小島 芳樹 鈴木 秀

翁

祖父江修一 武田 邦弘 飯沼 雅介 橋本 幸 水波之伝 相元 正樹 河村真之介 福井啓次郎 大野 好信

養

後見 今沢 美和 今村 嘉男 久田 徹二 加藤 敏彦 梅川 高橋 一邦 政久

八島

河村 裕一 福井 良久 地謡 佐久間祥夫 小島 芳樹 前田 茂徳 加藤 正綱

(前号よりつづき)

名古屋能楽堂条例 施行規則

第8条 条例第5条の規定による使用料の減免は申請に基づいて行うものとし、減免することができる場合は、市長が能楽その他の伝統芸能の振興等のため特に有益であると認める公演又は行事について、次の各号に掲げるとおりとし、その額は、当該各号に定めるところによる。

- (1) 財団法人名古屋城振興協会 (以下「協会」という。)、財団法人名古屋市文化振興事業団又は文化庁が主催(市と共催する場合を含む。以下同じ。)する公演又は行事に使用する場合
舞台の使用料の全額
- (2) 官公署(文化庁を除く。)が主催する公演又は行事に使用する場合
舞台の使用料の額の2分の1相当の額
- (3) 学校教育法(昭和22年法律第26号)第1条に規定する学校又は当該学校が課外活動を行う団体と認められるものが主催する公演又は行事に使用する場合
舞台の使用料の額の5分の1相当の額
- (4) 能楽その他の伝統芸能の振興を目的とする公益法人が主催する場合
舞台の使用料の額の5分の1相当の額

草子洗小町 高木美智子 地謡 須山 幸親 山下 幸親 放 下 僧小歌 熊沢恵美子 須山 幸親 須山 幸親

素袍落

井上松次郎 井上礼之助 後見 井上 靖浩

西王母

加藤富貴子 小島 芳樹 若キリ 前田 茂徳 地謡 伊藤 芳雄 小島 芳樹 天 鼓 本田 光洋 釣木 雄二

大瓶狸々

杉江 元 河崎 勲 後藤 幸幸 助川 龍夫 本田 邦久 地謡 八神 孝一 高橋 一邦 須部 雨 地謡 黒田 幸博 久田 徹二 近藤 幸江 清沢 一政

主催する場合で、能楽その他の伝統芸能の普及を目的として公演又は行事に使用する場合

第9条 条例第6条ただし書に規定する正当な事由は、使用の許可を受けた者(以下「使用者」という。)が許可を受けた使用の日(2日以上にわたって引き続き使用するとき)は、その最初の日の前14日までに使用の許可の取消しを申し出て認められたときとする。
2 使用料の還付額は、次の各号に掲げる事由について当該各号に定める額とする。
(1) 使用者の責めに帰することができない事由により施設の使用ができなくなったとき、使用料の全額
(2) 前項に規定する事由があるとき、使用料の額の2分の1相当の額
3 使用料の還付を受けようとする者は、名古屋能楽堂使用許可書及び使用料の領収書の写しを添えて、市長に申請しなければならない。

(特別の設備の設置等の承認)
第10条 条例第9条の規定による承認の申請は、使用の許可の申請の際に併せて行うものとする。
2 前項の承認の申請をする際には、仕様書、図面その他市長が必要と認める資料を併せて提出しなければならない。
(行為の禁止等)
第11条 能楽堂においては、次に掲げる行為をしてはならない。
(1) 火災、爆発その他の危険を生ぜしめるおそれのある行為をすること。
(2) 騒音又は大声を発するなど他人に迷惑を及ぼす行為をすること。
(3) 他人に迷惑を及ぼすおそれのある物品を携帯すること。
(4) 承認を受けずに能楽堂内に畜積物を伴うこと。(つづく)



誠交会 奥 善 助
東京都世田谷区三軒茶屋二一〇一三二
電話〇三三四二二二六三七番

笙月会 中 川 雅 章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話〇五五〇〇六三〇番

洗心会 奥 村 富 久 子
〒806 京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇七五七二〇七六七番

久田観正会
久田 徹二
馬 場 信 至
玉 野 路 子
星 野 一 郎
久 田 舜 一
前 野 郁 子
松 山 幸 親

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花 農 の 会
加 賀 敏 彦
〒466 名古屋市中区森下二丁目七〇九
電話〇五三〇(七七一)八九四五番

編修会 祖父江 修 一
多治見市日ノ出町2丁目
電話〇五七三二(三三六)五六六

芳韻会 稲 生 芳 雄
半田市船入町三十一
電話〇五九九〇(〇八一)一五

幸福会 近 藤 幸 江
岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話〇五五六四(〇二五)二九九

重陽会 菊 池 重 郷
大山市犬山相生五九一―一六
電話〇五五六八(〇四四)四〇一

清風会 今 村 嘉 勇
岩倉市東新町下築52―101
電話〇五二六(〇七三)七三三八

光盛会 熊 沢 光 俱
〒465 小牧市藤岡3―2―11
電話〇五二六(〇七九)九五八七

宝生 英 照

名古屋異会
辰 巳 孝

近藤 乾 之 助
〒170 東京都豊島区巣鴨五―三―一八

惠美寿会
衣 斐 正 宜

衣斐正宜後援会
〒466 名古屋市昭和区御器所3―23―19
御器所パークマンション802号
電話〇五二二八(八二一)五六〇〇番

佐 野 由 於

倉 本 雅

金剛流
松 野 恭 憲
松 野 洋 樹
〒616 京都市右京区嵯峨殿町一八三
TEL(〇七七五)四六二(二二四)八三三
FAX(〇七七五)四六二(六〇九)八三三

豊嶋能の会
豊 嶋 三 千 春

菊 扇 会
後 援 会
廣 田 泰 三
廣 田 泰 三

廣田後援会
廣 田 隆 一
廣 田 幸 稔

宝生流
嘉 宝 会
名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅三三〇電話〇五二七(三七二)七三三二

司 宝 会
佐 藤 耕 司

金剛流
名古屋周星会
岐 卓 周 星 会

吉 川 周 子

金剛流
名古屋千種区西筋町三―一六
電話(〇五三)七六一(一三二)五七

名古屋宝生会定式能(第141期)

平成九年二月二日(日)

十二時半始

熱田神宮 能楽殿

頼

政

高安 勝久

河村繪一郎

竹市 学

後見 戸田 和雅

地謡 柴田 学

鬼頭 嘉男

後見 戸田 和雅

地謡 柴田 学

鬼頭 嘉男

後見 戸田 和雅

地謡 柴田 学

鬼頭 嘉男

羽

辰巳 潤次郎

橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎

地謡 橋本 幸

吉田 定男

名古屋観世会定式能(初会)

平成九年二月九日(日)

午前十一時始

熱田神宮 能楽殿

能 組

熱田 神宮 能楽殿

神 歌

梅田 邦久 祖父江修一 地謡

本武田 古橋山 正清邦 邦弘

正会員 年四回額り一万八千円 学生券 各回当日券三千円

主催名 古屋宝生会 事務所 名古屋市中区高田二丁目三〇番地 島田橋住宅二二二二一〇

附祝言 後見 辰巳 潤次郎 地謡 橋本 幸 吉田 定男

自然居士 飯沼 雅介 後藤 孝一郎 大野 誠

草紙洗 津田 信彦 玉井 博祐 後見 辰巳 潤次郎

田 村キリ 倉本 雅 竹内 澄子 地謡 戸田 村 慶和

昆布 大野 弘之 佐藤 敏 後見 井上 礼之助

衣 辰巳 潤次郎 飯沼 雅介 西村 信広 吉田 定男

後見 辰巳 潤次郎 地謡 橋本 幸 吉田 定男

平成9年1月・2月放送

〔1月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時55分) 19日(日)「半藤・立花供養」~観世流~シテ 観世 清和

〔要員券〕 ※初回に限り当日券発売はありません 会員券は自由席(年五回分)二万二千円

附祝言 主催名 古屋観世会 (終了三時頃)

上 片山 潤次郎 坂田 欣哉 河村 真之介 助川 龍夫

弱法師 藤井 徳三 地謡 観世 芳伸 小川 雅章

老 松 舞 観世 清音 観世 清和 芳宏

腹巻 佐藤 友彦 井上 祐一 大野 弘之 後見 井上 礼之助

砂 観世 清和 福王 茂十郎 飯森 正直 大倉 源次郎

高 観世 芳宏 森本 幸治 河村 繪一郎 鬼頭 喜太郎



金剛流 景雲会 国際能楽研究会(I・N・I) インターナショナル能楽インスティテュート

宇高通成面乃会 宇高通成後援会 宇高 通成

金 春 信 高 金 春 安 明

金 春 欣 三 春 敲 会

金 春 穂 高 廣 瀬 瑞 弘

本 田 光 洋 東京都中野区上高田二丁目二五ノ二

伊勢金春会 村 富 次 伊勢市宮町一丁目一四一七

二井 栄 逸 松阪市殿町1412の3 電話(0598)231021六

長田 驍 後援会 津市高野尾町三三五一四六 電話(059)0697番

和 谷 衡 市 伊勢市中島二丁目2612 電話(059)0159番

福王 茂 十 郎 西宮市名次町六番十二号 電話(0798)077二

宝 生 欣 閑 東京都練馬区小竹町一五〇一五 電話(03)3397二七三〇

名古屋高安会 高安 勝 久 飯 富 雅 介 杉 江 元

ワキ方高安流 山 崎 俊 輔 大牟田市大字藤木一四八ノ二

豊 嶋 十 郎 千叶市下矢切五五1五 電話(047)36211九八二

岡 次 郎 右 衛 門 向日市上植野町地田一ノ五四 電話(05)934124〇六

谷 田 宗 二 朗 京都市北区衣笠街道町317 電話(075)463148七五番

森 常 好 東京都世田谷区世田谷一47112 電話(03)342614八五三

植田 和 光 会 植田 隆 之 亮 明石市松ヶ丘4の3 A6101 電話・FAX(078)61921三三七四

高安流 岡 同 門 会 清水 利 宣 高坂 康 弘 森 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 久 谷 口 雅 信

高安流 岡 同 門 会 清水 利 宣 高坂 康 弘 森 晴 蔵 北 野 三 郎 塩 田 耕 三 村 山 久 伊 藤 久 谷 口 雅 信

青陽会定式能 (第141期)

二月十五日(土)十二時半開演
熱田神宮能楽殿

Table listing cast members and roles for the performance. Columns include names like 高島良一, 飯富雅介, 河村真之介, etc.

名古屋観世九臈会定例能

二月十六日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

Table listing cast members and roles for the performance. Columns include names like 小島英明, 高橋一, 西村信広, etc.

源氏供養 (今沢美和) 飯富雅介 後藤嘉津幸 鹿取希世 杉江元幸 後藤嘉津幸 鹿取希世

Table listing cast members and roles for the performance. Columns include names like 高島良一, 飯富雅介, 河村真之介, etc.

関西観世花の会 第一回公演

3月27日 湊川神社神能殿

女性能楽師の横のつながりによる会として、このほど「関西観世花の会」が発足、きたる三月二十七日(木)その第一回公演が神戸湊川神社神能殿で開催される。



Table listing names and addresses of various organizations and individuals. Includes 大倉源次郎, 幸友会, 柳原富司忠, etc.

Table listing names and addresses of various organizations and individuals. Includes 谷口正喜, 河村真之介, 鬼頭喜太郎, etc.

Table listing names and addresses of various organizations and individuals. Includes 青流太鼓, 上田悟, 大蔵彌右衛門, etc.

晩秋の舞台(その二)から 初冬の舞台へ

「観世会」「宝生会」「随念寺」

ろうそく能」と「大阪梅猶会」

竹尾邦太郎

「巻續」梅が香に詩興をそそられ、思を一首に音無天神へ手向けるツレ正邦、巻續納に遅参して縛められる恭順が殊勝なら、対照的に咎めるワキ臣下・雅介の體面もよい。すわやとばかりに呼び掛けるシテ巫女・芳宏、「その細解けとこそ」の口跡力強く爽やかなら、要らざる圓入者に背立つて無骨なツレの作歌を詠るワキとの問答もはきくと、種を解き手繰ってボイと捨てての切り手際よい。神楽を清々しく舞上げ、へ神語すること、の地(祥六・一英ら)で再度幣に替えるイロエの留は小廻り三度指込開キの囀りの急調に神の憑依の極を見せ、キリには背後に抛り投げた幣が、見事に柄を下にすんと落ち、へ神は上らせ給ふ、を文字通り鮮やかに印象づけ、清浄感のある演やかな舞台だった。(1時間5分)

「文蔵」都へ抜け遊びの太郎冠者・弘之、伯父御様に旨い物を馳走になつたが名を忘れたと言ふ。羨望もあるか、何を食ったか気懸かりなシテ主・祐一の焦燥は、遂に、源平盛衰記は石橋山の合戦譚に出でくる物だということに漕ぎ着け、長舌の末にやとと文蔵という人名から温體(うんどう)を引き出す。しゃあしゃあとする弘之と背立つ祐一が役柄に依り、また、熱演の床几の語り、講釈師なら張綱がパンくゝと入るところよくこなれていた。因に、温體は味噌と酒粕を加えて煮た粥で、師走八日御寺で用いる由、狂言不審紙には「蕉の葉を入れて餅を小さく切り、生栗を短冊色紙に切り入れて入れ。あま酒を中へ入れ申し候飯也」とある。寒い頃にはさ

「海人」シテ童子、前は、海人らしい「男女の差別は知らず」の黒ずんだ深井の面。眼目は淡海公との間の吾子を世に出すのに身の危険を顧みず、へかの海底に飛び入り、つて宝珠を取り戻す様を再現する玉ノ段、雅を地頭に十名全て女性の地頭もあるか、母性愛の露は強きより哀しい程の優しさ。就中、悪魚に閉まされた心細さに「我が子は、と正中より脇正へ出て幕を見込むところ、また、常座でへ(別れ果てなん)悲しきよ、とシオル廻り女流ならではだが、観音の利益を願ひ、暗を

「瓜盗人」進上の瓜は失敬したもの、とは明かせもせず、旨いと催促され、ば再度瓜畑へ忍び込ませざるを得ないシテ七五三、その煩悶の独白がとけた味。一方、畑を荒す盗人はこの手で、と案山子に扮して勇み立つ細主・正邦が初々しい。前は囃かされたが今度では、と案山子を亡者に見立ててなる祭の余興の稽古は七五三の独壇場、初代(当代千作)の表情を写してほのぼのとした味わいだった。後見は逸平。(30分)

「船舟慶・波間ノ伝」先の狂言と対して岡崎市の名刺隨念寺舞台。大書院十二畳の板間を囲む座敷に幔帳を張って見所(一部は地謡座とワキ座)とし、畳の機能だが舞台の電燈だけを残して正面に二基、欄間に二基の燭台を立てる。蠟燭の点火も仏式に拠りて立つところにシテ里人・正宜が出る。面怪士・黒頭・黒紺・紺無地熨斗目着付・黒水衣、の暗い雰囲気は、ワキに誰何されれば然り気無く駈して仏舎利を拝する同志、とてシテ・ワキの連吟がよい。舎利への執心を隠してその貴さを説き及んでクセ留、へ仏舎利を拝する御寺ぞ尊かりけるワキを得心させるかにアシラフのも微妙。随より現る、の譬えは俄の天変に正体を明かし、舎利を奪うと台を踏み潰して逃げる敏捷も足疾鬼の面目、舎利の消失で童歌のテ足疾鬼(面怪・赤頭)と追うツレ童歌天(面天神・黒垂

「江口」シテ盛哉、面若女・操白二・白指宿(金七宝繁文)着付・金赤段唐織(亀甲地桐花文)の匂うばかりの美しさ。初同(善高・光之助ら)へなどや惜むと夕波の、と右ウケ、へ返らぬ古は今とでも、と数歩前へ出るところ、そのイメージは、夕陽に煌めく金波銀波の川面を眺めやうと行み、時空の隔たりを流れて沿って見極める、の風で強く印象付けられた。後は緋襖様大口(金霞風牡丹文)・赤地白飛雲菱地紋楽器尽シニ水仙桐文唐織重折の絢爛豪華で舟は一ノ松。へ今も遊女の舟遊、とシテに次いでツレ二人も舟を出ると、へいざや遊ばん、とツレは切羽に退きシテは大小前床几に掛つた。前世の報いと思ひやうてへ悲しけれ、とシオルとクセになり、へ夕べの風に誘はれ、と床几を立つが、クセの舞も序ノ舞も情緒纏綿として美しく上品。キリは、へ思へば飯の宿に、の数拍子の強調は、心を留めるなど、と諷めし我なり、と更にワキへ向き膝着いて扇で指を入念。(是までなりやとワキから直つて立つと、へ即ち普賢菩薩、と一ノ松に抜け、直して開キ、へ舟は白象となりつつ光と共に、と招キつつ二ノ松へ行き、へ白妙の白雲に、とツマノ麗で乗込拍子の白象に乗る態は、その扇を翳してへ西の空に、と幕に入り、ワキ茂十郎が見送りとめた。ツレ二人を早々と退かせ、華麗な装束のシテのみに絞った演出が大いに生きた舞台だった。(1時間32分)

「乱」シテ善久。前後が中ノ舞で中が乱の所謂舞掛り。年経て酒むとは言ひ条、不老の狸々の若々しさは、酔余流水に乗る流し足や波を蹴立てる乱し足も軽やかに、高く抜き足するのは高波に戯れるか正に水上の妖精である。音を盗み水を踏む心の拍子はスキップの軽快、躍動感も爽やかに舞上げ、留拍子は音たてで踏んだ。(39分・12月1日・梅猶会)

赤地金波文半切・白拾符衣折込・太刀、低い天井を物ともせず遠う長刀揃きも鮮烈な波を蹴る無音の足拍子も軽やか。大車輪の舞臺からへ折られ、三ノ松へ退けられ、寄せせる波に引き戻されるもへまた引く沙に、太刀を担げて幕に入り、子方・徳成の残り留、狭い舞台ならでは、各役熱気の籠った好舞台だった。(1時間28分・11月23日・随念寺無燭能)

「鉢木」独り外で雪に遣えばつい落魄粗衣の不遇を託つも、家に在れば消食に安んじて意気盛んなシテ常世・和男、ワキ旅僧・雅之助に宿を拒むも窮状知られたくない武七の矜持。そこをツレ妻女・雅一に衝かれ、開き直つて旅僧を呼び戻す雅性は、秘蔵の盆歌を新にする決断に通じることが、強く留をうら払うと退つて見詰める辺りには木を借しむ気持も窺われて切ない。更に痛痒は、いざ鎌倉には見準らしくも具足整え、瘦馬に鞭打ち駆け付け、の強猛心に通じ、へさて合戦場からは、とすつく立つ意気も軒昂、ワキの出立に名残り惜しむしツレ連吟のしんみりとした情緒も上々だった。後シテは最明寺の前で少々畏縮の印象、前後共にきびくした挙措、明晰な詞と麗に清涼爽やかな常世であったが、たじろがない眼光の強い力が欲しかった。ワキ雅之助は堂々の貫録。(1時間36分)

「櫻樹」シテ忠三郎、何某方へ連れられて初めてそこで主の借金の質であることを知り、何ら抗わずにすんなり使われるが、仰せ悉くやんわり口実を設けて断るところ、強かな奉公人根性をみせ、「水を汲め」には烈火の如く立腹して何某を燃然とさせるなど、硬軟自在の駆け引きも鮮やか。一方、心無い主の仕打ちにはすぐ忘れて心底許してしまふ辺りの愚直さも亦奉公人の性根、忠三郎の巧みが光る。(37分)

「観世会」「宝生会」「随念寺」

狂言やるまい会 野村又三郎 野村小三郎 電話052(333)7553番

鳳の会 林和利 井上祐一 佐藤友彦

能楽講座 能と狂言に親しむ会 梅田邦久 藤田六郎 兵衛

朝日カルチャーセンター 雛子教室 小鼓後藤孝一郎 丸栄スカイル10階

牛窓正勝 雅之

ビデオ撮影 西川企画 名古屋事務所 名古屋市中区西区名駅 電話(052)201333の内 小原方 電話(052)571581 六 千 電話(052)263986九番

栄能楽舞台 名古屋市中区栄五十六一四 電話(二六二)一一八三番

楽謡庵 名古屋市中区滝川町四七一八三 電話(八三三)七〇〇一

花傳の会 事務局 名古屋市中区新道2-7-17 電話05245713464 (FAXとも)

能楽殿喫茶室 グリル 喫茶 城

飯島大佐 輔 年賀欠礼致します

篤恵会 熊沢恵美子 恵恵会 三村恵子

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話(052)731-7984

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円

郵送の場合 1年1800円

一部 100円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- (2月)
23日(日) 富 羅 会 (来場歓迎)
- (3月)
2日(日) 大 蔵 狂 言 会 (来場歓迎)(番組①面)
8日(土) 福山大学35周年記念能
15日(土) 四 大 学 交 流 会
16日(日) 梅 嶺 会 (有料)(番組②面)
20日(祭) 幸 友 会 春 の 会 (来場歓迎)
30日(日) 恵 福 会 大 会 (来場歓迎)(番組④面)
- (4月)
12日(土) 名 古 屋 興 会 (来場歓迎)
13日(日) 名 古 屋 観 世 会 定 式 能 (有料)
19日(土) 猿 園 会 (来場歓迎)
20日(日) 邦 謡 会 (来場歓迎)
27日(日) 久 田 観 正 会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了解下さい)

能「道成寺」狂言「花子」

4月26日名古屋能楽堂

尾州座春の公演

シテ方梅田邦久、笛方藤田六郎、兵衛、小鼓方福井啓次郎、狂言方野村又三郎の四氏は「尾州座」を結成、名古屋能楽堂の開場を祝して、四月二十六日(土)名古屋能楽堂で、初の「尾州座春の公演」を名古屋市と共催で開催する。

演目は、能「道成寺」と狂言「花子」の大曲の公演。

能「道成寺」赤頭は、シテ・梅田邦久、ワキ・宝生欣哉、笛・藤田六郎、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村隆一郎、太鼓・鬼頭喜太郎、地謡・観世能夫、大江将薫ほか。

狂言「花子」替装束はシテ野村又三郎、野村小三郎、松田高義。午後一時開演(十二時十五分開場)入場料五千元(全自由席)。

なお「道成寺」は梅田邦久氏が平成八年度名古屋芸術賞受賞の記念演能として所演。

平成8年度名古屋芸術賞

観世流梅田邦久氏

芸術特賞を受賞

名古屋での芸術創造活動の分野で優れた業績をあげた人、将来の活躍が期待できる人を対象にした平成八年度の名古屋芸術賞の受賞者が一月二十七日発表され、芸術特賞に能楽部門で観世流シテ方・梅田邦久氏(みづ)と日本舞踊の西川長寿氏(なが)が選ばれた。

芸術特賞は、長年にわたり優れた芸術活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった個人又は団体に贈られる賞。これまで能楽のジャンルでは、昭和五十一年に奨励賞佐藤友彦、五十四年特賞・井上松次郎、五十九年奨励賞・藤田六郎兵衛、六十二年特賞・野村又三郎、六十二年特賞・内藤泰二、平成二年奨励賞・久田徹二、平成六年奨励賞・河村真之介の諸氏が受賞している。

授賞式は二月十七日午後四時三十分から名駅前のホテル・キャッスルプラザで行われる。

〔梅田邦久氏の略歴〕
昭和六年六月八日生、和歌山市出身。昭和十四年八歳で初舞台。仕舞「春栄」。十八歳で片山九郎右衛門師に内弟子として入門。昭和三十年師範。三十三年「石橋」和三十年師範。三十六年「安宅」三十九年「道成寺」四十六年「望」四十七年「翁」五十八年「望」

名古屋能楽鑑賞会公演

4月12日 名古屋能楽堂

名古屋能楽鑑賞会は、名古屋能楽堂開館記念協賛事業として、四月十二日、名古屋能楽堂で「第五回鑑賞会」を開催する。

能「翁」(シテ栗谷能夫、三番山本東次郎、千歳・山本則直) 狂言「二人持」(山本泰太郎、山本則直、山本東次郎、山本則孝) 能「湯谷」(シテ友枝昭世、ツレ中村邦生、ワキ宝生閑)

入場料一万二千元、一万円、七千五百円。入場券はチケットぴあ、事務局(052・722・4000)



月「六十一」恋重荷「六十三」年「本都婆小町」披、昭和三十八年能楽協会名古屋支部に移籍、四十一名名古屋観世会代表。観世流総合指定保持者認定。六十二年能楽協会名古屋支部副支部長、能楽鑑賞会の企画・出演、中京地区各地の新能への出演、社会教育センター主催講座の講師として能楽の普及発展に尽くしてきた功績を顕彰。

現在所住名古屋市中区台町二丁目一六一五。

〔写真〕は「安宅」の梅田邦久氏

平成9年2月・3月放送

- (2月) NHK・FM能楽鑑賞
23日(日)「野 守」～観世流～ 木月 孚行
(3月) NHK・FM能楽鑑賞(午前8時～8時55分)
2日(日)「屋 島」～観世流～ 野村 四郎
9日(日)「鶯 願 寺」～宝生流～ 近藤乾之助
16日(日)「雲 雀 山」～喜多流～ 友枝 昭世
23日(日)「海 士」～金剛流～ 豊嶋 訓三
- 30日(日) 故人をしのんで
～関根直孝師、善竹圭五郎師～
「吉野天人」「八句連歌」ほか
- (3月) 教育テレビ
3月20日(木) 12時～午後1時
「鞍馬天狗」～宝生流～ 本間 英孝 森 常好
3月30日(日) 午後3時～4時
「花の狂言師・野村万斎」
「三番叟」「花子」ほか

大阪能楽養成会 第四回発表会

大阪能楽養成会は、昭和三十八年に発足、日頃の稽古に加え、年間一回の研究発表会を行っている。同会ではきたる三月十一日、大阪市中央区の山本能楽堂で本年度の「第四回発表会」を開催する。

午後六時開始、来場歓迎。

演能は次のとおり。

観世流能「石橋」(前・藤谷音弥、後・菊本澄代)
狂言「末広がり」(善竹隆司、善竹隆平、善竹徳一郎)
観世流舞臺子「那耶」パンシキ(シテ今村一夫)
観世流舞臺子「雲雀山」(シテ上田大介)

鳳の会公演

3月29日(日)いなかスクエア 鳳の会第十四回公演は、三月二十九日(土)いなかスクエア4階能楽台で催される。

狂言「粟田口」(井上祐一、大野弘之、井上靖浩)
狂言「貫舞」(佐藤友彦、佐藤融、井上礼之助)
午後三時開演、前売二千元(当日券二千五百円)学生千八百円、会員千二百円。

申込みは、名古屋女子大学・林研究室052・852・1111
1、ギャラリーA・C・S052・835・3780、井上芳05613・8・6430

演能案内

富耀会囃子会

二月二十三日(日)
午前九時四十五分始
熱田神宮能楽殿
丸 泉 嘉夫 柳原富司忠
一 頭 蝉
ほか囃子、連調など三十数番
主催 富 柳原富司忠 会

〔御来場歓迎〕

第27回大蔵狂言会なごや会

三月二日(日) 正午開演
熱田神宮能楽殿
狂言組
小舞 幼げしたる物 白山 彰紀
岩 飛 び 大蔵 教義

舟口真似
小舞 土 車 河合万津子
雷 山 野島 久代
餅 七つに成子 橋本 公子
酒 向井 理子

文 蔵
小舞 名 取 川 花井貞久子
海 道 下 丹 羽 節
鶏 琴 松田 陽子
小舞 餅 大蔵 基誠
若林 邦昌

吹 取
小舞 放 下 僧 大蔵 彌太郎
茶 壺 真船 道明 大蔵 彌右衛門
附 祝 言 主催 大蔵 狂言 会
代表 丹 二 大蔵 彌右衛門
指導 大蔵 彌右衛門 節 会

(入場無料)

三月雅日記

(177)

萬葉の花紀行 ①

えと文 二井栄逸

いわさくら

春の花の散るころまでには逢えずに
相見ぬは月日数(よ)みつ、
妹待つらむそ

これは、天平十九年の春、越中
淡紅色の可憐な花を開いたイワサ
クラを見て作った妻を恋うる歌で
す。

春の花が散るころまでには逢えず
にいるので、月日を数えながら、
妻は私を待っているであろうとい
う意味でしょう。

円状心臓型の葉をつけ、高さは
十五センチくらいです。野の植物



は、野にあってはじめて本当の美
しさをみせてくれますが、もう一
つふみこえて、いけることによつ
て、心を花の中に見出すことが出
来ればすばらしいことです。十年
前ばかり前に見た 京都の若寺の
幽明の境に出現した昔の中にイワ
ザクラを記して見たいと思います。

演能案内

第一回公演 関西観世花の会

三月二十七日(木)午後一時始
湊川神社神能殿

舞臺子	高	砂森 寿子	山本 孝一	上田 梧
松	風森 勝子	久田 輝一郎	野口伝之輔	
舞臺子	高	今村 一夫	寺沢 幸祐	山本 孝一
松	風森 勝子	橋本 光史	勝部 延和	野口伝之輔
舞臺子	高	今村 一夫	寺沢 幸祐	山本 孝一
松	風森 勝子	橋本 光史	勝部 延和	野口伝之輔
舞臺子	高	今村 一夫	寺沢 幸祐	山本 孝一
松	風森 勝子	橋本 光史	勝部 延和	野口伝之輔
舞臺子	高	今村 一夫	寺沢 幸祐	山本 孝一
松	風森 勝子	橋本 光史	勝部 延和	野口伝之輔

舞臺子	天	鼓	藤井千鶴子	山本 孝一
仕舞	花	波	山崎美紗子	藤井千鶴子
仕舞	井	月	池内 頼子	藤井千鶴子
仕舞	林	高	橋本 貞子	藤井千鶴子
仕舞	院	九	佐伯紀久子	藤井千鶴子
仕舞	林	純	佐伯紀久子	藤井千鶴子

能	衣	福王 和幸	山本 孝一
能	衣	福王 和幸	山本 孝一
能	衣	福王 和幸	山本 孝一
能	衣	福王 和幸	山本 孝一
能	衣	福王 和幸	山本 孝一
能	衣	福王 和幸	山本 孝一

〔入場料〕
全席自由席 六千円
取扱いチケットが(06・363・9999)神戸文化ホ
ル(078・351・3535)湊川神社神能殿(078
・371・1358) 出演楽師宅

能舞台の鏡板の松のこと

竹尾邦太郎

保証二年(一一三六)に始まる春日若宮祭(俗におん祭)に猿楽(現在の能)が参拝を命ぜられたのは、世阿弥のバロンとして知られる足利義満の時代である。応安七年(一三七四)には当時十二歳の世阿弥も父親阿弥と共に出陣したという。おん祭には様々な芸能集団が参拝するが、一の鳥居を通過する行列は一樹の老松の前に留まり、そこで芸の一部を奉納する。所謂「松の下」の式である。

この老松は神が降り移る依代(よりしろ)で、神の降臨、即ち神の面影が赴(面)向(向)いて来るところから影向(ようこう)の松と謂われ、古来神聖視されてきた。能舞台の背景となる鏡板の老松はこの影向の松を写したものであると言われる。

桃山城の遺構を移したとされる現存最古の西本願寺北能舞台の時代から数えても四百十餘年、能舞台といえは室町後期から江戸時代を通じて武家の御用絵師であった狩野派に則るパターン化された老松が描かれてきた。松に限らず樹齢を経た老樹

には、民族的にも神や霊が宿ると言えられたと畏敬されることによく知られており、就中松は、神の降臨を待つ木、祭りの神樹と崇められ、曲により役者が最初の謡を鏡板の松に向って謡うものがあるのも、その間の事情を説明するかもしれない。早近な例では、地鎮祭に一本の榊を立て、神の降臨を仰いで工事の安全を祈願するの儀式(型付・手付など)がある。

能・狂言は、現代風に言えばハードの、規格化された空間であるステージと、ソフトとしてのテキスト(型付・手付など)の二要素から成り立っている。

三本の若松との均衡も欠くことにならうか。何よりも、今後百年の歳月を重ねたとしても若松は依然として若松であって、六百年に亘り若松と築かれてきた老松の重なる伝統には馴染まない。

能・狂言は、現代風に言えばハードの、規格化された空間であるステージと、ソフトとしてのテキスト(型付・手付など)の二要素から成り立っている。

名古屋梅猶会定期能番組

三月十六日(日)午前十一時三十分始
熱田神宮 能楽殿

菊池 重輝
盛 飯本 幸
西村 信広
河村 信一
柳原 司忠
大野 誠

梅若 盛哉
高安 勝久
吉田 定男
福井 啓次郎
鬼頭 喜太郎
藤田 六郎兵衛

梅若 善高
梅若 善高
井戸 良祐
小松 勝一
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高

名古屋梅猶会

三月十六日(日)午前十一時三十分始
熱田神宮 能楽殿

菊池 重輝
盛 飯本 幸
西村 信広
河村 信一
柳原 司忠
大野 誠

梅若 盛哉
高安 勝久
吉田 定男
福井 啓次郎
鬼頭 喜太郎
藤田 六郎兵衛

梅若 善高
梅若 善高
井戸 良祐
小松 勝一
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高
梅若 善高

金剛流発祥之地

奈良県・斑鳩町の 龍田神社に顕彰碑

能楽シテ方の一流である「金剛流」の源流「坂戸座猪楽」が現在の龍田神社付近を本拠地として盛行されてきたことから、奈良県・斑鳩町では町制五十周年を記念して、かねて、金剛流の発祥地を記念する顕彰碑の建立をすすめてきたが、このほど完成、去る二月十一日、斑鳩町・龍田神社境内で除幕式典が行われた。

除幕式典は午後二時から、約五百人の参加者が見守るなか小城利重斑鳩町長、金剛流金剛流宗家、吉川斑鳩町議会議長、高田良信法隆寺管主、西条龍田神社宮司により除幕が行われ、小城町長のあいさつ、金剛流・金剛流氏(金剛永謙氏代読)、吉川町会議員らの祝辞が述べられた。

「坂戸座」は法隆寺に奉仕した演者集団が元祖とされており、室町時代には興福寺に奉仕する大和猿楽四座(結崎、円満井、外山、坂戸)の一つに数えられ、後に能楽シテ方の一流である金剛流となった。

ついで、神楽式は、翁・金剛嶽、千歳・細谷正美、三番叟・木村正雄、笛・杉和、小鼓・竹村英雄、大鼓・中村保彦、地謡・金剛永謙ほかの能楽師より奉納能が行われ、盛會に除幕式を終了、午後四時から斑鳩町役場で祝賀の宴が催された。

中世には龍田神社を中心に「龍田市」に守護神を迎えた寛元元年(一一四三)の祭礼で近隣住民により猿楽が演じられたことを示す「法隆寺々要日記」の記述に基づき、龍田神社に顕彰碑が建立され

「金剛流発祥之地」と刻まれている。顕彰碑は、御影石製、台座もふくめ高さ三・一六、幅二・三三。揮毫は金剛流宗家金剛嶽氏により「金剛流発祥之地」と刻まれている。



①金剛流金剛流宗家による奉納能②あいさつする小城斑鳩町長③祝辞をのべる金剛永謙氏

「あいさつ」

斑鳩町長 小城利重氏

斑鳩町は、世界文化遺産に登録された法隆寺、法起寺をはじめ中宮寺、法輪寺など歴史的文化遺産が町内に多く点在している緑豊かな自然に恵まれた町であります。このすばらしい歴史や自然環境を生かした町づくりを目指し「歴史と文化がくらしの中に息づく新斑鳩の里」をメーンテーマに掲げ21世紀を展望した町づくりを推進しております。

その一環として、当町とは大変関係の深い能楽金剛流の御協力をいただき毎年9月22日上宮遺跡公園で「太子ロマン斑鳩の里観月祭」を開催し当町の年中行事として、町内外の皆様方に歴史と伝統

金剛流宗家のあいさつ

大和の国には、古くより猿楽を演じる専門芸能集団が、いくつ

に培われ洗練された座芸能を満喫していただいているところであります。

当町にとって本年は、町制50周年の節目となる記念すべき年にあたり、金剛流の源流とされている「坂戸座猪楽」が龍田市を本拠地として盛行したことから龍田神社境内に「金剛流発祥之地」の碑を当町の町制施行記念日にあたる2月11日に建立することができました。この碑の建立に際しましては金剛流宗家をはじめご尽力くださいました多くの関係者皆様方に改めて深く感謝申し上げる次第であります。

これを契機として更に広く皆様方に斑鳩町の歴史、文化を知っていただくとともに、伝統芸能を広く紹介するなど、新たな観光振興に努めて参りたいと考えているところであります。

存在しており、大和猿楽と呼ばれております。坂戸郷と宮内郷、生駒郡平群町近を本拠地として、法隆寺に奉仕して参りました坂戸座もその一つで、室町初期には、春日興福寺に勤仕する大和四座の

一員でございました。のちの金剛流です。

坂戸と言われるのは現在のどこなのか、諸説ございまして、今一つ決めておきたいように思います。考えられる然るべき地の一つがあれば、流儀発祥の地として、何らかの形で顕彰したいと、かねがね思っております。

法隆寺と金剛流

法隆寺管主 高田 良信

猿楽の発祥については詳かでは無いが、中世のころには南都第一の勢力を誇っていた興福寺に参勤する「結崎」「円満井」「外山」「坂戸」の四座が成立していたとい

法隆寺の寺伝によると、猿楽の「延年の舞」は、その源流はわからないとしても古くから法隆寺で演じられてきたとする。とくに聖徳太子が斑鳩宮にお

「祥之地」の碑を建立する運びとなりました。場所と致しましては申し分ございせん。ここに至りましたのも、奈良金剛会の植田恭三の並々ならぬ努力と、町当局の暖かい高配の賜であり、流儀をあげて、心よりの感謝を致しております。

心の拠り所と致しまして、しばしば訪れ、永く祈念致したいと念願しております。

中世の法隆寺の記録書である「基元記」や「寺要日記」などには、十三世紀ころから猿楽などの芸能が法隆寺の境内や法隆寺の管轄下であった斑鳩新宮などで盛んに演じられていたという記事が見られる。それによると法隆寺では坂戸座の猿楽が法楽(神仏を供養するために行なわれた芸能)として演じられていた。

ところが法隆寺では、十世紀の初めころから東大寺や興福寺・仁和寺などの外部の有力寺院の僧が「別当職」(寺の代表権者)に補任することとなり、十一世紀の中ごろには完全に興福寺の管轄下に入っている。それは法隆寺の勢力が低下し、興福寺に支配されていたことを示すものと云わねばならない。つまり、そのころの法隆寺はかつて南都を代表する大寺院ではなかったことを意味している。むしろ興福寺の監督下にある中級の寺院であったことを理解すべきであろう。

とくに伽藍を修復する大工職などもすべて興福寺に所属する職掌が参画していたのである。それほどに、法隆寺はローカル色の強い寺院であり、そのような歴史観に立つて当時の法隆寺の真像を考える必要がある。

そのようなことから、中世に法隆寺で展開した学問や芸能などはそのほとんどが興福寺の影響を受けていたことに留意しなければならぬ。

幸い法隆寺には中世のころから寺内やその周辺で起こった事件などを伝える法隆寺文書が数多く伝わっている。その中に近年、新たに確認した天文十八年(一五四九)の「金剛大夫法楽之時日記」という記録がある。

それは天文十八年十月四日・五日に、法隆寺で金剛大夫(兵衛尉氏正か)が法楽能を演じたときの状況を詳しく記載したものである。まず、十月四日は聖徳太子への奉納能であり、太子をお祀りしている聖徳院の外陣で行なわれた。この日は公式の行事として、参列する僧侶たちの服装や席順なども細かく規定されている。とくに金剛大夫などへの禄物をはじめとする接待方法や聖徳院の舞台や寺僧た

ちの席順なども詳しく記されている。その翌日の五日には、この法楽能の担当者であった寺僧の機秀(宝潤房と云い、一五六九年に他界している)の生房である勝房(現在の観音院)という子院で金剛大夫による能が演じられている。この日の能の上演はきわめて私的な要素が強く、前日の聖徳院の法楽能のように寺僧たちの服装や席順などの規定はなく「衣文随意」とある。

とくに多くの人びとが土俵越しに能を観ている様子なども記されており、そのような記録からも前日の聖徳院のような厳格な雰囲気は感じられない。

この記録には四日は「翁」「魁波」「通盛」「楊貴妃」・五日は「興服」「掛辨慶」「羽衣」「通小町」が演じられていたことが記されており、演目などを具体的に知ることでめづらしい史料といえよう。

その後、天文二十一年(一五五二)四月十一日、天文二十四年(一五五五)五月十一日、弘治二年(一五五六)三月十九日にも聖徳院で法楽能が演じられていたことなども記録されている。

なお、これに先立つ大永五年(一五二五)には、法隆寺の根本荘園でもある播磨の斑鳩寺でも太子堂の屋根修養の法楽能が金剛大夫(四郎正清か)によって演じられたとする記録がある(「斑鳩引付」)。

法隆寺や別院ともいうべき斑鳩寺での法楽能も、おそらくは興福寺でおこなわれていた法楽能の影響を受けたものと考えられるが、これらの史料によって、室町時代になされた法楽能の有様をより具体的に知ることができるといえる。

このように「金剛大夫法楽之時日記」や「斑鳩引付」は、古くからの法楽能の実態と、法隆寺と金剛流との深い関係を示す貴重な史料といえよう。

〔斑鳩町発行「猿楽のふるさ」と〕

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)

電話(052)731-7984
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円
郵送の場合 1年1800円
— 部 100円

「名古屋能楽堂」が完成

多彩な記念行事を開催

4月3日こけら落とし

「名古屋に市立の能楽堂を」
との各界の要望にこたえ、平成
七年度から名古屋城正門前に建
設が進められてきた「名古屋能
楽堂」がいよいよ完成、四月三
日開館記念式典が行われ、こけ
ら落としの式典として、観世
宗家による「翁」が上演され
る。
また同日午後五時から、開館
を記念する「市民招待祝賀能」
が宝生宗家らの来演により「石
橋」が上演され、この地方の能
・狂言など芸能活動の新しい契
点として期待される。
名古屋能楽堂の落成を祝う催
しは、別項のように「舞台落成
祝賀能」(五日、六日)「開館
記念能楽大会」(七日～十一日
五日間)、さらに各界、団体に
よる開館記念協賛祝賀能が予定
されている。

名古屋能楽堂開館記念 式典 能

翁

観世 清和

三番野村又三郎
千歳観世 芳宏

面箱 野村小三郎

午後二時四十分始

一九九六年度(第四十七回)
芸術選奨の受賞者がこのほど文
化庁から発表され、古典芸術の
部門で、能狂言方・茂山千之丞
氏(七三)が文部大臣賞を受賞。
狂言「木六駄」などのすぐれた
活動が顕彰された。
授賞式は二十六日赤坂プリ
ンホテルで挙行政される。

茂山千之丞氏受賞

後見 観世 清和
後見 井上 祐一
松田 高義
大鼓 河村裕一郎
頭取 清水 晴水
脇取 大倉源次郎
鼓 久田舜一郎
地謡 高橋 謙一
中川 祖次郎
中川 雅正
中川 章邦
梅田 久二
梅田 邦久
梅田 徹二
武田 邦夫
武田 弘夫

名古屋能楽堂 演能カレンダー

- 【4月】
- 3日(木) ①開館記念式典能 (関係者のみ) ①面記事紹介
 - ②市民招待祝賀能 (招待関係者のみ)
 - 5日(土) 舞台落成祝賀能 (有料) (番組1月号既報)
 - 6日(日) 舞台落成祝賀能 (有料) (番組1月号既報)
 - 7日(月)～11日(金) 開館記念協賛祝賀能 (来場歓迎) (番組②③④⑤面)
 - 12日(土) 名古屋能楽選奨賞会能 (有料) (番組⑥面)
 - 13日(日) 「語る」をテーマにした講演と実験 (有料)
 - 19日(土) 「道成寺変相」 (有料)
 - 20日(日) 狂言のり座旗揚げ公演 (有料)
 - 26日(土) 尾州座春の公演 (有料)
 - 27日(日) 狂言&トーク (有料)
 - 29日(祝) 中日能 (有料)
- 【5月】
- 3日(祝・土) 名古屋啓尚会春季大会 (来場歓迎)
 - 5日(祝) 久田微二能りサイタル (有料)
 - 11日(日) 愛泉会大会 (来場歓迎)
 - 17日(土) 名古屋観世九草會能 (有料)
 - 18日(日) 狂言やるまい会 (有料)
 - 24日(土) たまも会 (来場歓迎)
 - 25日(日) 観衛会大会 (来場歓迎)
 - 31日(土) 青陽会定期能 (有料)

市民招待祝賀能

四月三日(木)
午後五時始

三本柱

太郎冠者 井上 友彦
次郎冠者 井上 増浩
三郎冠者 佐藤 融
後見 井上 松次郎
大野 弘之

石

樵夫 武田 孝史
白獅子 辰巳潤次郎
白獅子 宝生 英照
橋 寂照 高安 勝久
連獅子 大鼓 鏡世 元信
小鼓 井啓次郎 藤田 大郎兵衛

後見 寺井 良雄
佐野 山内 登生
台持 水大野 上友月 優順 聡生
地謡 東川 光夫
鬼頭 嘉夫
高橋 衣斐 正章
高橋 衣斐 正章
高橋 衣斐 正章

平成9年3月・4月放送

- 【3月】NHK・FM能楽鑑賞(午前8時～8時55分)
- 23日(日) 「海士」～金剛流～ 豊嶋 訓三
 - 30日(日) 故人をしのんで
～関根直孝師、善竹圭五郎師～
「吉野天人」「八句連歌」ほか
- 【3月】教育テレビ
- 3月30日(日) 午後3時～4時
「花の狂言師・野村万寿」
「三番叟」「花子」ほか
- 【4月】NHK・FM能楽鑑賞(午前8時～8時57分)
(4月より放送時間変更)
- 6日(日) 「熊野」～観世流～ 梅若 盛義
 - 13日(日) 「桜川」～宝生流～ 米定 康夫
 - 20日(日) 「望月」～観世流～ 木原 康夫
 - 27日(日) 「海人」～金剛流～ 豊嶋 訓三

広田後援会能

4月6日 金剛能楽堂

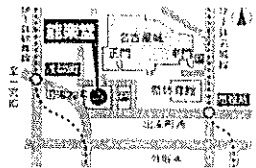
京都 八十八回広田後援会
能は四月六日(日)
京都・金剛能楽堂で開催され
る。番組は次のとおり。午後二
時始。
仕舞「三山」(広田泰三)
狂言「居杭」(茂山七五三、
茂山逸平、網谷正美)
能「真砂」(シテ広田泰能、
ツレ谷口宗義、ワキ谷田宗二朗、
ワキツレ原大、小林芳、笛・光
田洋一、小鼓・曾和尚、大鼓
・井林清一、太鼓・前川光長、
間・岩崎狂雲)
入場料 前売四千五百円(当
日券五千円) 学生券(当日券二
千円)
取り扱い 金剛能楽堂、松井
店、出演者宅、広田後援会(T
EL 075-781-1885)

六〇〇年の伝統、ここに息づく。

室町時代、観阿弥・世阿弥父子により
大成された能楽の世界
その伝統を受けつぎながら、
新しい風を感じさせる空間
伝統技術と、
先端技術が織りなす、
優美で風格ある姿
美しい伝統を守る人のため、
新しい文化の探求を惜しまない人のために、
この春に開館します



名古屋能楽堂 平成9年4月開館



〒460 名古屋市中区三の九一丁目1番1号
財団法人名古屋能楽堂協会
TEL (052)231-0038 FAX (052)231-8755

志月雅日記

(178)

萬葉の花紀行 ⑫

えと文 二井栄逸

ももよぐさ

生玉部屋(いくたまべのたり)が筑紫にあつて、遠く故郷にいる父母を想い、作った次のような歌があります。

父母が
殿の後(しりへ)の
ものもよぐさ
百代いでませ
わが来(きた)るまで

歌の意は「父や母の住むあの母屋の裏のももよぐさではないが、どうか百歳までお逢いで、私の帰るその日まで」と、父母を想う気持ちがよくあらわされています。

ももよぐさは、どの花をさして言ったのかさだかではありません。ツノクサ、リノウノウグク、ムカシモギ等と諸説があります。が、私はリノウノウグクを採用しています。

中日能、4月29日

能「紅葉狩」と「船弁慶」2部

名古屋能楽堂

中日新聞社、中部日本放送主催による名古屋能楽堂完成記念「中日能」が四月二十九日(祝)名古屋能楽堂で開催される。

【第一部】午後二時開演
解説・増田正造氏
舞臺子「高砂」八段之舞(大槻文蔵)
仕舞「笠之段」(武田宗和)「花笠」(藤井完治)「野守」(久田徹二)
一調「三井寺」(武田志勇、後藤孝一郎)
狂言「八句連歌」(山本東次郎、山本則直)

能「紅葉狩」鬼揃(シテ観世清和、ツレ浅見重好、津田和忠、上田公威、藤波重孝、藤波重孝、ワキ福王茂十郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・久田輝一郎、大鼓・安福建雄、太鼓・観世元伯、地謡・大槻文蔵、藤井完治ほか)
(第二部)午後六時開演
解説・増田正造氏

舞臺子「松風」戯之舞(武田宗和)
仕舞「賀茂」(上田貴弘)「玉之段」(岡久広)「藤原」(梅田邦久)
一調「山姥」(大槻文蔵、観世元伯)
狂言小舞「通園」(野村又三郎)能「船弁慶」重き前後之替・早装束(前シテ・観世清和、後シテ武田志勇、子方大槻一文、ワキ福王茂十郎、地謡藤井完治、武田宗和ほか)
料金 A席前売り八千円(当日九千円) B席前売り七千円(当日八千円)(各部料金、金指定席)前売券取り扱い(名古屋市内ブレイカイド、チケットぴあ)
中日新聞社文化事業部(TEL 052-221-0729)
中部日本放送事業部(TEL 052-241-8118)で発売。
中日新聞各支局・通信局・部・販売店でも取り次ぐ。



この薄紫の野菊を見ていると、藤左平の「野菊の墓」を思い出少年少女のはかない恋を聞いた伊しします。

第15回名古屋能楽鑑賞会

四月十二日(土)午後一時半始

名古屋能楽堂

解説 武蔵野女子大学教授 増田正造

能 翁 粟谷 能夫 三番三山本東次郎 千歳山本則直
大鼓 柿原 崇志
荒木 建作 笛 一噌 幸弘
小鼓 清水 晴祐
上田 敦史

狂言 二人袴 山本泰太郎
舞臺子 高 砂 粟谷 菊生 柿原 崇志 大蔵源次郎 一噌 幸弘
中村 邦生
友枝 昭世
谷 宝生 関 大倉源次郎 一噌 幸弘
栗谷 辰三 地謡 栗谷 充雄 栗谷 龍夫
高林 自年 三 栗谷 高林 栗谷 明生 栗谷 大作
栗谷 明生 栗谷 大作

湯 栗谷 辰三 地謡 栗谷 充雄 栗谷 龍夫
高林 自年 三 栗谷 高林 栗谷 明生 栗谷 大作
栗谷 明生 栗谷 大作

【有料】
臨時会員券 一万二千元
一般券 一万円
七千五百円
主催 名古屋能楽鑑賞会
事務局 名古屋市中区大幸4-19-26
電話(052)722-4000

名古屋能楽堂開館記念能楽大会

〔初日〕 四月七日(月) 午前十時始

名古屋市中区三の丸一丁目一番一号

名古屋能楽堂 電話 〇五二(三三)八〇六四

(※地謡一部氏名省略)

<p>〔七彩色〕 高野物狂道行 破辺 千恵 丸山 圭 雲林 院ヶせ 芥川 紀子 五島 石川 一子 山 綿キリ 津田 節哉 綿キリ 久保 一芳</p>	<p>〔舞臺子〕 松 虫 中尾 和子 水谷 文雄 藤本利三郎 〔喜楽会〕 蟬 丸 岩本 裕彩 野田 貞 飯田 しの 加藤 千鶴 藤田 きね</p>	<p>〔和謡会〕 草紙 洗 山内悠太郎 村キリ 伴 定子 花月 依田 佳子 網ヶせ 長瀬 三枝子 紅葉 柿野 光子 虫ヶせ 塚本 照子 右近 荒川 倭子 松</p>	<p>〔仕舞〕 高砂 山内悠太郎 村キリ 伴 定子 草紙 依田 佳子 網ヶせ 長瀬 三枝子 花月 柿野 光子 虫ヶせ 塚本 照子 右近 荒川 倭子 松</p>	<p>〔日和会〕 雲雀 山 安岡美知子 川ヶせ 小島加代子 黒山 森田 俊枝 狸 々 近藤 翠</p>	<p>〔たまたも会〕 桜 神村美智子 高木アイ子 川 神村 豊徳 小水 浩司 青山 博子 神村 美智子 小水 浩司 青山 博子</p>	<p>〔たまたも会〕 春日竜神 水野すま子 三 山 金児 晶子</p>	<p>〔宝生〕 紅葉狩 川 本 隆美 高木アイ子 水野すま子 三 山 金児 晶子</p>	<p>信長幸若舞 盛 中村 邦生 水谷 文雄 藤本利三郎 今村 正淳 高木アイ子 稲川 久一 高木アイ子 山守 美久 高木アイ子 水谷 美久 高木アイ子</p>	<p>小鼓連 草田 紙 洗 衣 村 小鼓 幸 友 会 大野 誠 大鼓 寛 敏 一</p>
<p>〔舞臺子〕 八 山 松尾 純夫 池田 泰次郎 堀部 通良 三学 山口 和史 鈴木 紅 勝美 次郎 大石 福三郎 近藤 成夫 大石 福三郎 近藤 成夫</p>	<p>〔安城〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>	<p>〔舞臺子〕 草紙 洗 山本 芳枝 高須 志津子 若杉 美枝子 高須 志津子</p>

企画運営 能楽協会名古屋支部

【三日目】

四月九日(水)午前九時半始

名古屋能楽堂

独吟(松韻会) 巻 進 帳 加野昭二郎 松本 順一

仕舞(松韻会) 巻 高 輪 之 紗キリ 杉本 優

羽衣 高木由緒 齊藤由里子 吉村隆子 神吉弘子 山本多津子 浅野和子 水谷やす江 奥田ひふみ 小出山 大岩野 金田昌子 阪田 常美 濱田城海子 上野 美穂 田村富士雄

花 丸 舞(中日文化センター) 鈴木千鶴子 奥村 妙子 佐藤千鶴子 佐藤千鶴子 佐藤千鶴子

花 舞(中日文化センター) 丸 舞(中日文化センター) 丸 舞(中日文化センター)

桜 舞(南和区社教・能楽の集い) 川 舞(南和区社教・能楽の集い)

雪 舞(南和区社教・能楽の集い) 村クセ 新海美枝子 若キリ 西川 嘉子

小 舞(中日文化センター) 加藤 照代 河村 和子 志水 芳子 地謡 富永 豊子 吉川 崇 横江 美貴子

鞍馬天狗 舞(南和区社教・能楽の集い) 村クセ 山本 道子 衣キリ 加藤 富美 渡ケセ 浅野 和子

熊 舞(南和区社教・能楽の集い) 野 舞(南和区社教・能楽の集い)

熊 舞(南和区社教・能楽の集い) 野 舞(南和区社教・能楽の集い)

熊 舞(南和区社教・能楽の集い) 野 舞(南和区社教・能楽の集い)

熊 舞(南和区社教・能楽の集い) 野 舞(南和区社教・能楽の集い)

草子洗小町 舞(南和区社教・能楽の集い) 田中 光子 松浦 栄子

葛班 舞(南和区社教・能楽の集い) 正キリ 東条 佳子 盛クセ 小出 美智子 女クセ 古沢 ひさ子

花 舞(南和区社教・能楽の集い) 独 舞(南和区社教・能楽の集い)

熊 舞(南和区社教・能楽の集い) 野 舞(南和区社教・能楽の集い)

熊 舞(南和区社教・能楽の集い) 野 舞(南和区社教・能楽の集い)

熊 舞(南和区社教・能楽の集い) 野 舞(南和区社教・能楽の集い)

蝉 舞(和韻会) 丸 舞(和韻会) 丸 舞(和韻会)

西行 舞(和韻会) 班 舞(和韻会) 班 舞(和韻会)

小袖曾我 舞(和韻会) 高 舞(和韻会) 高 舞(和韻会)

賀 舞(和韻会) 茂 舞(和韻会) 茂 舞(和韻会)

嵐 舞(和韻会) 山 舞(和韻会) 山 舞(和韻会)

松 舞(和韻会) 風 舞(和韻会) 風 舞(和韻会)

【四日目】

四月十日(木)午前九時四十分始

名古屋能楽堂

丸 舞(和韻会) 丸 舞(和韻会) 丸 舞(和韻会)

西行 舞(和韻会) 班 舞(和韻会) 班 舞(和韻会)

小袖曾我 舞(和韻会) 高 舞(和韻会) 高 舞(和韻会)

賀 舞(和韻会) 茂 舞(和韻会) 茂 舞(和韻会)

嵐 舞(和韻会) 山 舞(和韻会) 山 舞(和韻会)

松 舞(和韻会) 風 舞(和韻会) 風 舞(和韻会)

弱法師	白楽	天明	小	高松	粘内	田	狸	嵐
折田 育枝 吉村 一子 杉山 一子 加藤 春一 酒井 信子 平塚 昭子 河村 文子	鈴木 幸子 村瀬 美子 加藤 証一	鈴木 幸子 村瀬 美子 加藤 証一	北村 利弥 後藤 孝一 後藤 孝一 後藤 孝一	阿部 文恵 桑原 紀子 阿部 文恵	川久保 彰礼 原田 一平	米田 真理 伊藤 寛子 吉武 美代子 有海 文江	日比野 啓巳 伊豆 合三 近藤 幸三 高木 三男	山内 弘正 小川 正司 北川 正司 山本 正司 吉野 正司 久保 正司 太田 正司 大田 正司 後石 正司 内田 正司 小野 正司 後藤 正司 小野 正司 後藤 正司

魚根	鬼瓦	重喜	因幡	雷山	盆山	宵煉	小	玄	鴉	中之舞	独吟	桜	羽衣
伊藤 葉子 鈴木 雅晴 木村 進	岡本 和彦 石塚 恵子	矢田 三千代 藤田 茂樹 安原 美枝 角岡 淑子	市川 達 長給 幸雄 増山 幸司 コルク・マル 丹辺 文彦 小野 豊子	河村 真之介 柳原 富司忠 河村 真之介 柳原 富司忠 河村 真之介 柳原 富司忠	河村 真之介 柳原 富司忠 河村 真之介 柳原 富司忠	河村 真之介 柳原 富司忠	柳原 富司忠	柳原 富司忠	河村 真之介 柳原 富司忠	河村 真之介 柳原 富司忠	伊藤 巧 寺野 伊藤 寺野 伊藤	山本 孝子 後藤 迪夫	飯塚 恵理人 高橋 宏正 高橋 久子 伊藤 秀子 高橋 秀子

西行	盛	熊	連	若	雪	小
加藤 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子	志水 志津枝 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子	岩本 道子 加藤 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子 高木 美智子	朝日カルチャーセンター 泉・後藤教室	長坂 富代 市川 光文 松井 文子 坪井 美歌 吉原 晴美	長坂 富代 市川 光文 松井 文子 坪井 美歌 吉原 晴美	長坂 富代 市川 光文 松井 文子 坪井 美歌 吉原 晴美

〔五日目〕 四月十一日(金) 午前九時半始

名古屋能楽堂

附祝言

永年にわたりご愛顧を賜りました西川企画は、このたび三月よりその業務を東海ビデオシステムに移管することいたしました。長い間のご厚情誠にありがたく御礼申し上げます。東海ビデオシステムは、優秀な人材と人材を持ち、名古屋で活躍している会社で必ずや皆様のご期待にそえるものとご推薦いたします。何卒西川企画と同様に愛顧賜りますようお願い申し上げます。

平成九年三月吉日

代表 **西川 敏三**

ビデオプロダクション 西川企画

高砂 大坪由紀子	河村 裕一	助川 希夫
八段之舞	河村 裕一	助川 希夫
海士 内藤 悦子	河村 裕一	助川 希夫
羽衣 西尾 静枝	河村 裕一	助川 希夫
高砂 小島 英子	河村 裕一	助川 希夫
若キリ 川島千代子	河村 裕一	助川 希夫
高砂 橋本 桂	河村 裕一	助川 希夫
胡蝶 橋本 桂	河村 裕一	助川 希夫
連吟(龍泉会)	河村 裕一	助川 希夫
鶴之段	河村 裕一	助川 希夫

このたび西川企画様よりビデオ関連業務の移管を受けました。

永年の経験と知識を生かし、皆様方に心よりご満足が頂けるよう一層の精進をいたす所存でございます。

今後ともご指導の程、宜しくお願ひ申し上げます。

代表取締役社長 **鶴 見 俊 成**

業務担当部長 **岡 田 一 男**

名古屋市中区上筒井2丁目14-15(千代)

TEL 052-322-1654
FAX 052-322-6638

熱田神宮能楽殿催能

Table of festival dates and programs. Includes dates like 20日(祭) and 30日(日) with corresponding event names like 幸友会春の会 and 恵福会大の会.

異 会 大 会

能 殺 生 石

四月十二日(土) 十時半始
熱田神宮能楽殿
高安 勝久 後藤孝一郎 竹内 澄子

名古屋観世会定式能(三回)

四月十三日(日) 十二時半始
熱田神宮能楽殿
主演名 古 屋 巽 会

能 忠 度

片山慶次郎 谷田宗二郎 河村繪一郎 竹市 学
後見 小島 一英 地謡 高島 良一 古橋 正邦

能 兼 平

梅ヶ枝 山本 順之 今村 嘉勇
親世安壽子 梅六 若郎 松田 高義 後見 奥津健太郎

能 萬 安

高安 勝久 寛 敏一 助川 龍夫
法梁之舞 野村小三郎 柳原富司忠 藤田六郎兵衛

名古屋 猶 誦 会 春 の 大 会

四月十九日(土) 十時三十分始
熱田神宮能楽殿

素外 神 歌 熊沢 光俱 小松 勝憲
素外 神 歌 三木 秀雄 井戸 和男
連吟 草子洗小町 下郷 裕子

初春から早春の舞台

「鳳の会」「大阪梅猶会」と
「宝生会」「観世会」

「松子」近年狂言共同社が
後のために手掛ける連曲の一。
曲名は室町期の年賀の門付け芸で

「太郎冠者お盆を持て」の男・忠
三郎の声に、太郎冠者・幸生の方
を盗み見る無邪気は、男からの返
返に元氣一杯、「これおこせ。
一つ注げ」といかに嬉しそうに
のが初々しい。ほのぼのとした穿
囲気の親・忠重と稚気の残る舞に
剪の鷹揚が旨く絡み気韻々々。
(31分)

親世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替 00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替 01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (052) 731-7984

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

〔4月〕

- 26日(土) 尾州座春の公演 (有料)(番組①面)
- 27日(日) 狂言&トーク (有料)
- 29日(祝) 中日能 (有料)(番組①面)

〔5月〕

- 1日(木) 中日文化センター翠詠会大会 (番組②面)
- 3日(祝・土) 名古屋啓尚会春季大会 (来場歓迎)
- 5日(祝) 久田徹二能リサイタル (有料)(番組②面)
- 11日(日) 壺泉会大会 (来場歓迎)(番組②面)
- 17日(土) 名古屋親世九草会能 (有料)(番組②面)
- 18日(日) 狂言やるまい会 (有料)(番組②面)
- 24日(土) たまも会 (来場歓迎)(番組②面)
- 25日(日) 名古屋親衛会大会 (来場歓迎)(番組②面)
- 31日(土) 青陽会定期能 (有料)

熱田神宮能楽殿催能

〔4月〕

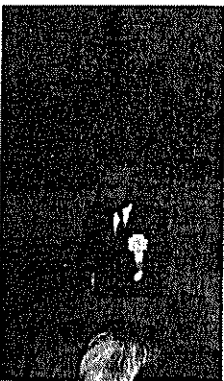
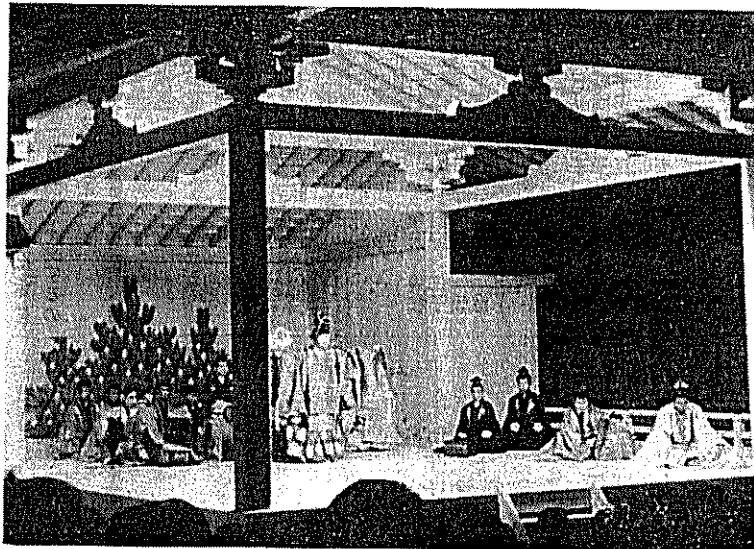
- 27日(日) 久田親正会 (来場歓迎)(番組②面)

〔5月〕

- 18日(日) 名雅会25周年記念会 (来場歓迎)(番組②面)

〔6月〕

- 5日(木) 熱田祭奉納能 (来場歓迎)



名古屋能楽堂 こけら落とし

平成六年秋に着工以来建築が進められてきた「名古屋能楽堂」は平成九年二月竣工、その開館記念式典が四月三日午後二時から行われ、建設経緯報告ののち、主催者を代表して、西尾武喜名古屋市長は「名古屋は尾張徳川家の城下町として、芸能の分野では『芸どころ』をみたく、文化的風土に根づいた芸能を愛する人々の熱意と相まって建設の運びとなった。伝統芸能の拠点、文化交流の場として市民に愛され、名古屋城と一体となった国際観光都市として幅広い分野

「道成寺」上演相づく

5月、6月の名古屋能楽堂

名古屋能楽堂の開場を祝し、尾州座春の公演として親世流能「道成寺」(シテ梅田邦久師)が四月二十六日の公演にひきつづき、五月五日には親世流久田徹二師による「道成寺」が公演(番組②面)さらに六月一日には、名古屋清韻

寺」が記念公演として上演、現代に生きつづける「道成寺」の芸能が多面的に披露されており、演能としても、四、五、六月と連続して「道成寺」が所演されることになる。

なお「大槻秀夫七回忌追善能」には能「恋重荷」(シテ泉嘉夫師)狂言「薩摩守」(シテ野村又三郎師)も上演。問い合わせは大規模能楽堂(電話06・761・8055)

支部長に 泉 嘉夫氏

能楽協会名古屋支部(野村又三郎支部長)は、このほど役員改選を行い、平成九年度の役員を次のとおり決定した。(敬称略)

〔支部長〕泉 嘉夫
〔副支部長〕井上祐一、衣斐正宣、久田徹二
〔常務員〕祖父江修一、松山幸親、近藤幸江、竹内澄子、百々康治、前田茂穂、長田颯、飯富雅介、

一色町で能 面、装束展

5月17、18日2日間

四百五十年の伝統を誇る三重県の一色町を保持する一色町能楽保存会(土倉喜八郎会長)は、きたる五月十七日(土)と十八日(日)の二日間、一色町史作成委員会との共催により、一色町有史以来の能面四十一点のほか、能装束、小道具類、能番組ならびに古文書関係書類を一色町公民館で公開展示する。

能面、能装束、小道具類は三重県の有形文化財に指定されており一色町の伝統を知るうえで貴重な出展である。入場無料。

展示時間は、五月十七日は午前十時から午後八時まで、十八日は午前十時から午後五時まで、会場の一色町公民館は、近鉄宇治山田駅よりタクシーで約十二分バスは伊勢市駅より一時間二分。問い合わせ先 土屋喜八郎氏宅、電話0596・22・1720

尾州座春の公演

四月二十六日(土)午後一時開演

名古屋能楽堂

仕舞 船 番 組
若キリ 親世 眺夫
慶キリ 泉 嘉夫
野村又三郎 松田 高義
野村小三郎 後見 井上 祐一
佐藤 友彦

能道成寺

梅田 邦久

附祝言

共催 尾州座
後藤孝一郎、梅田邦久、福井啓次郎、藤田六郎兵衛、河村総一郎、助川龍夫、柳原富司忠
〔相談役〕井上松次郎、鬼頭喜太郎

中日能

四月二十九日(祝) 一部 午後二時始

名古屋能楽堂 二部 午後六時始

〔入場料〕
五千円(全自由席)

尾州座同人梅 田 邦 久
福 井 啓 次 郎
藤 田 六 郎 兵 衛
野 村 又 三 郎

狂言八句連歌

一調三井寺

山本東次郎 山本 則直
後藤孝一郎

能紅葉狩

鬼前

福本 幸治 安福 建雄 親世 元伯
山本 順三 久田 啓一郎 藤田 六郎兵衛
山本 則直 松山 幸親 藤井 文治
須部 敬彦 岡大 文治
後見 武田 宗和 高橋 敬彦 岡大 文治

〔二部〕

舞臺子 松 解説 増田 正造
風 武田 宗和 福井啓次郎 藤田 六郎兵衛
劇 賀 五之段 戸 上田 貴弘
梅田 邦久 元伯
大槻 文蔵 親世 元伯

狂言小舞通

一調山姥

野村又三郎 地謡 野村小三郎
後見 松田 高義

能船弁慶

早装束

福本 幸治 安福 建雄 親世 元伯
山本 順三 久田 啓一郎 藤田 六郎兵衛
野村小三郎 後見 松田 高義

〔料金〕A席 前売八千円、当日九千円
B席 前売七千円、当日八千円(各都料金、全指定席)
取り扱い各アレイガイド、チケットぴあ、中日新聞文化事業部
(電話052・221・0729)

五月雅日記

(178)

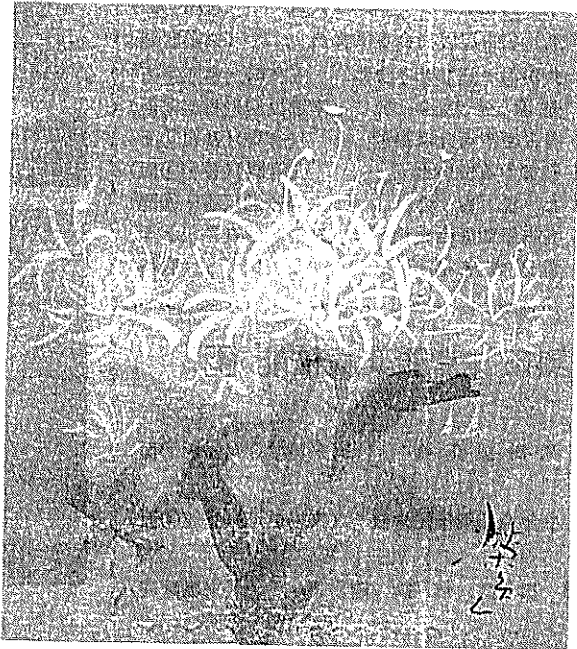
萬葉の花紀行 ⑩

えと文 二井栄逸

はまゆう

み熊野の
浦の浜木綿(はまゆう)
百重(もも)なす
心は思(も)へど
直(ただ)に逢はぬかも——
百重なす浜木綿のようにわたしの心は、あのおひとへの想いでいっぱいです。
それなのに会うことが出来ない

とほ……
浜木綿に託した恋心を詠んだ柿本人磨の歌です。
浜木綿は、ひがんな科の常緑多年草で、暖地の海岸に自生しています。高さは約50センチで、葉は長く、幅広でオモトに似ているのでハマオモトの名もあります。が、ほんとうは、この花は木綿(ゆう)のように白く下垂するのでこの名がある理です。



本綿はコウソウの皮の繊維を蒸(む)して水にさらし、細かく裂いて糸のようにしたものを言います。
黒潮の押し寄せる七月の暑い盛り、白々と咲きつゞくはまゆうの群生は、白日夢の映像を見るようにファンタスティックです。

名古屋能楽堂 完成記念に出演の会

五月一日(木)十二時半始

名古屋能楽堂

番	組	名	古	屋	能	楽	堂
海外仕舞高	砂	生駒	里	翠	地謡	前沢	今沢
素踊 竹生島	足立	東	藤	木	只	夫	
仕舞花	月	北	川	西	山	小	田
	北	山	小	田	西	山	小
	北	山	小	田	西	山	小
	北	山	小	田	西	山	小

名雅会二十五周年の記念会

5月18日 熱田能楽殿
観世流・名雅会(中川雅章師主)

等)は、こゝろ二十五周年を迎えきたる五月十八日(日)熱田能楽殿で記念会を開催する。

「正尊」「卒都婆小町」はじめ舞囃子、連吟、仕舞など三十数番。午前九時始(番組④面掲載)

羽衣

後藤 誠

仕舞 竹生島	丸	山	山	山	山	山	山
歌 屋 蝶	丸	山	山	山	山	山	山
舞囃子 草子洗小町	丸	山	山	山	山	山	山
蝶	丸	山	山	山	山	山	山

仕舞 草子洗小町	丸	山	山	山	山	山	山
蝶	丸	山	山	山	山	山	山
舞囃子 草子洗小町	丸	山	山	山	山	山	山
蝶	丸	山	山	山	山	山	山

平成9年4月・5月放送

(4月) NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時~8時57分)
(4月より放送時間変更)

20日(日)「望月」 ~観世流~ 木原 康夫
27日(日)「海人」 ~金剛流~ 豊嶋 訓三

(5月) NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時~8時57分)

4日(日)「求塚」 ~観世流~ 坂井 音重
11日(日)「雲林院」 ~宝生流~ 田巻 利夫
18日(日)「湯谷」 ~喜多流~ 友枝 昭世
25日(日)「草子洗小町」 ~観世流~ 浦田 保利

NHK教育テレビ
日本の伝統芸能・能狂言鑑賞入門
日曜日(4週連続) 午前7時~7時30分
再放送: 翌週水曜日 午後3時~3時30分

5月11日「狸々」 五流の演能を紹介
5月18日「恋重荷」 (-) シテ 片山九郎右衛門
5月25日「恋重荷」 (-) シテ 片山九郎右衛門
6月1日 狂言「佐渡狐」 シテ 茂山 忠三郎

(このほかのテレビの放送未定)

第10回記念 久田徹ニリサイタル

五月五日(祝・月)午後二時始

道成寺

久田 徹二

赤頭	中之段	五段之舞	井上 祐一
後見	笠田 裕	地謡	馬場 孝男
後見	笠田 裕	地謡	馬場 孝男
後見	笠田 裕	地謡	馬場 孝男

仕舞 草子洗小町	丸	山	山	山	山	山	山
蝶	丸	山	山	山	山	山	山
舞囃子 草子洗小町	丸	山	山	山	山	山	山
蝶	丸	山	山	山	山	山	山

壺泉会大会

五月十一日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

素踊 鈴	独吟	木	橋本不二子	前川 修
素踊 鈴	独吟	木	橋本不二子	前川 修
素踊 鈴	独吟	木	橋本不二子	前川 修
素踊 鈴	独吟	木	橋本不二子	前川 修

素踊 正	起請文	大池 長人	戸松 博史
素踊 正	起請文	大池 長人	戸松 博史
素踊 正	起請文	大池 長人	戸松 博史
素踊 正	起請文	大池 長人	戸松 博史

仕舞 卒都婆小町	丸	山	山	山	山	山	山
鼓	丸	山	山	山	山	山	山
鼓	丸	山	山	山	山	山	山
鼓	丸	山	山	山	山	山	山

〔御来聴歓迎〕
名古屋能楽堂
電話 052-832-3185

名古屋観世九奉会定例能(2回)

五月十七日(土)午後一時始
名古屋能楽堂

能半 駒瀬直也 杉江元 吉田定男 大野誠
 狂言茶 壺 佐藤友彦 井上礼之助
 仕舞兼 平 小林喜久
 草子洗小町 高木美智子
 善知鳥 高橋一
 景清 観世喜之
 中所 宜夫
 親世 喜正
 能善 飯富 雅介 河村松一郎 助川 龍夫
 附祝言 福井啓次郎 藤田大郎兵衛

〔入場料〕
 三回分(自由席券)一万三千五百円
 当日券(自由席券)五千円、学生券二千円

第40回 狂言やるまい会公演

五月十八日(日)午後一時三十分始
名古屋能楽堂

栗猿 野村小三郎 奥津健太郎
 養焼 松田高義 大矢梨紗子
 野村万作 井上礼之助
 茂山忠三郎 安東 伸元
 茂山 良鶴

業平餅 野村又三郎
 野村小三郎
 井上 靖浩
 佐藤 友彦
 野村小三郎
 野口 隆行
 奥津健太郎
 藤波 充
 野村 万作

主催やるまい会
 事務所 名古屋市中区伊勢山二丁目六一七
 東雲会館2階

〔入場券〕前売S券 六千五百円(当日七千円)
 A券 五千五百円(当日六千円)
 B券 四千円(当日四千五百円)
 C券 (学生、外国人優先) 前売千五百円(当日二千円)

第九回 たまも会

五月二十四日(土)午前十時始
名古屋能楽堂

素謡高 神村美智子 西澤 康夫 平松伊佐子
 素謡右兼 藤田 慎子 坂倉 一生 高木アユ子
 水野すま子 杉浦 小樹 山崎 博司
 丸近平砂 水野すま子 藤田 慎子 杉浦 小樹
 連吟鞍馬天狗 酒井 一史 松本 光三
 水野 敏子 藤野 敏子 三橋 久三
 平野 尚美 酒光 尚美
 能鶴 金児 晶子 杉江元 河村真之介 助川 龍夫
 井上 祐一 福井啓次郎 竹市 龍夫

連吟小袖曾我 河田直徳 小川 正敏
 坂野 久枝 三橋 茂三
 青川 山本 長津 忠美
 河村真之介 福井啓次郎 助川 龍夫
 河村真之介 福井啓次郎 助川 龍夫
 河村真之介 福井啓次郎 助川 龍夫
 河村真之介 福井啓次郎 助川 龍夫
 河村真之介 福井啓次郎 助川 龍夫

連吟百 酒井 一史 三 花山 慎子
 平松伊佐子 女 山崎 博司
 山本 久恵 藤川 美代子 丹羽 一治
 永田 照子 藤川 美代子 北原 三郎
 山本 久恵 藤川 美代子 北原 三郎
 山本 久恵 藤川 美代子 北原 三郎
 山本 久恵 藤川 美代子 北原 三郎

〔御来場歓迎〕
 三重県一志郡一志町田尻七〇〇番地
 TEL(052)二九三-一五〇五六

名古屋観世大会

五月二十五日(日)午前十時始
名古屋能楽堂

素謡土蜘蛛 竹内美紀子 稻葉 正信
 吉野 天人 河合 温子
 草子洗小町 春日井以久子
 安宅 水谷 圭子
 郭アト 甘粕 良枝
 放 下 石黒 鏡子
 井 衣 伊藤 秀子 吉田 定男 鬼頭喜太郎
 杉野 伸江 吉田 定男 鹿取 希世
 菊 童 駒形賢洋子 吉田 定男 鹿取 希世
 天 胡 太 奥村 泰広
 独吟 木 鼓 福井 啓次郎 藤田 大郎兵衛

熱田神宮能楽殿演能案内
 四月二十七日(日)午前九時半始
 熱田神宮能楽殿

仕舞通 小町 保
 高橋喜久子
 経 盛 杉原 優子
 輪 堀江 達雄
 老 村井すみ子
 前川千鶴子
 前川 康子
 前川 幸子

〔御来場歓迎〕
 主催 久田 観正 会
 久田 徹二

須磨源氏

豊住 雅子 寛 敏一 鬼頭喜太郎
 湯浅 知子 柳原富司忠 鹿取 希世

素謡木 通 中川 芳子 寛 敏一 鹿取 希世
 西行 桜 川久保彰礼 後藤孝一郎 鹿取 希世
 杖之舞 山中 節子 寛 敏一 鹿取 希世
 松 風 足立泰々子 寛 敏一 鹿取 希世
 伊藤 健一郎 河村松一郎 藤田大郎兵衛

〔御来場歓迎〕
 主催 名古屋観世会
 指導 山本 正花 会
 指導 山本 博 通

仕舞三 輪 平野 裕子
 遊 柳ケセ 神谷 功
 吉田 定男 竹市 学
 吉田 定男 竹市 学
 吉田 定男 竹市 学
 吉田 定男 竹市 学

〔御来場歓迎〕
 主催 久田 観正 会
 久田 徹二

熱田神宮能楽演能案内

名雅会二十五周年記念会

五月十八日(日)午前九時始

熱田神宮能楽殿

素謡 神歌

夕顔 内藤ヤス 楠木 喬
並之段 西田敬一 東 北ケ内田 清志
今井 暹 暹 々々 長尾 明夫

素謡通 盛 鶴森 陽雄 安藤 勝義
鈴木 信孝

連吟 玉之段 松岡紀久子 沢村千代子
市橋ひで子 酒井たま子
深尾 祐子 猪野間たづ子

素謡俊 成盛 古橋 佳和 飯沼加道利
高木 守 今井 暹

仕舞三 藤 英子 網 之 段 飯沼加道利
女郎 花 吉村千代子

素謡藤 戸 加藤 晋也 内田 清志
松崎 勝

舞獅子 難 波 野村 昌宏 河村総一郎 鬼頭喜太郎
五段 後藤嘉津幸 鹿取 希世

熊 野 伊藤 栄子 河村真之介 竹市 学
村雨留

素謡恋 重 荷 藤井 昭道 高木 守
山田 善晴 岡田 川 渡辺 守

仕舞 昭 君 安田 範之

連吟半 部 奥田 藤夫 小林 秀男
吉田 好隆 牧川 敬造
奥田 昭吉 黒木 利夫

屋 島 辻 實男 今井 郁男
島倉 光次 今井 富久
岡崎 信夫 野村 明三

田 村 今井 永三 河村総一郎 鹿取 希世
森田松右衛門 木下喜代明 後藤嘉津幸 鬼頭喜太郎
加藤 久登 柳原直司忠 竹市 学

舞獅子 卷 絹 生田 咲子 河村総一郎 鹿取 希世
河村真之介 鬼頭喜太郎

須磨源氏 加藤万由子 柳原直司忠 竹市 学
五段 藤原 義雄

正 子方生田 咲子 河村真之介 鹿取 希世
袖和戸谷 保雄 義雄 西田 敬一 古橋 佳和

舞獅子 梅 枝 幅 敏明 河村真之介 竹市 学
河村総一郎 鹿取 希世

遊行 柳 伊藤キクエ 柳原直司忠 鹿取 希世
青柳ノ舞

卒都婆小町

横井 啓三 額 道彦

舞獅子 羽 衣 片多 初子 河村総一郎 鹿取 希世
和合之舞 後藤嘉津幸 鬼頭喜太郎

天 鼓 島倉 たか 河村総一郎 鹿取 希世
朝原直司忠

連吟 杜 若 龍雄 大石 原彦
河崎 幸子 飯沼 定男

舞獅子 敦 盛 額 道彦 河村真之介 竹市 学
後藤嘉津幸 鹿取 希世

胡 蝶 鈴木 信孝 河村真之介 鬼頭喜太郎
柳原直司忠 竹市 学

連吟 小袖曾我 西園喜美子 片多 四郎
田中 賀子 高木 正徳

番外 舞 中川 雅章 (終了予定 五時半頃)

主 演 名 中川 雅章

〔時間ノ都合ニヨリ素謡ノ一部省略〕

〔来場歓迎・入場無料〕

「九阜会」と「梅猶会」

竹尾 邦 太郎

「老松」 左遷の菅公を慕い飛來の梅と後を追った松の世話をす老若二人、シテ殿一とツレ英明の離面ぶりは如何にも神木と崇める敬神の篤さ、それ故に紅梅殿を氣弱く飛梅と呼ぶワキ梅津某、勝久の無慮感をたしなめる問答は少々重苦しいが、対照的に老松の事を云う初同(喜久三郎)では、「老松と御免せぬ、とワキに向き、へ神慮も如何、と沈んで下二居立つところ、ワキの反応の遅さに焦れて咎めるふやが面白い。

梅と松の故事を云うクセは、へ松を大夫と申すなり、とワキへのアシラヒに得意を見せ、へ天満つ空も、と立ち中入。送り笛(六郎兵衛)が松を吹く風の趣なら、アイ門前ノ者・高儀の居語の明快は立板に水の爽やかである。

後は面敷尉・白垂・濃煎黄大口に茶拾符衣の色合は老松の幹と葉の色、大柄なシテに映えるが初冠に松は翳さない。へ空澄み渡る神かぐら、と右ウケて高く指して開くところに心持を示し、へ歌を謡ひ舞を舞ひ、は興寄気味だったか、選擇掛りの真ノ序ノ舞は悠々緩

岡崎城 清誦会 舞と能の夕べ

五月二十三日(金)二の丸能楽堂

清誦会(清沢一政師主宰)は、五月二十三日(金)岡崎城二の丸能楽堂で「舞と能の夕べ」を開催する。入場無料、来場歓迎。

〔会員発表〕午後一時半始

連吟 兼老(鬼頭みゆき、伊藤 礼子、水越弥生、服部玲子) 熊野 (田中賢三、中村正一) 仕舞 高野物狂(杉本優) 胡蝶(奥村小浪) 羽衣(金原孝典) 女郎花(山口耕 造) 舞獅子 巻組(高橋千晴) 羽衣・和合(水越弥生) 松風(鬼頭みゆき) 仕舞 西行楼(三輪藤枝) 小塩(林和子) 半部(山本博子) 鐘之段(岩田加代) 融(服部玲子) 舞獅子 忠度(不破隆子) 玉置(手 れるのは当然か。

金剛角帽子・小格子厚板着付・白大口・浅黄水衣のワキ雅介、從僧(元・幸)を伴い名置れば安居院法印の威風、道行の悠揚は法印と知るシテ里女・喜之の呼掛の優しさ、面若女・梅白二・白摺着着付・紅白唐唐緋の淑やかさは、華のすまみ、と速く二ノ松からワキを見込み、光源氏と己れの追手を願う事だけをへ申さんとて、と直リ、へこれまで夢みて候、と結足に決心を合意の心で品よく見せる。舞台へ入っては初同(三郎・直也)ら(雲も其方夕日影、と右ウケルのは素性知られる着しらいか、さらりと面を背ける風情も楚々とし、小廻りに掻き消える中入も美しく、

後場、ワキは詞(ことば)の後ワキツレと立ち中央に開座、前場の不思議なワキツレとの掛合に、世の夢さ待待と、願って戻ると一斉(希世・啓次郎・鉢一)で後シテが出る。前折鳥帽子・破れ七宝文舞大袖・松露二葛文紫長組髪は常座、へ見えん姿は取れやせとクモルのも床しい。地へ寝させで明かすこの夜半の、とツツと出ると月を眺め、僅かに膝を屈め鐘を聞く閑寂境、さ迷うように常座へ、更に正中中へ、下居ワキへ合掌する辺りも味わい深い。

クセは二段の舞クセ、その表情の豊かは、へ菩提の道を願ふ、抱

れ、覚えの歌に詠めば、勺葉ならぬ「咲くやこの花」だと嘲笑され。疲れるつもりも、歌を詠されて気色ばむ融の若さが曲柄に合う。早々野に出ると今度は友彦、土筆を掻きばかりでは、と即興の歌「春の野につくつくしの首萎れてぐんなり」と詠むが、ぐんなりが可笑しいとなふられ、「風騒ぐんなり」の先例を挙げれば更に鼻音「ん」を笑われて向きになる所、友彦のヒステリカルな味が可。

キリは嬉がる友彦に行き掛りの相撲を挑み、がっぶり四つから足取りで倒す融、なまじの歌の風流が徒になり、折角の野遊を不愉快にするという、これは教訓(17分)。

「羽衣・彩色ノ伝」衣は一ノ松勾欄。ワキ白龍・勝久、紺白段腹斗目着流・萌黄水衣・腰裏姿が粋(いき)、ワキツレ伴わず常座で一セイのあと後見座に釣竿を置き二ノ松で名置り直ぐ詞、衣を認めて取上げ、捧げて戻るところにシテ感懐が呼び掛ける。

面は増、揺らめく環路に弱りを湛え、天冠に戴く、桜花集めて珠にした様な、珍しいピンクの立物の華やが更に面の色を深くする。梅白二・金地花菱文摺着着付・黒赤金白染分股立湧銀世水敷石紗綾形二杜若桐花文摺腰巻の美しさは句うばかり、その天人が飛行の衣を奪られて、へ春風の空に吹く、のまでも心救われる、とンオルのを見ては、誰しも同情を察し得ないだろう。

「あら嬉しや」の掛りは下着姿の婆者胸姿の悲しさを払拭する率直、物事に白地舞衣を垂折に着ければ喜びは生氣を取り戻し、へ東遊のから直ぐへ南無阿彌陀佛天子、更に舞へと逸る氣持が活きくと云わる。舞半ば、正中ワキに向き膝を屈めるのは感謝の氣持か、軽やかに舞上げて舞台大きく廻って大小前、へ舞くも返すも、と左袖ふわりと被さ拍子二ツ強く踏むと破ノ舞はイロエに替る。二ノ松で左袖被さ、勾欄に詰めて暫し行ひの東の閑静心を隠して感懐に耽けるか、被いたまふ流しの手で正先へ戻るも慎ましくやか上品。キリは哀歎交々の地謡(朗詠・生香ら)の緩急が素晴らしい、へ時移って、とシテは一ノ松に抜け、

へ富士の高嶺、と二ノ松で左袖被くとそのまゝ舞込み、ワキがトメた。美しい、感懐的なる程の好舞台だった。舞子は希世・啓次郎・定男・喜太郎、後見は善高・晃一。(56分)

「山姥」 シテ惠美子、前は面深井、紺無地腹斗目着付に無紅唐織(黄土地・萌黄唐草白紫黄唐花文)・ツレ香寿子・ワキ元・ワキツレ正樹の一行を招じ、ツレに謂う所の山姥の歌の一節を強く所望するところ、因縁ありげを予測させれば、へ声を上路的山姥が、とシリ(ワキ)にアシラフ返りも鬼氣。眞の姿を現わすとして強く念を押すかに居立つてワキにアシラフと、へすはやかげろよ、とサッと直り右へ月を見上げるのも荒涼の景色。中入は小廻り重常座から前へ出ると、地(修一・和男ら)一杯に小走りで感懐へ入った。

アイ里人は清浩。ワキとの山姥をめぐる問答は些か薄問答めき、双方が生真面目に渡り合うだけに可笑しく、形而上的命題を持つ本曲の一面の清涼剤。

後シテは端正な山姥の面、萌黄半切・茶厚板垂折の姿は着付の癖に鬼女の一面が覗く。鹿背杖に木ノ葉は付けない。一ノ松勾欄下に深谷を覗き、へ巖嶮たり、と胸杖するところ量置の大きさがあ。へ水また水、と運び、盃一杯に舞台へ入り、地次第の返シ句に鹿背杖を肩に替え、へ千文の筆、と床几に掛る。クセは眼目のへ金輪際及べり、腰を浮かせて逆手の扇でキツと下を指し足拍子二ツ、氣力の充実を見る。

へそも、と立ち、きびきびクセを舞い込み、へ山廻りするぞ苦しき、と舞い留めるが、扇を再び鹿背杖に替える立廻の終盤、杖の両端を握ったり右肩に担いだり、が山廻りの苦しきを見せるか。更に杖を扇に替えて地との掛合に四季の風景を要でつつ山廻りする山姥は山の詩人、動きの中にも女流の優しきが見えた。(1時間34分)

3月16日、梅猶会)

尚この日、修一「通小町」の仕舞中、震度四のかなり大きな地震があったが平静な舞台上に見所も落着き、流石と嬉しい光景に感銘一入だった。

親世流・金剛流
宗家本発行元

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291) 2488 振替 00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話 075(231) 1990 振替 01010-0-113

能楽の友

発行 能楽の友社

名古屋市中区千種千種2丁目18-18
(郵便番号 464)

電話 (052) 731-7 9 8 4
振替口座 00800-6-3 6 3 9 3

購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
— 部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

- 〔5月〕**
24日(土) たまも会 (来場歓迎)
25日(日) 名古屋観舞会大会 (来場歓迎)
31日(土) 青陽会定期能 (有料)(番組①面)
- 〔6月〕**
1日(日) 大槻秀夫7回忌追善能 (有料)(番組④面)
7日(土) 万作を観る会 (有料)(番組②面)
8日(日) 名古屋観舞会定式能 (有料)(番組③面)
14日(土) 第五回吉村輝尾舞の会 (有料)
15日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)(番組③面)
22日(日) 狂言也留舞会 (来場歓迎)
- 〔7月〕**
11日(金) 能楽・鏡座公演 (有料)
13日(日) 朝日狂言会 (有料)
20日(日) 観世楽会 (有料)
21日(振休) 恵美寿会 (来場歓迎)
26日(土) 野村四郎公演 (有料)
27日(日) 邦謡 (来場歓迎)

熱田神宮能楽殿催能

〔6月〕
5日(木) 熱田祭奉納能 (来場歓迎)(番組③面)

能楽「鏡座」旗上げ公演

若手能楽師5人が結成

名古屋と京都でそれぞれ活動している若手能楽師5人が「鏡座」を結成、七月十一日(金)名古屋能楽堂で旗上げ公演を行う。

能楽「鏡座」の同人はシテ方観世流・味方團(まどか)、笛方藤田流・大野誠、小鼓方幸清流・後藤嘉津等、大鼓方石井流・河村真之介、狂言和泉流・野村小三郎の五氏。

結成にあたって「能楽「鏡座」は研究会であり、自らの芸の上達を目指す、年一回の公演をする」とともに、様々な形で普及活動も行っていく。

研究会の名称とした「鏡」とは能楽の伝書に使われていたり、能舞台には松の描かれた鏡板があり、鏡とは縁の深い言葉であり、また、鏡は自分の姿を映すものでもあるので、この活動を各々の姿を映す鏡とし、自らの芸を高めていくことができるように、という意味を込めました。まだまだ未熟者ですが、これからの活動も未知数ですが、皆様の期待にこたえるよう頑張っていくかと思えます」とあい

旗上げ公演(七月十一日、名古屋能楽堂)の曲目次は以下の通り。

舞臺子「高砂」(シテ・林喜一郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津、大鼓・河村真之介、太鼓・観世元伯、地謡梅田邦久、河村重はか)

狂言「朝比奈」(シテ野村又三郎)

能「舟弁慶」小書前後之替・舟唄(シテ味方團、子方田中義人、

熱田祭奉納能

能2番上演

6月5日 熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部主催による熱田神宮大祭の協賛「熱田まつり奉納能」は六月五日(木)十一時から熱田神宮能楽殿で催される。

演能は、喜多流、宝生流による能二番、和泉流狂言一番はじめ舞臺子、仕舞、能楽協会名古屋支部の恒例の行事、後援熱田神宮、入場無料。

喜多流能「経政」(シテ長田舞臺子「数盛」、仕舞「融」)
狂言「磁石」(シテ大野誠之)
宝生流能「胡蝶」(シテ衣笠)

さつしている。

味方團氏 昭和四十四年生まれ。観世流シテ方味方徳氏の次男、林喜一郎氏および父に師事、昭和四十八年初舞台、平成七年独立、京都在住。

大野誠氏 昭和四十四年生まれ。十一世藤田流家元藤田六郎兵衛氏に師事、昭和六十二年初舞台。名古屋在住。

後藤嘉津氏 昭和四十四年生まれ。小鼓方後藤孝一郎氏の長男。幸清流家元幸清次郎氏、現家元幸清次郎氏および父に師事、昭和五一年初舞台、岐阜在住。

河村真之介氏 昭和三十九年生まれ。大鼓方河村一郎氏次男、父に師事、昭和五一年初舞台、平成六年度名古屋芸術奨励賞受賞、名古屋在住。

野村小三郎氏 昭和四十六年生まれ。和泉流狂言方野村又三郎の嫡男、父に師事、昭和五一年初舞台。平成九年松尾芸術賞新人賞受賞、名古屋在住。

第14回天王薪能

能「熊坂」狂言「千鳥」

8月3日 津島市天王川公園

毎年津島市天王川公園で開催される「天王薪能」は、ことし第十四回を迎え、きたる八月三日(日)開催される。

当日は午後四時開演、地元同好会、南山大学はか名古屋学生能楽

「能みにみに講座」

名古屋女子大学教授 林和利

午後六時半ごろ

ワキ中村弥三郎、ワキツレ福王和幸、ワキツレ川正彦、アイ野村小三郎、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津等、大鼓・河村真之介、太鼓・観世元伯、後見林喜一郎、河村晴道、味方安、地謡梅田邦久、味方徳、河村和重、祖父江修一、清沢一政、松山幸親

午後六時開演、全自由席一般前売三千五百円(当日四千円)学生千五百円。取り扱いチケットあり、鏡座同人。

問い合わせ 河村方(052・761-4882) 野村方(052・322-6669)

熱田神宮能楽殿 七、八月は休館

熱田神宮能楽殿では、きたる七月と八月の間、改修工事を進行予定で、その期間は休館される。

※⑥面に掲載されている「熱田祭奉納能」は、熱田神宮能楽殿での演能ですので、ご注意ください。

青陽会定式能(第41期)

五月三十一日(土)十二時半開演
名古屋能楽堂

能組
仕舞 生駒里翠
地謡 星野路子
今沢三恵美
三村和子

能
仕舞 生駒里翠
地謡 星野路子
今沢三恵美
三村和子

景清 飯富雅介 河村真之介 柳原司忠
後見 中川雅章 地謡 高島信一
馬場信至
久田敬二

屋之島 加賀敏彦
船橋 古橋正邦
網之段 清沢一政
鞍馬天狗 玉木孝男

杜若 杉江元 福井啓次郎 助川龍夫
後見 梅田邦久 地謡 今沢三恵美
今村喜男 高橋正彦

安達原 高安勝久 河村総一郎 鬼頭好信
後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

附祝言 主催 青陽会
当日券 三千元

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

後見 星野幸江 地謡 三村和子
須山幸親 須山幸親

五月雅日記

(179)

萬葉の花紀行 (13)

えと文 二井栄逸

(巻二十の四三五二)

文部 鳥一 (はせつかべのとり)

初夏の頃になると山の小道や葉桜のそよぐ丘に、ほのかな香りをたよませて野ばらの白い小花が咲き出します。

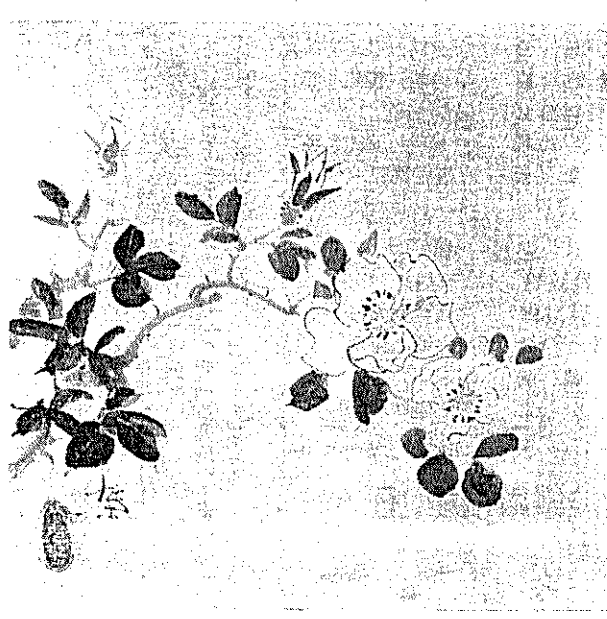
野ばらは、その可憐さと清楚な花で多くの人々に親しまれ、詩歌にも歌まれてきました。

野ばらは萬葉文学では「うまら」とよばれています。

道の辺の
荆(うまら)の末(うれ)に
道(は)は豆の
からまる君を
別(はか)れか行かむ

右の歌意は「『ゆかないで』とすがりついたあの女(ひと)を残してどうして遠い九州まで行けようか、でもゆかねばならない、辛うことだ」ノバラにからまる豆に託して別れの悲しさを歌った防人(さきもり)の歌には、こうした切ない歌、哀(かな)しい歌が多くみられます。

防人は、上代から平安初期まで、辺境の防備にいたった人々で、主として、九州北岸、豊後、対馬の守備の防備にいたった兵士達であった



のです。

多くは東国から渡来され、三年を動かします。古代にあっては、九州は通かかたの遠国であったでしょうし、可憐な野ばらの花は、妻は夫に、夫は妻に思いを託する、かっこうの花であったに違いありません。

熱田祭奉納能

六月五日(木)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

番組

能 楽 (喜多流)

長田 郷 河村 勲 竹市 学
政 西村 信広 柳原 富司 忠

後見 井上 喜子 地謡 伊藤 英毅 大島 輝久
加藤 誠子 森 吉川 寛治 和谷 街市

狂 言 (和泉流)

磁 石 大野 弘之 佐藤 融
井上 礼之助

仕 舞 (金春流)

融 伊藤 雄二

地謡 佐久間 祥夫
前田 茂徳
箕浦 道

大槻秀夫七回忌追善能

六月一日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

番組

仕 舞

海 士キリ 稻生 芳雄
枕 慈 童 今村 嘉勇

網 之 段 黒田 博
春日 龍神 八神 孝充

養 老 近藤 幸江 吉田 定男 柳原 富司 忠 助川 龍夫
水波 之 伝 水田 根岸 住郎 雄吾 赤松 禎友 水田 泰孝 博

鞍馬 天狗 大槻 一文 地謡 阿部 康之 武富 禎友 赤松 禎友 水田 泰孝 博

恋 重 荷 泉 雅一郎 泉 嘉夫 福王 和幸 寛 敏一 福井 啓次郎 鬼頭 喜太郎 鹿取 希世

薩 摩 守 野村 又三郎 松田 高蔵 野村 小三郎 後見 井上 清浩

高野 物狂 梅田 邦久 地謡 八神 孝充 山本 正人 黒田 博 久世 久二

芭 蕉 蕪 浅見 眞州 久保 誠一郎 阿部 信之 東岸 居士 泉 泰孝 地謡 阿部 信之 山本 正人

鶺鴒 銅キリ 久田 徹二 地謡 阿部 信之 山本 正人

女郎 花 観世 栄夫 後藤 孝一郎

道成寺

大槻 文蔵 福王 和幸 河村 総一郎 観世 元伯
中村 彌三郎 幸 清次郎 藤田 大郎 衛
山本 順三

間 茂山 千作 宗彦

後見 泉 康之 今村 嘉勇 齊藤 信隆
赤松 禎友 地謡 桑野 剛年 阿部 信之
祖父 江修一 浅見 眞州 多島 利之

鐘後見 泉 泰孝 泉 雅一郎 水田 博
上田 拓司 松山 幸親

主催 名古屋清韻会

(入場券) 指定席一万円、自由席七千円
学生(自由席のみ) 四千円

取り扱い 名古屋能楽鑑賞会(052-722-4000)
チケットぴあ(052-320-9999) 出演楽師宅

早稲田大学演劇博物館

振興基金支援公演

万作を観る会

六月七日(土)午後二時始

名古屋能楽堂

狂言

六地藏

シテ 野村 万作

アド 石田 幸雄

シテ 野村 万作

アド 野村 万作

シテ 野村 万作

アド 野村 万作

シテ 野村 万作

アド 野村 万作

舟渡

早稲田大学教授・演劇博物館館長 鳥越 文蔵

主催 名古屋稲門クラブ

後援 愛知県稲門教育会

入場料(一般) 当日 五千円
(前売り 四千五百円)

取り扱い チケットぴあ、市内プレイガイド
問い合わせ 名古屋稲門クラブ事務局(名古屋市中区栄一18
1-1、ハイツサンライズ407号、TEL052-231-2
756)

756

芸術選奨文部大臣賞 茂山千之丞氏が受賞

すぐれた芸術活動をした人に文部大臣賞を贈る「芸術選奨」の一九九六年度(第四十七回)の受賞がこのほど発表され、「古典芸術部門」で茂山千之丞氏が受賞した。

受賞は、「木六歌」「文相撲」とオリジナルの「室町歌謡組曲」の「室町歌謡組曲」を受賞。

舞台成果で文部大臣賞。茂山千之丞氏は、大正十二年、三世千作の次男として京都に生まれる。昭和二十一年二代目茂山千之丞を襲名、平成五年親世壽夫記念法政大学能楽賞、平成七年芸術選奨劇部門優秀賞を受賞。

読売演劇大賞男優賞 大槻文蔵氏が受賞

昨年一年間の舞台芸術を顕彰する「読売演劇大賞」(後援：読売新聞社)の男優賞に、大槻文蔵氏が、昭和十七年九月、大槻文蔵氏が「東大演劇会」(平成八年三月十日、大阪文化祭賞。松尾芸能賞)を受賞した。

岡崎城二の丸・清謡会(第五回) 舞と能の夕べ

五月二十三日(金)
午後一時半〜会員の部
午後六時〜新能
会場 岡崎城二の丸能楽堂

〔会員発表の部〕(午後一時半)

連吟 養老	服部 玲子	伊藤 礼子	鬼頭 礼子	水越 弥生	中村 正一	田中 賢三
舞 高野物 狂道行 杉本 優	胡蝶 蝶三	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造
舞 高野物 狂道行 杉本 優	胡蝶 蝶三	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造
舞 高野物 狂道行 杉本 優	胡蝶 蝶三	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造	山口 耕造

梅猶会定期能

大阪梅猶会定期能は、平成九年度四回公演として、初回は一月に行われ、第二回は六月七日(土)大阪能楽会館、第三回九月六日(土)大阪能楽会館、第四回十二月七日(土)大槻能楽堂で開催される。

▽第二回公演

能「通感」(梅若善久)
能「班女」(梅若善久)
能「長光」(丸石やすし)
能「殺生石」(白頭(井戸和男))

▽第三回公演

能「女郎花」(梅若善久)
能「花籠」(井戸和男)
能「葵上」(梅若善久)

▽第四回公演

能「実盛」(梅若善久)
能「夕顔」(梅若善久)
能「鉄輪」(池内光之助)

〔夕べの部・新能〕(午後六時)

舞 高野物 狂道行 杉本 優
舞 高野物 狂道行 杉本 優
舞 高野物 狂道行 杉本 優

能 葵

附祝言
主 催 清
後 援 梅
後 援 梅
後 援 梅

名古屋観世会定式能(三回)

六月八日(日) 十二時半始
名古屋能楽堂

能 組
能 組
能 組

名古屋宝生会定式能(第24回)

六月十五日(日) 午後一時始
名古屋能楽堂

能 組
能 組
能 組

平成9年5月・6月放送

〔5月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時〜8時57分)
25日(日)「草子洗小町」〜観世流〜 浦田 保利
〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時〜8時57分)
1日(日)「通 盛」〜観世流〜 泉 泰孝
8日(日)「田村・羅生門」〜宝生流〜 本間 英孝
15日(日)「大江山・養老」〜金春流〜 高橋 汎
22日(日)「杜若・賀茂」〜観世流〜 山本 勝一
29日(日)狂言二題
「藤 摩 守」〜和泉流〜 三宅 右近
「文 荷・御 田」〜大藏流〜 大藏 弥太郎

教育テレビ
6月1日(日) 午後3時〜4時15分
「湯 谷」〜喜多流〜 友枝 陽世
開ほか 宝生

NHK教育テレビ
日本の伝統芸能・能狂言鑑賞入門
日曜日 午前7時〜7時30分
再放送：翌週水曜日 午後3時〜3時30分
5月25日「恋 重 荷」(二) シテ 片山九郎右衛門
6月1日 狂言「佐 渡 狐」 シテ 茂山 忠三郎

杜 若 観世喜之
後見 武田 邦弘
地謡 須藤 良一
清加藤 一政
高島 良一
吉田 定男
久田 一郎
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛
藤田 正邦
藤田 久邦
藤田 久二

附祝言
主 催 名古屋宝生会
事務所 名古屋市中区島田二一三〇一
島田橋住宅二一三二〇
佐藤 耕司 方
電話 FAX 〇五二一八〇三三七七二
携帯 TEL 〇三〇一五六九一四三三五

杜 若 倉本 雅
後見 玉竹内 澄子
地謡 村 上 唯雄
石原 良伯
和久 莊太郎
鬼頭 好信
鹿取 希世

清 經 玉井 博祐
竹内 澄子
飯富 雅介
後藤 嘉津幸
竹市 学

親世流・金剛流 宗家本発元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替 00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話 075(231)1990 振替 01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (052) 731-7 9 8 4

振替口座 00800-6-3 6 3 9 3

購読料 1年 1100円

郵送の場合 1年 1800円

一 部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

[6月]

22日(日) 狂言也留舞会 (来場歓迎)

[7月]

11日(金) 能楽・鏡座公演 (有料) (番組①面)

13日(日) 朝日狂言会 (有料) (番組②面)

19日(土) 恵美寿会 (来場歓迎) (番組③面)

20日(日) 織世楽会 (有料) (番組④面)

21日(振休) 恵美寿会 (来場歓迎) (番組⑤面)

26日(土) 野村四郎公演 (有料) (番組⑥面)

27日(日) 邦 謡 (来場歓迎)

[8月]

2日(土) 呉竹金春会 (来場歓迎) (番組⑦面)

5日(火) 学生金春会 (来場歓迎)

10日(日) 青 陽 会 (有料)

23日(土) 衣 斐 正 宜 後 援 会 (有料)

24日(日) 能楽協会主催 (有料・2部制)

普及能(新作能シリーズ)

30日(土) 中部電力謡曲大会 (関係者)

31日(日) 小 野 涛 鴻 会 (有料)

熱田神宮能楽殿催能

— 改修のため休館中 —

8月9日(土) 名古屋新能

熱田神宮神楽殿前特設舞台

四日市市・市制100周年

エレクトロニクス 新 能

能「土蜘蛛」 狂言「二人袴」 上演

8月1日市民会館で

四日市市は、ことし市制施行百周年の記念の年にあたり、多彩な祝賀行事が行われているが、その一環として、四日市新能実行委員会、四日市文化振興財団では、特別企画事業として、レーザー光線を使用した「エレクトロニクス新能」を企画、市制施行百周年の記念日に当たる八月一日(金)四日市民会館で開演することになった。

和泉流狂言・井上松次郎氏 三世菊次郎を襲名

朝日新聞社、名古屋狂言共同社主催の朝日狂言会は、ことし第三十九回を迎え、七月十三日(日)名古屋能楽堂で開演されるが(番組⑥面掲載)、和泉流狂言方、名古屋狂言共同社の長老・井上松次郎氏は、このたび三世井上菊次郎を襲名、その披露として狂言「才法」を所演する。

主催 四日市市新能実行委員会 / 四日市市文化振興財団 (電話 0593・54・4501) 協力 能と狂言に親しむ会 四日市研究会、演出 藤田六郎兵衛氏。

新能セミナー

能と狂言に親しむ会
四日市研究会主催

四日市新能は、別項のように八月一日の市制百周年にあたり、レーザー光線を使用した新しいエレクトロニクス新能として演出されるが、判りやすい解説を通して能をもっと楽しく観てもらうために能と狂言に親しむ会四日市研究会(会長橋本氏)が主催して、新能セミナー「魅惑の世界へ」を三回にわたって開演、五月二十四日に藤田六郎兵衛氏が講演、第二回は六月二十一日、金剛流シテ字高道成氏、三回は七月十二日、親世流シテ方梅田邦久氏により、能面、能の演出について講演が行われる。

会場 四日市市市民会館、入場料 1千円、問い合わせは能と狂言に親しむ会四日市研究会(電話 0593・53・1823)

梅若六郎師来演

能「融」狂言「萩大名」

8月1日長良川新能

岐阜市主催、岐阜青年会議所主催による「長良川新能」は、毎年一人にのぼる観客で大きな話題ととも夏風物詩として定着してきているが、ことしは第十一回を迎え、八月一日(金)午後五時から長良川特設舞台(岐阜グラン・ドホテル前河原)で開演される。

〔長良川新能〕
岐阜市民の心のふるさとである金華山・長良川を舞台として、岐阜の伝統文化を生み、育てていくと一九八六年七月三十日、社団法人岐阜青年会議所の三十五周年記念事業として、第一回の「長良川新能」が始まった。

能「融」(梅若六郎)
狂言「萩大名」(山本則直)
舞臺子「羽衣」(山中義滋)
入場無料、問い合わせは、岐阜青年会議所、第十一回長良川新能係。(岐阜市神田町2-12、岐阜商工会議所ビル内、電話058・二六四・八〇九〇)(番組⑧面)

当初は一回限りの記念事業として始まった新能であったが、反響も大きく、第三回から岐阜市の主催、岐阜青年会議所が主管となつて毎年継続して開催され、観客も一人にのぼり、夢と感動を共有し、東海地方で屈指の動員力をもつ企画として、能の鑑賞と普及に大きな役割を果たしている。

能楽「鏡座」公演

七月十一日(金)

開場 五時三十分
開演 午後六時

名古屋能楽堂

番 組

舞 臺 子

高 砂 林 喜一郎

朝 日 奈 野村小三郎

狂 言

後見 松田 高義

中 村 弥三郎

後藤 嘉津幸

大 野 誠

福 王 和幸

是 川 正彦

野村小三郎

河村 晴道

松山 幸親

河村 和重

後見 林 喜一郎

地 詔 清沢 一政

梅 田 邦久

味 方 玄

主 催 能 楽 「 鏡 座 」
同 人 味 方 玄、大 野 誠、後 藤 嘉 津 幸、河 村 真 之 介、野 村 小 三 郎

附 祝 言
〔入場料〕 全自由席 一般前座三千五百円(当日四千円)
学生 千五百円(学生券取り扱い鏡座同人まで)
チケット取り扱いチケットぴあ、鏡座同人
問い合わせ 河村方(電話052・761・4882)
野村方(電話052・322・6669)

五月雅日記

(180)

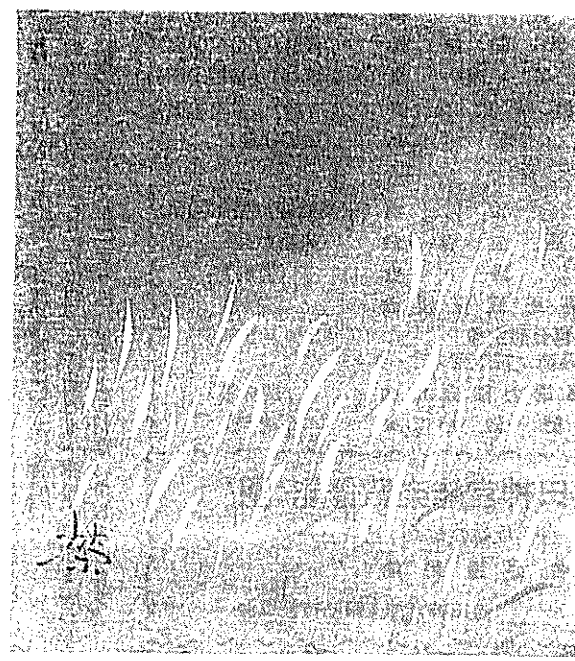
萬葉の花紀行 (14)

えと文 二井栄逸

つばな

爽やかな五月の風が吹く頃になると、丘の斜面に群生したチガヤが一斉に白い花穂を出し、そう「とそよよ姿が何とも美しい。チガヤは、萬葉では「ツバナ」「チバナ」と言われ、春の終りから初夏にかけて、葉に先立って白毛を密生した花穂を出します。謡曲文の中によく出てくる浅茅原は、チガヤの群生した原をい

紀女郎(きのいらつめ)は、大友家持に次のような歌を贈っています。
我が手もすまに
春の野に
抜ける茅花(つばな)そ
食(め)して肥えませ—
(巻八の一四六〇)



紀女郎は家持とは対等に言いあつたり、語つたりしている間柄であつたらしく、こんな歌も作られたのでしよう。
「あなたの為、私が春の野で
手も休めずにつせと抜き取つたつばなです。せいせい召し上がったお太りなさい」この歌から察すると、家持は細身の美男であつたようです。

「花伝の会」藤田六郎兵衛 プロデュース公演 名古屋城夏まつり 能・狂言特別公演

「小鼓の世界」 168日 「狂言その世界」 178日

が一堂に会し、めったに聞くことの出来ない小鼓の秘曲の数々を披露、さらに笛や太鼓の秘曲も演奏される。
演目および出演者(予定)は、
一調一管「五横乱曲」(笛・杉市和、太鼓助川治)
一調一管「班女」(笛大槻文蔵、太鼓藤田六郎兵衛、大鼓・佃良勝)
一調一管「小督」(笛・観世曉夫、小鼓・柳原富司忠)
一調一管「八島」(笛・梅田邦久、小鼓・幸正昭)
一調一管「三井寺」(小鼓・大倉源次郎)ほか小鼓方として宮増純三(小鼓方観世流)成田達志(小鼓方幸流)の各氏が来演の予定。
午後一時開場、二時開演。
入場料(税込) 四千元(全自由席)
主催 名古屋城夏まつり実行委員会、花伝の会、能と狂言に親しむ会。
チケット取り扱いIIチケットび

恒例の名古屋城夏まつりのスペシャルイベントとして、「花伝の会」藤田六郎兵衛氏のプロデュースによる「能・狂言特別公演」が八月十六日(土)十七日(日)の二日間、名古屋能楽堂で開催される。
初日の八月十六日は、「秘曲の会」パートI「小鼓の世界」をテーマに、能楽界の小鼓四流幸流、幸清流、大倉流、観世流の四流儀

あ、東海ラジオ事業部、花伝の会、(なおこの会のチケット半券にて名古屋城夏まつりに入場できる)さらに「花伝の会」では名古屋城夏まつり「能・狂言特別公演」として、八月十七日(日)A不易流行「狂言その世界」のテーマで、名古屋能楽堂で開演、茂山千之丞氏の構成による「室町歌謡組曲」が名古屋初演として披露される。
番組は次のとおり。
◇豪華子「男舞・流流」笛・藤田六郎兵衛、小鼓・吉阪一郎、大鼓・佃良勝
◇水下順次作
狂言「彦市ばなし」
殿様・茂山千作(人間国宝)
彦市・茂山千五郎
天狗の子・野村小三郎
◇茂山千之丞構成
名古屋初演「室町歌謡組曲」
羅・舞 茂山七五三、茂山千三郎、丸石やすし、松本薫、茂

山正邦、茂山茂、茂山千五郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・吉阪一郎、大鼓・佃良勝、太鼓・中田弘美。
主催 名古屋城夏まつり実行委員会、花伝の会、能と狂言に親しむ会。
入場料(税込) 四千元(全自由席)
チケット取り扱いIIチケットび

名古屋能楽堂 展示室企画

名古屋能楽堂の展示室は、既報のように五月十八日まで企画展「狸々展」を開催、さらに五月二十四日から六月二十二日まで企画展「高砂展」を開催した。
次回のスケジュールとして、七月十九日から八月十三日まで、収蔵品展「八月十四日から九月七日まで「収蔵品展」の開催が予定されている。

第39回 朝日狂言会

七月十三日(日)午後二時三十分始

名古屋能楽堂

素齋子
大鼓 寛 鮎一 太鼓 鬼頭喜太郎
小鼓 福井啓次郎 笛 藤田六郎兵衛
大名 井上礼之助
太鼓 冠者 大野 弘之
蚊の精 井上 祐一
瓜 盗人 茂山千五郎 畑 主 茂山七五三
鎌 腹 男 野村 万作 妻 野村 萬斎
扱 人 佐藤 友彦
狂言小舞 海道下り 野村又三郎 地謡 野村小三郎
井上 祐一 松田 高義

夏の素謡会

七月二十日(日)午後一時開演

名古屋能楽堂

入場料 指定席前売券五千元、自由席前売券四千元(当日券四千五百円) 学生前売券二千五百円(当日券三千円)
取扱所 チケットびあ、松坂屋、名鉄、丸栄、三越、愛知芸術文化センター、各プレイガイド、朝日新聞企画部、各出演者宅
事務所 愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘2-20-10 井上芳
電話 〇五六一三三〇一五 佐藤方
名古屋市中区大杉二-〇一五 佐藤方
電話 〇五二一九一八七八四

実盛

片山九郎右衛門 梅田 邦久
古橋 正邦
高島 良一 久田 徹二
須田 正邦 武田 邦久
古橋 正邦 梅田 邦久

井筒

高橋 一 高島 良一
中川 雅章 高島 良一
須田 正邦 須田 正邦

葵上

久田 徹二 武田 邦久
梅若 六郎 祖父江 修一

第五回 恵美寿会

第一日 七月十九日(土) 午前十時始
第二日 七月二十一日(月) 午前十時始

名古屋能楽堂

入場料 前売券四千五百円、当日券五千円(自由席)
取り扱い 能楽堂、チケット「びあ」及び出演者宅
主催 名古屋能楽堂
附祝言 (終了 四時頃)

熱田神宮能楽殿改修へ 今秋新装でお目見得

熱田神宮能楽殿は、昭和三十年(一九五五年)、熱田神宮のご遷宮を機に、文化事業の一環として熱田神宮造営会と能楽協会名古屋支部と共同で建設され、爾來四十余年、東海地区唯一の能舞台として、斯道の発展と文化の興隆に貢献してきた。しかし、歳月の経過とともに、建物の老朽化が甚だしく、早急に大改修を施す必要性に迫られてきた。とはいえ、演能の本格的な殿堂ともいべき能楽殿は当地では一カ所のため、熱田神宮能楽殿を長期閉鎖しての改修工事ができなかったこともあり、それがまた老朽化や改修の必要がさらに強く求められるようになってきた。

こうしたなかで、名古屋市が市民の要望にこたえ、また文化都市を志向する気運が高まり、能楽堂建設の計画をすすめて、平成七年に着工、今春四月完成して、こけら落としが挙行された。この名古屋能楽堂の建設は、名古屋における

改修資金の財源としては、能楽協会名古屋支部の能楽師が毎月の拠出とともに、支部主催事業の無料出動という熱意も協力して五千万円達成の目標が立っており、さらに名古屋経済界の賛助による基金五千万円、各社中および能楽愛好者、市民の方々からの寄付金五千万円の資金達成の方針が進められている。

長良川新能

平成九年八月一日(金)
開演 午後六時二十分
長良川グランドホテル前

梅若 六郎	高安 勝久	河村 総一郎	鬼頭 喜太郎
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊
山本 則直	山本 則俊	山本 泰太郎	山本 則俊

近刊紹介

「龜堂閑話」

五川大学出版部が復刊
明治、大正、昭和の激動のなかで、能楽界の確かな地歩を築いてきた十二世梅若万三郎氏の生涯の足跡ともいえるべき八能楽随想「龜堂閑話」が、このたび五川大学出版部により復刊された。

改修後の熱田神宮能楽殿は、座席数三百五十席(イスは御園座のみ、市の名古屋能楽堂と同じレベル)が予定され、今秋には新装の能楽堂のお披露目が行われる予定である。

盛りがあがってきている。改修後の熱田神宮能楽殿は、座席数三百五十席(イスは御園座のみ、市の名古屋能楽堂と同じレベル)が予定され、今秋には新装の能楽堂のお披露目が行われる予定である。

能揚 貴妃	高安 勝久	後藤 孝一郎	大野 誠
能清 経	杉江 元	柳原 富司忠	竹市 学
能果 塚	飯塚 雅介	飯島 佐之六	飯島 佐之六
能花 月	飯塚 雅介	飯島 佐之六	飯島 佐之六
能半 部	高安 勝久	福井 啓次郎	藤田 六郎兵衛
能土 蜘蛛	杉江 元	柳原 富司忠	竹市 学
能雲 雲	飯塚 雅介	飯島 佐之六	飯島 佐之六

第14回 野村四郎名古屋公演

七月二十六日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂
馬場あき子(歌人)

「古き王家の愛」

子方竹前 万里
ツレ山本 章弘
野村 四郎

清 經 大槻 文蔵
舞 子 藤田 六郎兵衛

後見 上野 雄三
山中 義滋
地謡 清沢 一政
祖父 江修一
杉浦 豊彦
竹前 治房
大返 大槻 文蔵
大返 永留 浩史

福本 幸治
藤田 六郎兵衛
福井 啓次郎
藤田 六郎兵衛

主権 中 部 日 本 放 送 社

平成9年6月・7月放送

〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時57分)
22日(日)「杜若・賀茂」~親世流~ 山本 勝一
29日(日)「狂言二題」
「薩摩守」~和泉流~ 三宅 右近
「文荷・御田」~大蔵流~ 大蔵 弥太郎

〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時57分)
6日(日)「夕顔・雷電」~親世流~ 小山 文彦
13日(日)「俊寛・草子洗」~宝生流~ 高橋 章
20日(日)「烏船舟・鶴」~親世流~ 角 寛次朗
27日(日)「春栄・玉葱」~金剛流~ 金剛 永謙

〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時57分)
10日(日)故人をしのんで(1)
鶴沢 寿「一調・夜討曾我」(謡・関根祥六)
寺井 啓之「一管・音取」
桜間 辰之「杜若」
17日(日)故人をしのんで(2)
敷村 鉄雄「一調・乱曲、四季」(謡・橋岡久馬)
奥 善助「朝長」
31日(日)「木賊」~喜多流~ 粟谷 菊生

呉竹会

八月二日(土)午前十時開演
名古屋能楽堂

Table with columns for roles (e.g., 研究能経, 安東, 半東) and names of performers and their affiliations.

玄象一声

狂言小歌 海道下り
和谷 衡市
後藤嘉津幸 大野 誠

能 狸

後見 今北 福子
後藤 誠子
水谷 文雄 鬼頭嘉太郎
中村 正 大島 輝久
森田 克彦 長田 輝

◆晩春から初夏への舞台◆

尾州座・春の公演」と「第10回記念
久田徹二能」リサイタル」「九阜
会」「第40回やるまい会」「青陽会」

竹尾 邦太郎

「花子・替装束」能「班女」の役目と、シテ吉田少将。又三郎、妻、小三郎、太郎冠者。高義、少将とは平安朝、正五位下相當の近衛府の役人、位階が四位に達しても特任留任の場合を四位少将という。例え「通小町」の深草少将がこれ、能の装束付に大口・水衣と指貫・綴袙の二様がある。

「道成寺・赤頭」名古屋能楽堂の度々市街特賞受賞記念公演である。襟白赤・浅黄地箱巻・黒地麟鳳文唐織縮履・面若女。道成寺へ急ぐ心の逸り、勇躍乱拍子を舞わんの勢い、共に襦袢を取心持を的確に見せる。小鼓(啓次郎)の音と掛鉦にシテの足が反応する乱拍子の繊細は、踏み出すと爪先が

上がり、爪先が下りると翹が上がる、そのまゝ退いて来ると翹を下す寸合も巧緻。ワカを繰り込んでくる後半は腰がゆるさかきけるも急ノ舞の奔騰に強靱な腰は驚く。翹入は、舞台の立ちが高いこともあり、なにぶん滑車も初使用、翹の位置に高くシテは翹の縁を探りかねる様子だったが無事ワキは欣哉、語りの明晰は表現力も豊かで好演するが大振りな舞台に小柄なハシゲは否めない。六平本能心(一八七四—一九七)が若格の大を見せつけたことは夙に知られるが、舞台の規模や見所の佇まいも考慮されよう。アイは小三郎、融、禁を破つて女人を入れたことを自状した後は「心がさっぱりした」の科白。

「道成寺・赤頭・中ノ段数調・五段ノ舞」シテ徹二、リサイタル十回を記念して自撰する。萌黄の染料になるムラサキ草は夏に白い小花をつける。深淵に白のイメージが沈潜すると考えるのはうがち過ぎか、が、ひっそりと立ち出る姿は慎ましやか。

「茶壺」茶は茶西が招来し、明恵が梅尾に栽培した貴重品。後生大事その仕入れた茶を肌身離さずアト田舎物。融だが、奪われぬやまの強固な意志をもつシテは、友彦には敵うべくもない。間に入る目代(代官)礼之助に聞かれるまゝ手の内を隠し出す融の素

直さと、盗み聴きに情報を探る友彦の小技さ、事の成り行きが快調に運び、拳句置いてさきばりを食う二人の息が合う。正義と見せて漁父の利を占める礼之助が年巧の洪味。(26分)

「茶壺」シテ大倉・小三郎、太郎冠者(健太郎)を介さずアド瑤現(高義)の小娘(梨紗子君)に早々接近するものが気紛れなら、小娘の皮を剥いで鞆に貼るといふも気紛れ。気紛れは一に感情の揺幅の大、裏れを知らずは貴い泣く多感な若い大名の独り善がり自然なるまい会。

「茶壺」茶は茶西が招来し、明恵が梅尾に栽培した貴重品。後生大事その仕入れた茶を肌身離さずアト田舎物。融だが、奪われぬやまの強固な意志をもつシテは、友彦には敵うべくもない。間に入る目代(代官)礼之助に聞かれるまゝ手の内を隠し出す融の素

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話(052)731-7984

振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円

郵送の場合 1年1800円

一部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

- 【7月】
- 21日(振休) 恵 炎 寿 会 (来場歓迎)
 - 26日(土) 野村四郎公 演 (有料)
 - 27日(日) 邦 綱 会 (関係者)
- 【8月】
- 2日(土) 吳 竹 会 (来場歓迎)
 - 5日(火) 学 生 金 春 会 (来場歓迎)
 - 9日(土) 能楽後継者育成研修発表会 (来場歓迎)
 - 10日(日) 青陽会 定式 能 (有料)(番組②面)
 - 16日(土) 名古屋城夏まつり特別公演
秘曲の会「小鼓の世界」 (有料)(③面記事)
 - 17日(日) 不易流行「狂言その世界」 (有料)(同上)
 - 23日(土) 衣裳正宜後援会 能 (有料)(番組③面)
 - 24日(日) 能楽協会名古屋支部「普及能」(有料)(番組③面)
 - 30日(土) 中部電力謡曲大会 (関係者)
 - 31日(日) 小野海鴻 会 (有料)

熱田神宮能楽殿催能

— 改修のため休館中 —

8月9日(土) 名古屋新能 (神楽殿前特設舞台)

「名古屋新能」はことし第
三十二回をむかえ、きたる八
月九日(土)熱田神宮神楽殿
前の特設舞台で催される。午
後五時三十分開演。
演能は、観世流半能「絵馬」

第32回 名古屋新能 8月9日熱田神宮で

(シテ熊沢恵美子、手力雄命
高橋一。天細女命・前野
郁子)宝生流半能「班女」(シ
テ福川寿一)観世流能「土蜘蛛」
(シテ清沢一政、頼光。
祖父江修一、胡蝶、須部甫、

トモ八神孝充)
和泉流狂言「不見不聞」(シ
テ野村又三郎)ほか観世、喜
多、金剛、金春流の仕舞それ
ぞれ一番。
火入れ式は、熱田神宮服部
鐘一揆が執り行い、松原武
久名古屋市長のあいさつが予
定されている。
主催は能楽協会名古屋支部、
後援は名古屋市、熱田神宮。
入場料は前売二千五百円。
(当日券三千円) Ⅱ番組①面

名古屋城夏まつり

8月5日~17日 新能上演
能楽協会名古屋支部協力

真夏の夜のファンタジーと
して恒例となった「名古屋城
夏まつり」は、八月五日から

開催されるが、この夏まつり
を飾るイベントとして新能は
年々非常な人気をあつめ話題
となっている。
演能は五日から十七日まで
連日上演される。上演曲目、
演者は次のとおり。

八月五日(火)「通小町」
(シテ高橋一、ツレ三村恵
子)
八月六日(水)「班女」
(シテ前野郁子)
八月七日(木)「杜若」
(シテ松山幸親)
八月八日(金)「阿漕」
(シテ久田徹二)
八月九日(土)学生館
八月十日(日)「蜘蛛」
(シテ今沢英和、ツレ加賀敏
彦)
八月十一日(月)「安達原」
八月十二日(火)「巻絹」
(シテ瀬戸三津子、ツレ玉木
孝男)
八月十三日(水)「芦刈」
(シテ須部甫、ツレ高島良一)
八月十四日(木)「鶴鶴」
(シテ祖父江修一)
八月十五日(金)「羽衣」
(シテ清沢一政)
八月十六日(土)「井筒」
(シテ梅田邦久)
八月十七日(日)「東北」
(シテ古橋正邦)

(シテ近藤幸江)
八月十二日(火)「巻絹」
(シテ瀬戸三津子、ツレ玉木
孝男)
八月十三日(水)「芦刈」
(シテ須部甫、ツレ高島良一)
八月十四日(木)「鶴鶴」
(シテ祖父江修一)
八月十五日(金)「羽衣」
(シテ清沢一政)
八月十六日(土)「井筒」
(シテ梅田邦久)
八月十七日(日)「東北」
(シテ古橋正邦)

入場料(前売)大人八百円
小・中学生二百円(当日)大
人九百円、小・中学生三百円。
市内各ブレイクアイト、チケ
ットぴあなどで前売券発売。
開門は午後五時、閉門は十
時。新能は午後七時開演。

第32回名古屋新能

八月九日(土)午後五時三十分始
熱田神宮神楽殿前
特設開場

観世流 半能 前野 郁子 高橋 一 熊沢 恵美子	金春流 仕舞 昭 君 加藤 正嗣 地謡 小広瀬 芳雅 佐久間 雅樹	金剛流 仕舞 玉 葛 羽多野 良子 地謡 伊藤 雅子 中村 正	喜多流 仕舞 八 島 長田 颯 地謡 長谷川 寛治 吉川 正	観世流 仕舞 賀 茂 瀬戸 三津子 地謡 今沢 美和子 高木 孝男	番 組 三村 恵子 美和子	和泉流 狂言 不見不聞 野村 又三郎 松田 高義	班 女 福川 寿一 杉 江 元 相本 正樹 吉田 定男 福井 良治 鹿取 希世	土蜘蛛 高安 勝久 河崎 啓太郎 大野 好信	附 祝 言 主催 能楽協会名古屋支部 後援 名古屋市・熱田神宮 (終了予定八時四十分頃)
-----------------------------------	--	--	---	--	---------------------	--------------------------------	---	---------------------------------	---

片山慶次郎 幽花会 千603 FTEL 四九二一 AXL 四九二一 五三〇九番	武田志房 鳳鳴会 積古場 名古屋市千種区今池四丁目 1513 電話(五三)七三三三 (五三)七三三六	大槻清韻会 大槻文藏 千510 大阪市中央区上町A番七号 電話06(七六)八〇五五番	梅若盛義 梅若盛会 大阪国際フェスティバル能	片山九郎右衛門 幽謳会	観世清和	野村四郎	大垣浦声会 積古場 大垣市伝馬町大垣別院 電話(五三)七三三三 住所 京都市左京区下鴨芝本町天 電話(五三)七八一七〇三〇	観世喜正 観世喜之 加藤 保彦 高木 美智子 高山 圭一	壺泉嘉夫 泉泉会 名古屋市昭和区山手通3-8-2 電話(五三)八三三三 西宮市甲陽園目神山町三三二 電話(〇七九八)二四二五八	邦謡会 梅田邦久 清 沢 一 本 田 良 高 島 美 今 沢 和	浦田保親 浦田保浩 浦田保利
--	--	--	------------------------------	----------------	------	------	--	--	--	---	----------------------

大阪城天守閣改修記念 大阪城新能

7月29日 能3番豪華番組

第十七回「大阪城新能」はきたる七月二十九日(火)大阪府中央区・大阪城西の丸庭園で開催される。今回は大阪城天守閣改修・新能大阪本社発刊四十五周年を記念する催しとして、天下太平と五穀豊穡を祈念する祝賀能「翁」で開演、宝生流宗家宝生英照師がシテを勤める。さらに観世流能「半部・立花供養」(シテ梅若六郎)大蔵流狂言「仁王」(シテ茂山千作)観世流能「正尊」(シテ...

青陽会定式能(第34期)

八月十日(日)十時開演
名古屋能楽堂

東方 朔 星野 路子
丸 前野 郁子

俊 寛 飯富 雅介 算 敏一 大野 誠
間 佐藤 融

野 宮 中川 雅章 河崎 勲 大野 誠
合 能 留 柳原富司忠

玉 鬘 高安 勝久 後藤嘉津幸 竹市 学
間 井上 祐一

通 盛 祖父江修一
鐘 之 段 梅田 邦久
天 鼓 松山 幸親

邦楽指導研究会

平成9年度
社団法人東京芸術大学音楽学部同声会主催による「平成九年度・第十二回邦楽指導研究会」は、八月二十、二十一日の二日間、東京芸術大学音楽学部内(芸大校舎)で行われる。

能面・装束展観

7月26・27日
金剛能楽堂
社団法人金剛能楽堂財団による「金剛・能面装束展観」は、七月二十六日(土)二十七日(日)の二日間、京都、金剛能楽堂(中京区室町通四條上る)で開催される。

平成9年7月・8月放送

- (7月) NHK・FM能楽鑑賞(午前時~8時57分)
20日(日)「鳥道舟・鶴」~観世流~ 角 寛次朗
27日(日)「春 榮・玉 菖」~金剛流~ 金剛 永謙
- (8月) NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時57分)
10日(日) 故人をしのんで(1)
鶴沢 寿「一調・夜討首我」(詞・関根祥六)
寺井啓之「一管・音取」
桜間辰之「杜若」
17日(日) 故人をしのんで(2)
敷村鉄雄「一調・乱曲、四季」(詞・橋岡久馬)
奥 善助「朝長」
31日(日)「木賊」 ~喜多流~ 粟谷 菊生

名古屋城夏まつり 能・狂言特別公演

花伝の会

本紙六月号既報のように、「花伝の会」藤田六郎兵衛氏のプロデュースによる「名古屋城夏まつり」能・狂言特別公演が八月十六日(土)十七日(日)の二日間、名古屋能楽堂で開催される。この企画は、昨年の「秘曲の会」につづくプロデュース(パートI)で、本年は...

野 守

武田 邦弘 今枝 靖雄
黒頭 杉江 元 河村 大 助川 龍夫
間 柳原富司忠 竹市 学

附 祝 言 主催 青 陽 会
〔有料〕当日券 三千元
愛知県文化振興基金事業

大阪能楽会館

大 西 智 久
〒530 大阪市北区中崎西2-1-17

武田謳楽会

武 田 欣 司
武 田 邦 弘

名古屋淡交会

橋 岡 慈 観
三 交 会
瀬 戸 三 津 子

名古屋修 諷 会

梅 若 修 一

井 上 嘉 久
〒603 京都市北区紫野下馬田町六

名古屋橋 岡 会

春 鶯 会
梅 若 善 高

財団法人鎌倉能舞台

中 森 貫 太
中 森 晶 三

山 本 眞 義

山 本 章 弘

初 陽 会

武 田 宗 和

上 田 観 正 会 能 楽 堂

上 田 観 正 会
社団法人観正会 TEL0781-691154四九

松 音 会

泉 泰 孝
佳 泉 会
泉 雅 一 郎

第13回 衣斐正宜後援会能

八月二十三日(土)
名古屋能楽堂

〔第一部〕十一時始
名古屋能楽堂落成記念
特別企画(要招待券)

講演「徳川義直・宗春と
芸処名古屋」

南山大学教授 安田 文吉
近藤乾之助

仕事 二人 静
佐野 朗

〔第二部〕午後一時始
講演「能装束について」

夏休み親子
能楽教室

名古屋市、名古屋城振興協
会、名古屋市文化振興事業団
主催により「名古屋能楽堂・
夏休み親子能楽教室」が八月
六日(八日、十一日)十四日
の七日間開催される。

午後三時から四時半まで、
参加要件は、必ず親子二人
一組で申込みこと、締切七月
二十六日。
定員五十組百人、参加費
一組千五百円(七回通しの
受講参加費)
申込方法 往復はがきで、
名古屋市中区三の丸一―一
一、名古屋能楽堂「夏休み親
子能楽教室」係、詳細問合
せ名古屋能楽堂(TEL0
52・231・0088)
ワキ、笛、小鼓など七日間と

初夏から仲夏への舞台

「青陽会」と「大槻秀夫七回
忌追善能」「万作を観る会」

竹尾 邦 太郎

「景清」シテ徹二。藤屋
の引廻静かに下ると、へ斐
れ果てたる有様、は両手を膝
に身じろぎもせず床几に居
る。襟浅黄・小格子着付・白
大口・黒水衣、沙門帽子に面
は白く短い髪を帯て風貌
狷介を窺わせ、松門の鬚は児
祖のように自爾の陰気に開い
た。他人の容姿を許さず、
「姦し〜」と耳を放ち両手
は、節搦立つ指に見せる曲げ

浅井能楽資料館館長 山口 憲
能竹生島 シテ東川 光夫
ツレ衣斐 愛

狂言 芭山 伏
佐藤 融
井上 靖浩
野村小三郎

能放下僧 シテ衣斐 正宜
ツレ和久莊太郎

衣斐正宜後援会事務所
〒466 名古屋市中区御器所3-23-19
御器所パークマンション802
TEL052・882・5600

能楽協会名古屋支部主催
普及能

八月二十四日(日)
名古屋能楽堂

普及能(一部) 午前十一時開演
「女と影」について 泉 嘉夫

狂言 二文酒 井上 靖浩 佐藤 融
ツレ(女)泉 雅一郎
シテ(影)泉 嘉夫

能女と影 ワキ(武士)飯富 雅介

の慈悲もへ子に依りけるかや
とシオルと、恥かしと耐えて
いた父はへ御身は花の姿にて
とゆつくり身を廻らせ向き合
う廻りの、何処とないきとち
なさが良い。
語りは床几、駆け寄る源氏
の兵の、足音あわすかの六つ
拍子が効き、へ四方へはつと
ぞ、のサン廻に、逃げる兵の
イメージが鮮明。三保の谷と
の格闘は、へ(兜の鍔を)取
り外しく、と左手を上から
下へ二度驚かす型に力感
溢れる。キリの別れば、へは
や立ち降り、と左手サシで娘
を促し立たせると自身も立ち
左手を娘の肩に掛けて押しや
るように暫し同道するところ
など、無骨な父の心情沁々と
見せ、娘は振り返らずシテの

太鼓 鬼頭喜太郎
大鼓 寛 敏一
小鼓 柳原富司忠
笛 鹿取 希世
後見及 加藤 春枝
地謡 近藤 幸江
瀬戸 三津子
地謡 八神 博
黒田 孝充
松山 幸親
高橋 瞭一
梅若 鶴彦
梅田 邦久
三村 恵子
前野 郁子

普及能(二部) 午後二時開演
「雪女」について 梅田 邦久

お用の尼 佐藤 友彦 井上 祐一

能雪 女 シテ梅田 邦久
ワキ高安 勝久
アイ佐藤 融

後見 今沢 美和 地謡 高島 良一
泉 嘉夫 須部 勲
清沢 一政 河村 晴久
河村 和重
河村 晴道
太鼓 助川 龍夫
大鼓 河村真之介
小鼓 後藤孝一郎
竹市 学

〔入場券〕前売 二千五百円(当日三千円)
学生 千五百円
前売市内プレイガイド、チケットぴあ
(052・320・9999)
チケットセゾン (052・290・0200)

ワキ元へ行き、へ疑はせ給ふ
な、と小廻ワキにサス所、な
ど表現力の確、序ノ舞も細心
で美しく、そつは無いが彫ら
みを欠くか。キリのへ舞の唐
衣の、と左袖を右手に取って
見る所は平凡に思えた。(1
時間42分)
「棒縛」盗み酒を懲らしめ
られて目を受け、留守居を
仰せ付かる太郎冠者。融と次
郎冠者。雄雄だが、どっこい
機智に富む二人はそれを物と
もせず盗み酒に挑むところ
正に若者のパフォーマンスで
ある。しかし、棒縛りの状態
で酒を汲みはしても、頭にか
ぶるまでの執着はみせず踊
めた融が、代って飲んだ雄雄
の次に、試行錯誤も重ねず早
くも分別して酒にありつく、



宝生 英照

名古屋巽会
辰巳 孝

近藤 乾之助

佐野 由 於

倉本 雅

金剛 巖

金剛 永 謹

廣田後援会

廣田 陸 一
廣田 幸 稔

菊扇会
後援会

廣田 泰 三
廣田 泰 能

金春 信 高
金春 安 明

金春 欣 三

春敲会
名古屋金春会

金春 晃 実
金春 穂 高
廣瀬 瑞 弘

本田 光 洋

二井 栄 逸

福王 茂 十 郎

〒662 西宮市名次町六番十二号
電話0798①0772

（6）「初夏からの舞台」つづき

述懐にも妖気はならない。へ悲しさを、のシオリも客儀の同情を得んため...

込み式であらうと独立であらうと能楽堂の見所は開場時に点灯されればハナハナと...

恨なお深く、重荷を担がせ一度は外すが、（衆合地獄の、天秤棒を背に押しつけ...

拍子は八段、腰を沈めてキツと舞を捻るときに蛇体の動揺を暗示し...

「恋重荷・古式」シテ菊守の老人・嘉夫の、ツレ女御・雅一郎への密かな恋慕は...

「道成寺」シテ文蔵・横白二・白地・黒地・黒地・黒地・黒地・黒地・黒地・黒地...

「六地藏」の小アトと、立場を悪用して舞とは露知らず船客から酒をせびる...

「六地藏」の舟渡舞。早稲田大学演劇博物館振興基金の募金集めに...

「自然光」が採れる好立地好条件にありながら外光を探らなかつたのは不審...

「道成寺」の「舟渡舞」の船頭を演じるが、反道徳的な選曲が皮肉...

「六地藏」の舟渡舞。早稲田大学演劇博物館振興基金の募金集めに...

「六地藏」の舟渡舞。早稲田大学演劇博物館振興基金の募金集めに...



ワキ方高安流 山崎 俊 輔 大牟田市大字藤木一四八ノ二 高泉団地一〇一

叶石会 河村 真之介 466 名古屋市昭和区前山町二丁目二三 電話（〇五二）七六一一四八八二

名古屋高安会 高安 勝久 飯富 雅介 杉江 元

龍吟会 藤田 六郎兵衛 名古屋市中区橋下二丁目一〇番九号 電話（〇五二）五七一五七六三

前川 光 隆 前川 光 長 602 京都市上京区仁和寺街道千本西入 コスモトピアビル四〇二号 電話（〇七五）四六二四二一五

宝生 欣 哉 千111 東京都練馬区小竹町一五〇五 電話（〇三）三三九七二 七三三〇 〇三（三九五五）四七九五

幸友会 幸友 能 福井 啓次郎 福井 良久 福井 良治 柳原 富司 忠

青耀会 上田 悟 千50-02 和泉市青葉台58-4 電話（〇七二）五〇八五二一 名古屋市中区丸の内二二三 名古屋 積古場 一七 那古野神社 電話（〇五二）二〇一四〇三〇

豊嶋 十郎 千111 松戸市下矢切五五〇一五 電話（〇四七）三六二一九八二

桂 後藤 孝一郎 嘉津 幸 会

名古屋狂言共同社 井上 菊次郎 井上 礼之助 大野 弘之 井上 祐一 佐藤 友彦 佐藤 友彦 井上 靖 井上 靖 今井 枝靖 雄

森常好 東京都世田谷区世田谷一四七12 電話（〇三）三四二六 四八五三

亀井 俊一 保忠 雄 美

野村 又三郎 野村 小三郎 千460 名古屋市中区正木二丁目16-25 電話（〇五二）三三三三三 七五五三番

植田和光会 植田 隆之亮 千673 明石市松ヶ丘4の3 A6-801 電話 FAX 〇六八八二一三三七四

飯島 佐之 輔 千920 金沢市香林坊2-8-17

狂言やるまい会 野村 又三郎 野村 小三郎 千460 名古屋市中区正木二丁目16-25 電話（〇五二）三三三三三 七五五三番

谷田宗二郎 千603 京都市北区衣笠街道町31-7 電話（宅）（四六三）四八七五番

谷口 正喜 千603 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

事務所 名古屋市中区橋下二丁目7の5 井上菊次郎方 電話 052-3321-11430

谷田宗二郎 千603 京都市北区衣笠街道町31-7 電話（宅）（四六三）四八七五番

谷口 正喜 千603 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

事務所 名古屋市中区橋下二丁目7の5 井上菊次郎方 電話 052-3321-11430

谷田宗二郎 千603 京都市北区衣笠街道町31-7 電話（宅）（四六三）四八七五番

谷口 正喜 千603 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

事務所 名古屋市中区橋下二丁目7の5 井上菊次郎方 電話 052-3321-11430

谷田宗二郎 千603 京都市北区衣笠街道町31-7 電話（宅）（四六三）四八七五番

谷口 正喜 千603 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

事務所 名古屋市中区橋下二丁目7の5 井上菊次郎方 電話 052-3321-11430

谷田宗二郎 千603 京都市北区衣笠街道町31-7 電話（宅）（四六三）四八七五番

谷口 正喜 千603 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

事務所 名古屋市中区橋下二丁目7の5 井上菊次郎方 電話 052-3321-11430

親世流・金剛流
宗家本発行元

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2483 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種千種2丁目18-18
(郵便番号 464)

電話(052)731-7984
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円
郵送の場合 1年1800円
一 部 100円

名古屋 能楽堂 定例公演

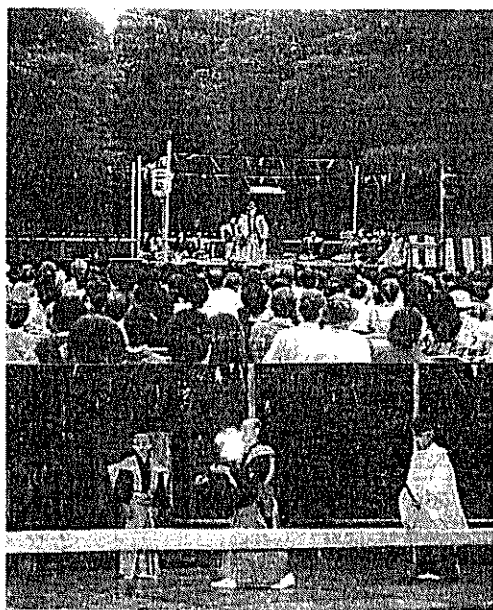
能楽普及事業実行委主催

10月から毎月開催

能楽をはじめとする伝統芸術の振興と文化交流の推進をめぐり、開館した名古屋能楽堂では、一般市民にひろく能楽鑑賞の機会を定例的に提供してまいらうと「名古屋能楽堂定例公演(市民能楽鑑賞会)」を企画、今秋十月から毎月公演を行うことになった。
この定例公演は、市民に低廉な価格で能楽鑑賞ができるよう入場料は四千元(前売、当日券とも)学生二千円とし、演能は能一、狂言一、舞二番が予定されている。
主催は、名古屋市、名古屋城振興協会、名古屋文化振興事業団を構成母体とする「能楽普及事業実行委員会」で、能楽協会名古屋支部が協賛、地元能楽師を中心として、東西の一流の能楽師を招き公演される。
初回は十月十七日公演、金剛流・金剛永徳氏が来演、能「那耶」の上演。
明春三月までの定例公演の日程および演目の予定は次の通り。

「因幡堂」(井上祐一) 十一月二十八日(金)午後一時三十分
能(観世流)「野宮」(泉嘉夫)、狂言(和泉流)「粗ない」(野村又三郎) 十二月十二日(金)午後一時三十分
能(宝生流)「海人」(衣笠正宜)、狂言(和泉流)「千鳥」(佐藤友彦) 平成十年一月二十五日(日)午後一時三十分
能(金春流)「翁」(昆沙門之風流)金春安明、野村又三郎 二月十三日(金)午後一時三十分
能(観世流)「楊貴妃」(留(梅田邦久)、狂言(和泉流)「文山殿」(野村小三郎) 三月十三日(金)午後一時三十分
能(観世流)「鞍馬天狗」(白頭(久田徹二)、狂言(和泉流)「新葉集」(井上清浩) 中学生対象に 能楽鑑賞会 名古屋能楽堂 名古屋能楽堂定例公演の実施とともに、主催の能楽普及事業実行委員会(名古屋市、名古屋城振興協会、名古屋市民文化振興事業団)では、名古屋市民教育委員会後援、能楽協会名古屋支部協賛のもとに、「名古屋能楽堂中学生能楽鑑賞会」を今秋十月から行

第32回 名古屋新能 能3番、狂言1番上演



名古屋能楽堂定例公演の実際として、主催の能楽普及事業実行委員会(名古屋市、名古屋城振興協会、名古屋市民文化振興事業団)では、名古屋市民教育委員会後援、能楽協会名古屋支部協賛のもとに、「名古屋能楽堂中学生能楽鑑賞会」を今秋十月から行

名古屋能楽堂 演能カレンダー

- 【8月】
- 23日(土) 衣斐正宜後援会能 (有料)
- 24日(日) 能楽協会名古屋支部「普及能」 (有料)
- 30日(土) 中部電力謡曲大会 (関係者)
- 31日(日) 小野 涛 鴻 会 (来場歓迎)
- 【9月】
- 7日(日) 能楽協会名古屋支部主催 大衆能 (有料)(番組②面)
- 9日(火) 落 語 狂 言 (有料)
- 13日(土) 中日文化センター発表会 (来場歓迎)
- 14日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)(番組③面)
- 20日(土) 「女性文化大学」講座 (無料)
- 21日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)(番組③面)
- 27日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)(番組③面)
- 28日(日) 和泉流狂言大会 (来場歓迎)

熱田神宮能楽殿催能

- 【9月】
- 15日(祝) 名古屋観世九草会定例能 (有料)(番組④面)

広田後援会能

10月5日 金剛能楽堂 広田後援会主催 第八十九回広田後援会能は、十月五日(日)京都・金剛能楽堂で開催される。午後一時三十分開演。第回は次のとおり。舞臺「美盛」(広田隆一) 狂言「呼声」(茂山千五郎、茂山千三郎、茂山正邦) 能「井筒」(シテ広田幸徳、ワキ谷田宗二朗、笛・森田保美、小鼓・成田達志、大鼓・谷口正喜、間・茂山あきら、地頭金剛永徳) 入場料(前売券四千五百円、当日券五千円)学生券二千円。取り扱い(金剛能楽堂、検書店、出演者、広田後援会。電075(781)1885、075(722)9123。

朝日ホール能

9月7日 観世会主催 社団法人観世会、アート・エイドなど主催の「第五回朝日ホール能」が九月七日(日)中央区浪花町の朝日ホールで催される。後援神戸市、神戸市民文化振興財団など、午後二時開演。狂言「忍八」(齊竹忠重、茂山あきら、岡村和彦) 能「一角仙人」(一角仙人、上田貴弘、旋陀夫人、笠田昭雄、龍神・山田龍之介、山田宜照、ワキ・福王和幸、ワキツレ山本順三、福王知登、笛・野口亮、小鼓・清水晴祐、大鼓・大村滋三、太鼓・三島元太郎、地謡・上田拓司ほか) 一般前売券五千円(当日券六千円)電話予約078・331・2467。

熱田神宮能楽殿 運営委員会

委員長 岡地幸雄
委員 一同

名古屋観世会

社団法人 鎮仙会

観世 鏡之 亟
観世 栄夫
観世 曉夫

財団法人 研能会

梅若万 紀夫
梅若万 佐晴

下田雄三

豊中市曾根東町四一三

雄謡会中部地区連合会

名古屋和石
一宮竹
岐山花
下呂雄
高山雄
倭文之屋社

山中能舞台
山中義滋
〒56 大阪市阿倍野区阪南町六一五八
電話(06)六九二一三八二五

笹月会 中川雅章
長浜市地蔵寺町八ノ二九
電話(058)063030番

洗心会 奥村富久子
〒600 京都市左京区永観堂西町二〇
電話(室)七七七〇七六七番

久田観正会
久田徹二
大倉流小鼓
松月会 星玉馬場信至
松月会 久野木孝一郎
松月会 前野郁子
松月会 松山幸親

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花長会
加賀敏彦
〒463 名古屋守山区森三丁目七〇九
電話(室)七七七一八九四五番

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 名古屋栄
翠謡会 岐阜・四日市
生駒里翠
名古屋市中東区社ガ丘3ノ1503
電話(052)703157一七番

観修会 祖父江修一
多治見市日ノ出町2丁目
電話(057)5727三六五六

猶思会 熊沢恵美子
名古屋市中東区平和ケ丘3ノ76
日車マンション四〇四

五月雅日記 (181)

萬葉の花紀行 (15)

えと文 二井栄逸

いわたばこ

思へるわれを

山にさの

花にかが

移るひねらむ

(一巻七の二三六〇)

この「やまぢき」には、色々と説がありますが、私はいわたばこを使わせて貰っています。いわたばこは、山地の湿った岩壁に生育する多年

草で、夏になると、赤紫色、又は、淡紅色、青紫色の花を咲かせます。

冬の内から葉が出ますが、たばこのように大ぶりの丸い葉になっていきます。昔、山に籠っていた頃、里びとから浸し物にしたいわたばこを買ったことがありましたが、ほう苦くてちよつと野趣を楽しみることができました。

山ぢきの萬葉の歌の意は、「命がけて思っている私なのに、あのしほみやすい山ぢきの花のように、あなたはもう気が変わってしまったのでしょうか」という男の心変わりを

非難する女の歌です。この青紫色のいわたばこの花が、岩壁に連らなって咲いているのを見ると、森の中の星を見るように美しいのです。



改修成つた 熱田能楽殿 9月から舞台再開

熱田神宮能楽殿は、既報のように観客席、屋根、空調、ロビーなどの改修のため七月、八月の二カ月間にわたり、休館して工事が進められてきたが、八月末をもってほぼこの大改修を完了、九月から一般の利用ができるようになる。

能「松垣」

10月4日 濤華能

第九回濤華能(福井啓次郎氏主催)は、きたる十月四日(土)名古屋能楽堂で、名古屋市民芸術祭協賛、八世福井初太郎五十年祭のタイトルで行われるが、とくに今回は、

熱田神宮能楽殿は、昭和三十年(一九五五年)に完成、東海地区唯一の能舞台として親しまれてきており、交通の便利性においても好立地にある。能楽協会関係者は、「こ

としは名古屋能楽堂の開館により、熱田能楽殿での演能を休演して多年の懸案であった改修工事をすすめることができた。これまでの定期能、社

中会、一般愛好者による演能など一層幅広い活用を期待したい」と語っている。

なお熱田神宮能楽殿の利用申し込みは、九月一日から受付られる。

詳細は電話〇五二(八八二)一七五一、熱田神宮能楽殿。

名古屋能楽堂の展示室は、毎月企画展を開催しているが、九月七日までの「收藏品展Ⅰ」につづいて、十二月までの企画展は次のとおり。

名古屋能楽堂 演能案内

八月三十一日(日)九時半始

名古屋能楽堂

素謡「鳥帽子折」ほか十八番、仕舞など

主催 濤 小 野 瀧 会

〔御来場歓迎〕

第三十九回 大衆能

九月七日(日)二部制

名古屋能楽堂

〔第一部〕(午前十時三十分開演)

観世流 能

近藤 幸江 井筒 高安 勝久 河村総一郎 柳原富司 鹿取 希世

和泉流 狂言 佐藤 友彦 後見 生駒 里翠 高島 良一 梅田 邦久 地盤 須部 雨敷 稲生 芳雄 加賀 中川 橋 敏彦 加賀 敏彦

宝生流 仕舞 小島 芳樹 松 虫 クセ 衣斐 愛 喜多流 能 長田 駿 野 守 飯富 雅介 後藤 孝一郎 大野 喜太郎 野 留 間 松田 高義 井上 高子 中村 和雄 吉川 寛治 和谷 丹 衛市

〔第一部〕(午後二時三十分開演) 宝生流 能 佐藤 耕司 玉 葛 高安 勝久 吉田 定男 後見 竹内 澄子 大松 福三郎 後見 玉井 博祐 稲葉 義行 稲川 寿一 鬼頭 正宜 和泉流 狂言 野村又三郎 大野 弘之 清 水 野村又三郎 (後見) 井上礼之助 金剛流 仕舞 屋 島 三村 恵子 殺生石 竹市 幸司 小林 忠三 岩切 直次 観世流 能 久田 徹二 飯富 雅介 河村真之介 鬼頭 好信 橋本 元幸 後藤 嘉津幸 大野 誠 西村 信広 野村小三郎 佐藤 隆 須部 幸親 加藤 保彦 須部 南 泉沢 一政

大江山 杉江 雅元 河村真之介 鬼頭 好信 橋本 元幸 後藤 嘉津幸 大野 誠 西村 信広 野村小三郎 佐藤 隆 須部 幸親 加藤 保彦 須部 南 泉沢 一政

附祝言 後見 中川 雅章 地盤 黒田 博 加藤 保彦 前野 郁子 須部 幸親 泉沢 一政

前売券 二千五百円(当日券三千円) 学生券 千五百円 前売り取り扱い市内プレイガイド、チケットぴあ、チケットセゾン、出演者

芳韻会 稲生 芳雄 半田市船入町三十一 電話〇五六九〇八二五

幸福会 近藤 幸江 岡崎市鶴田本町十一番地ノ三 電話(〇五六四)〇二五二九

重陽会 菊池 重郷 大山市大山大相生五九一六 電話(〇五六八)〇四五〇一

恵美寿会 衣斐 正宜 千代 西尾市住吉町三十一 電話(〇五二)二五九四番

衣斐正宜後援会 千代 名古屋市中区和区御器所3-23-19 御器所パークマンション802号 電話(〇五二)八八二一五六〇番

宝生流 嘉宝 会 名古屋市中区和区川名本町二ノ五一

豊嶋能の会 豊嶋 三 千 春

金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川 周子 名古屋市千種区西崎町三十一 電話(〇五二)七六一一三二五七

金剛流 景雲会 国際能楽研究会(I.N.I.) インターナショナル能楽インスティテュート (日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾) 宇高通成後援会 宇高通成 千代 京都市左京区高野泉町四〇 TEL(〇七五)七〇一〇七九三 名古屋事務所 前編安方 TEL(〇五二)八五二一三二四

春敲会 名古屋春栄会 金 春 晃 実 金 春 穂 高 廣 瀬 瑞 弘

伊勢金春会 宇 仁 田 吉 邦 伊勢市八日市場町5-16 電話〇五九六〇五二九八

長田 驍 後援会 千代 津市高野尾町三三五一四六 電話(〇五二)〇六九七番

喜多流 山 本 才

愛知県高浜市青木町三丁目七の五 電話(〇五六〇)五三一六一八二番

名古屋観世会定式能(四回)

九月十四日(日)十二時半始

名古屋能楽堂

井筒 野村四郎 高安 勝久 吉田 定男 久田 舞一郎 鹿取 希世

八句連歌 井上祐一 大野 弘之 後見 井上菊次郎

経 正キリ 清沢 一政 本田 一英 小島 邦久

通小町 大槻 文蔵 梅田 邦久 祖父江 修一

玄 植田隆之亮 河村 総一郎 助川 龍夫 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛

附祝言 主催 名古屋観世会 (終了五時前頃)

名古屋宝生会定式能(第34期) 十八代宗家 宝生英雄師追善能

九月二十一日(日)午後一時始 名古屋能楽堂

三 輪キリ 戸田 和 竹内 澄子 花キリ 衣斐 愛 玉井 博祐

政 飯置 雅介 後藤 敏一 鹿取 希世 後見 辰巳 満次郎 地謡 富田 哲也 寺部 正代司 衣斐 生 鬼頭 正照 和久 莊太郎 平子 福美 福川 寿一

百 萬 辰巳 孝 河村 真之介 大野 喜太郎

泣 盛クセ 衣斐 正宜 山内 満次郎 和久 莊太郎

玉 葛 竹内 澄子 稲川 寿一 三井 寺 倉本 雅 鬼頭 正宜

歌 占キリ 玉井 博祐 佐藤 耕司 和久 莊太郎 山内 満次郎

江 和久 莊太郎 山内 満次郎 高安 勝久 元 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛

第16回 名古屋能楽鑑賞会 九月二十七日(土)午後二時始

魚説法 野村 太一郎 野村 万蔵 後見 野村 晶人

解説 演劇評論家 堂本 正樹

江 西村 高夫 浅見 慈一 浅見 真州 宝生 関 亀井 忠雄 藤田 大五郎

江 後見 永島 忠修 地謡 柴野 正基 浅井 郁雄 後見 観世 鏡之丞 地謡 岡田 隆史 野村 四郎 清水 寛二 野村 文蔵 申込み、お問合わせは事務局へ

喜多流 和楽会 千516 伊勢市中島三丁目26-12 電話(059)261-159

高安流 岡同門会 岡次郎右衛門 清水 利宜 高坂 康弘 森 晴蔵 北野 三郎 塩田 耕三 伊藤 山久 谷口 雅信

富原富司忠 千466 名古屋市中区栄区瀬川町47-117 サザンビル八事2-1703 電話(052)833-1032

長生会 鬼頭喜太郎 好信 愛知県中島郡平和町城西 電話(052)919-600

助川龍夫 助川治

瀬尾乃武 千171 東京都豊島区西池袋1-30-10-105

野村万蔵 東京都豊島区南長崎六-15-13 電話(03)3395-0152

大藏狂言会 大藏 彌右衛門 大藏 彌太郎 大藏 吉次郎 千215 川崎市麻生区岡上四三八-1 電話(044)987-1187

茂山忠三郎 千550 茂山良暢 千606 京都市左京区北白川東小倉町28 電話(075)757-0121

鳳の会 林和利 井上祐一 佐藤友彦

能楽講座 能と狂言に親しむ会 梅田邦久 藤田六郎兵衛

ウシマド写真工房 千602 京都市上京区北野上七軒 TEL:075-211-3411

朝日カルチャーセンター 雛子教室 小鼓 後藤孝一郎 丸栄スカイル10階

花傳の会 事務局 名古屋市中区新道2-7-17 電話052-571-3464 (FAXとも)

栄能楽舞台 名古屋市中区栄五-1-14 電話(052)211-835

楽謡庵舞台 名古屋市中区瀬川町四七-183 電話(052)700-158

葵心庵舞台 尾張旭市東大町原田二四九三ノ二 電話(056)561-5151

彰諷閣 名古屋市中区瀬川町二一八〇二二 電話(052)811-3301

能楽の友社 同人一同

「おことわり」番中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。願不同と併せ何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

観世流・金剛流 宗家本元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通糞屋町東入
電話075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話(052)731-7984
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年1100円
郵送の場合 1年1800円
— 部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

〔9月〕

- 13日(土) 中日文化センター発表会 (来場歓迎)
- 14日(日) 名古屋観世会定式能 (有料)
- 20日(土) 「女性文化大学」講座 (無料)
- 21日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)(番組①面)
- 27日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)(番組③面)
- 28日(日) 和泉流狂言大会 (来場歓迎)(番組②面)

〔10月〕

- 4日(土) 詩 華 能 (有料)(番組③面)
- 5日(日) 名古屋卓楽会 (来場歓迎)(番組③面)
- 11日(土) 花 伝 の 会 (有料)
- 12日(日) 邦 謡 会 発表 会 (来場歓迎)
- 17日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (市民能楽鑑賞会) (有料)
- 18日(土) 名演・殉爛「伝統芸能」 (有料)
- 19日(日) 武田謡楽会秋季大会 (来場歓迎)
- 25日(土) 青 陽 会 定 式 能 (有料)
- 26日(日) 都 謡 会 大 会 (来場歓迎)
- 31日(金) なごや文化財講演会 (来場で申込み)

熱田神宮能楽殿催能

〔9月〕

- 15日(祝) 名古屋観世九阜会定例能 (有料)
- 23日(祝) 鳳 鳴 会 追 善 能 (来場歓迎)(番組③面)

〔10月〕

- 10日(祝) 幸 謡 会 大 会 (来場歓迎)
- 18日(土) 名 生 の 会 公 演 (有料)
- 19日(日) 狂 言・鳳 の 会 公 演 (来場歓迎)
- 25日(土) 猫 謡 会 大 会 (有料)

〔11月〕

- 23日(祝) 和 泉 会 (有料)
- 24日(振休) 狂 言・な の り 座 公 演 (有料)

熱田能楽殿の改修竣工 イス三百五十四席でゆつたり

9月から本格的に上演

熱田神宮能楽殿は、既報のように築後四十余年を経て老朽化のため、今年七月、八月の二カ月間にわたり、観客席のイス、床、壁、防音扉など、さらに空調、屋根、ロビーの大々的な改修を行い、このほど完工、九月から本格的に演能ができるようになり、九月は、十五日・観世九阜会定例能、二十三日・鳳鳴会大会が催される。

熱田神宮能楽殿運営委員会では、改修後の熱田能楽殿は、座席数三百五十四席、二階は二階、座席

熱田能楽殿の改修竣工式を九月一日午後二時から熱田神宮能楽殿で挙げる。今夏七、八月の二カ月間にわたり、観客席のイス、床、壁、防音扉など、さらに空調、屋根、ロビーの大々的な改修を行い、このほど完工、九月から本格的に演能ができるようになり、九月は、十五日・観世九阜会定例能、二十三日・鳳鳴会大会が催される。

熱田神宮能楽殿は、座席数三百五十四席、二階は二階、座席

会長に野村万蔵氏

日本芸能実演家団体協議会

社団法人日本芸能実演家団体協議会(東京都新宿区西新宿三丁目20-2、新宿オペラシティタワー11階)は、このほど通常総会および役員会で次のように平成九年度・十年度の新役員を決定した。

名誉会長 中村歌右衛門▽会長 野村万蔵▽副会長 吉田喜寿、春風亭柳昇、小泉博、専務理事 柳野正士▽常任理事 荒木昭夫ほか六名▽理事 坂田敏夫ほか八名

10月17日 金剛流「邯鄲」

名古屋能楽堂定例公演

名古屋能楽堂では、一般市民にひろく能楽鑑賞の機会をもつてもらうと、「名古屋能楽堂定例公演」の自主演能を企画、今年度下半期の開催予定を発表した。(本紙8月号掲載)

第一回は十月十七日(金)金剛流・金剛永謙氏が来演、「邯鄲」を上演する。

「邯鄲」は、「邯鄲の夢」「邯鄲の枕」の故事を能化した作品。現実・夢・現実の場面転換のあざやかなシテ座生の夢中の舞における舞台空間の素晴らしい用法。宿の女あるじ(間の役)の絶妙な配役上のバランスなどすぐれた特徴をもつ。そのうえ金剛流の個性が十分に発揮される能。金剛永謙氏の邯鄲は新しい名古屋能楽堂の定例公演の冒頭を飾るにふさわしい能といえよう。(演目解説より)

武田太加志13回忌追善

23日 鳳鳴会大会

熱田神宮能楽殿で

観世流・鳳鳴会(武田志房師主宰)は、さる九月二十三日(秋分の日)、熱田神宮能楽殿で「武田太加志十三回忌追善・鳳鳴会大会」を開催する。

当日は、観世流宗家・観世清和氏が来演、能「鶴亀」「道成寺」の二番、さらに番外能として「経正」上演、茶話「卒都婆小町」「恋重荷」「碓」など六番、舞楽「子、仕舞」など重厚な追善能会(番組③面)。

今回の鳳鳴会追善能に、武田志房師は次のようにあいさつしている。

大正二年、祖父宗治郎が、先々代宗家二十四世観世左近師の命に

つめていた。(関連記事③面)

前売一般四千円(当日四千五百円) 学生前売二千円(当日二千五百円) 前売券取り扱いは、名古屋能楽堂(052・231・0088) チケットぴあ(0522・320・9999) チケットセゾン(052・290・9999) 市内各プレイガイド。

名古屋宝生会定式能(第34期)

十八代宗家 宝生英雄師追善能

九月二十一日(日)午後一時始

名古屋能楽堂

三番 輪キリ 戸田和 竹内澄子
女郎 花キリ 衣斐愛 倉本博祐

経

政 飯富雅介 筑紫敏一
後見 辰巳満次郎 地謡 富田哲也
和久莊太郎 寺部一蔵 平子 稲美

百

萬 辰巳孝 河村真之介
舞 舞 舞 柳原富司志

竹生島 福川寿一
敦 盛クセ 衣斐正宜
松 虫キリ 佐藤耕司

泣

尼 井上祐一 佐藤友彦
後見 井上菊次郎

三井寺 倉本雅 地謡 稲川寿一
歌 占キリ 玉井博祐 鬼頭正男

江

和久莊太郎 山内崇生 藤田六郎兵衛
宝生 英照 高安勝久 河村純一郎
平調返 堀元正樹 福井啓次郎

後見 辰巳孝 柴田良助
辰巳満次郎 地謡 竹内澄子
鬼頭正男 加賀山通夫 高橋正章

正会員

(年四回)二万八千円
(当日の販売も致します)

学生券 当日券 三千円

事務所 名古屋市中千種区白鳥町二丁目一〇一
名古屋宝生会
島田住宅二丁目一三三〇
電話FAX052-231-1331
携帯TEL052-231-1331

吉野雅日記

(182)

萬葉の花紀行 (16)

えと文 二井栄逸

あかね

朝日のほる前の空の色は、茜色といわれ、人にあたる素暗らしい印象は、「茜さす」と、東、日、照る、君、紫等にかかる枕詞葉としてうたわれてきました。

その茜色を染めたのがアカネの根だったのです。生の時は、黄赤ですが、乾かすと赤紫になります。

飛鳥時代の歌人であった額田王(ぬかたのおほきみ)は次のような歌を詠んでいます。

あかねさす 紫野(むらさきの)の

歌の意は、「まあ、紫草が生えている野原を走りながらそんなことをなまけて、……あの人(天智天皇)が見るではありませんか。あなたはそんなに袖をお振りになったりして、でも嬉しい・やっばりあなたが好きだから」

滋賀県の蒲生野で紫草とりの行事がおこなわれたときの歌です。

相手は大海人皇子(天武天皇)で、二人の間には十市皇女(とおちのひめむす)が生れていました。額田王はどんな気持ちで、兄弟のはさまを住き来たのでしょうか。

アカネは、つる性の植物で、秋になると、淡緑色、又は黄緑色の五裂する合瓣花の小花を多数つけ、秋になると黒色の実になります。葉は四枚の輪生に見えますが二枚は托葉です。



熱田神宮能楽演能案内

武田太加志十三回忌追善風鳴会大会

九月二十三日(秋分の日) 午前九時半始

恋重荷	中川 雅章	武田 志房	地謡 小沼 清
梅江清	山藤 幸男	矢野 義章	地謡 明一 三宏政
初同上歌・クセ抜	松木 千俊	木下 義園	
口	山藤 幸男	矢野 義章	
梅	村上 郁子	武田 志房	
仕舞	舞		
遊	柳ヶ瀬 石井 鐘子		
上武田	上田 貴弘		
貴和	貴和		

鶴

鶴 武田 友志
亀 武田 文志
浅井 一元

道成寺

山崎 佐東子
福王 茂十郎
三宅 右近

砧

松木 千俊
大坪 重通
藤井 完治

辛都婆小町

松井 弘村
村上 清之
地謡 小島 一英

後見 觀世 清和	地謡 高橋 元伯
武田 清和	地謡 藤井 義一
武田 宗和	地謡 藤井 義一
後見 觀世 清和	地謡 藤井 義一
武田 宗和	地謡 藤井 義一
後見 觀世 清和	地謡 藤井 義一
武田 宗和	地謡 藤井 義一

名古屋能楽堂演能案内

第16回 名古屋能楽鑑賞会

九月二十七日(土) 午後二時始

解説 演劇評論家 堂本 正樹
狂言魚説法 野村 大一郎
後見 野村 晶人

乱	吉田 明	河村 総一郎
草子洗小町	木本 仁之	安福 建雄
融	長谷川 京子	河村 総一郎
替之型	番外能	福井 啓次郎
正	武田 和幸	安福 建雄
追加	武田 志房	竹市 学
御来場歓迎	幹事 松井 弘	小島 一英

和泉流狂言大会

九月二十八日(日) 正午始

鶏	石塚 恵子	太郎冠者 松井 文字
伊呂波	金法師 藤澤 敏子	何 某 長谷川 寿孝

醉	蓋	赤金子 時江	蓋	赤足立 米子
泉山伏	山伏 岡本 和彦	弟	長船 孝雄	
賞	智	増山 幸司	男	丹辺 文彦
竹生嶋参	太郎冠者 藤 智一	主	人林 泰礼	
薩摩守	新発意 伊藤 葉子	船	頭 鈴木 栄晴	
山崎通	市川 光子	茶	屋 長谷川 寿孝	
蚊相撲	大名二村 敏勝	蚊	の精 藤田 茂樹	
瓜盗人	人石黒 生子	主	能登善 奈恵	
清水	太郎冠者 増田 昭典	主	人木村 進	
伊文字	通行 小野 豊子	主	人佐藤 友彦	

〔入場無料・御来場歓迎〕
主催 狂言共同社
朝日文化センター狂言教室
熱田 わざをぎ会
狂言友の会
名古屋大 声会

〔入場無料・御来場歓迎〕
主催 幸友会別会鑑賞会
十月四日(土) 午後一時半始
名古屋能楽堂

舞臺子海	士 觀世 曉夫	福井 良治	鬼頭 喜太郎
能組	地謡 加賀 敏彦	久田 徹二	

特別寄稿

東海の能のあけぼの

名古屋能楽堂の改修工事完成



能楽協会名古屋支部 支部長 泉 嘉夫

今春完成をみた名古屋能楽堂の舞台は木曾松材のみによって作られていた...

このようにして充実した力のある能を毎月、この地区に提供すること、これがこの催しの主目的である...

能楽通史 (名古屋) ①

本紙では、名古屋能楽堂建設の機運が高まってきた平成二年から地域文化の源流、能楽の歴史の発展について...

江戸時代

- 一六〇七(慶長十二) 徳川義直、尾張に封ぜられる。
一六一一(慶長十六) 豊臣秀頼上洛。この時秀頼、義直に「刈田小鼓」を贈る。
一六一四(慶長十九) 名古屋城が完成する。
一六一七(元和三) シテ方・金春八左衛門(浄元)、尾張に召し抱えらるる。奈良住で御用のつと、尾張へ出勤する。
一六二九(寛永六) 笛方・藤田清兵衛、尾張に召し抱えらるる。
一六五九(万治二) 二代藩主徳川光友代替の祝能が三日間城内舞台で行われ、町人も見物する。名古屋城

- 一六八七(貞享四) 熱田で勧進能が行われる。当地の記録に見られる最初のもの。
一六八八(貞享五) シテ方・田中源之丞、召し抱えらるる。
一六九〇(元禄三) 光友大納言昇進の祝能(町入り)。この時、協師・西村庄兵衛、召し抱えらるる。
一六九四(元禄七) 綱誠公、家督相続の祝能(町入り)。
一六九六(元禄九) 狂言方・早川忠三郎、正規雇いとして召し抱えらるる。
一六九七(元禄十) 小波方・福井四郎兵衛、召し抱えらるる。
一七二三(正徳三) 狂言方・野村又三郎(信明)、京都住のまま尾張に召し抱えらるる。
一七二四(正徳四) 田中源之丞、古渡稲荷社にて一代能興行を行う。
一七二五(享保十) 狂言方・山脇源助古渡稲荷社にて七日間の狂言興行を行う。
一七二六(享保十一) 西村庄兵衛、清寿院境内にて大夫に古春左衛門を招き催能。
一七三二(享保十六) 七代藩主宗春、初入国の祝能(町入り)。(次号へつづく)

能 (②面より薄羅能番組つづき)

鷺

浅見 真州 親世 喜之 大日向 寛 佐々木則之 河村総一郎 親世 元信 福井 聡介 藤田六郎兵衛

狂言 萩 大名

野村 万蔵 井上 靖浩 後見 安田 龍雄

宝生流 一調 八

島 衣斐 正直 福井 良久

喜多流 一調 天

鼓 長田 曉 後藤孝一郎

乱曲 一調 浦 下部

親世 喜正 幸 清次郎

宝生流 雑子 延年之舞

亀井 広忠 藤田六郎兵衛

一調 一声 小

片山九郎右衛門 柳原富司忠

能 観世流之 垣

乱拍子 宝生 閑 亀井 忠雄 藤田六郎兵衛

前売入場券

特別席(正面) 一万五千元 指定席(臨正面・中正面の一部) 一万二千元 自由席(臨正面・中正面・正面地裏) 一万元

当日券

自由席 一万二千元 指定席 一万四千元 特別席 一万七千元

取扱い

チケット・ぴあ チケットセンター プレイガイド (但し前売にて売切の際は発売致しません)

お申込み

名古屋市中区大須三丁目二一四十四 福井 啓 次郎

名古屋卓楽会秋季大会

十月五日(日) 午前十一時始

番 組

素謡 融 田中英郎 柴田 正春

舞 子

波 吉野 学 福井啓次郎 大野 誠

葛

城 殿原 好枝 河村総一郎 大野 誠

若

野田 道子 高安 勝久 後藤孝一郎 助川 龍夫

狂言 柿 山 伏

佐藤 融 井上 祐一 後見 井上 靖浩

素謡 遊行 柳

矢橋 浩吉 五木田三郎

舞 子 耶

深見 しげ 河村総一郎 助川 龍夫

弱 法 師

橋本 とも 後藤孝一郎 竹市 学

仕 舞 屋

若山弥栄子

阿 松

竹村 武 諸隈 良吉

隅 田 川

飯富 雅介 河村総一郎 鹿取 希世

〔御来場歓迎〕

名古屋卓楽会 事務所 名古屋市中区元塩町一ノ一ノ一七 連絡先 電話 〇五二(六一)三六五九

10・12月公演 花伝の会

上方藤田流宗家・藤田六郎兵衛氏のプロデュースによる...

狂言なりの座 第2回公演

名古屋在住の若手狂言師として活躍する井上精浩...

二井栄逸師画抄集

98能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1998年版...

申し込み先 能楽の友社 千464 名古屋市千種区千種2-18-18

仲夏から盛夏への舞台

「文荷」今でこそセイイも市民権があるのだが...

拍子五ツ踏む意味も深長にへ足上頭下...

平成9年9月・10月放送

- 【9月】NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時57分)
14日(日)「黒塚」「半部」~宝生一 松本 惠雄
21日(日)「八島」「龍田」~金春一 金春 信高
28日(日)「山姥」「紅葉狩」~観世一 片山慶次郎

かきゆえ。舞上げて心ならずも出帆を促す心は子方を見送る視線...

「瓜盗人」シテ千五郎、肩衣の黒地に白鷺文様は、鷺と鳥、やから詐欺に通じる...

観世流・金剛流 宗家本流元 **檜書店**

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488 振替 00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替 01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (052) 731-7 9 8 4
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円
一部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

[10月]	
11日(土)	花伝の会 (有料)(番組⑥面)
12日(日)	邦謡発表会(来場歓迎)(番組⑥面)
17日(金)	名古屋能楽堂定例公演 (有料)(番組⑥面) (市民能楽鑑賞会)
18日(土)	名演・純彌「伝統芸能」 (有料)(番組⑥面)
19日(日)	武田蘆楽会秋季大会(来場歓迎)(番組⑥面)
25日(土)	青陽会定式能 (有料)(番組⑥面)
26日(日)	郁風会大会(来場歓迎)(番組⑥面)
31日(金)	なごや文化財講演会 (楽券で申込み)
[11月]	
2日(日)	名古屋金春流友会 (来場歓迎)
	金春流能 (有料)
3日(月)	幸友会秋の会 (来場歓迎)
8日(土)	朝日カルチャーセンター能楽会 (来場歓迎)
9日(日)	名古屋観世会定式能 (有料)
15日(土)	名古屋市民芸術'97主催事業 (有料)
16日(日)	名古屋宝生会定式能 (有料)
22日(土)	名古屋桐葉会創立40周年記念大会 (来場歓迎)
23日(日)	久田観正会秋季大会 (来場歓迎)
24日(月)	大蔵狂言會 (来場歓迎)
28日(金)	名古屋能楽堂定例公演 (有料)
29日(土)	秋の清福會 (来場歓迎)
30日(日)	名古屋淡交會大會 (来場歓迎)

熱田神宮能楽殿催能

[10月]	
10日(祝)	幸福會大會(来場歓迎)(番組⑥面)
14日(火)	秋の能楽同好會 (来場歓迎)
18日(土)	名生の會 (有料)(番組⑥面)
19日(日)	狂言・扇の會公演 (有料)(番組⑥面)
25日(土)	猫忠會大會(来場歓迎)(番組⑥面)
[11月]	
23日(祝)	和泉會 (有料)
24日(振替)	狂言・なりの座公演 (有料)

名古屋能楽堂に「老松の鏡板」設置へ
寄贈する会が募金活動

伝統文化の新しい殿堂として完成した名古屋能楽堂の舞台の「若松」の鏡板について、能楽関係者の間にも賛否さまざまな議論をよんだ。このたびの問題提起を真摯に受けとめ、演者、観客ともに末長く鑑賞していくために、「老松」の鏡板は欠くことができないものと立場から、名古屋能楽堂に「老松」の鏡板の設置が実現されるよう強く期待し、このたび、次のような「老松の鏡板寄贈のための募金活動」を展開している。募金のよびかけは次のとおり。

名古屋能楽堂に老松の鏡板を寄贈するための募金をお願い

先頃の新聞紙上でも報道された通り、能楽協会名古屋支部では名古屋能楽堂の現在の「若松の鏡板」のほかに、「老松の鏡板」が是非とも必要であるとの決定がなされています。この表明をもとに、このたび私たちは「名古屋能楽堂に老松の鏡板を寄贈する会」を結成し、ご賛同いただける市民、愛好

者の方々に広くご協力を呼びかけ、「老松の鏡板」を寄付金によって新たに制作し、名古屋能楽堂へ寄贈する運びとなりました。

名古屋市長松原武久氏も、「老松の鏡板」の寄贈について、すでに受け入れの意を表明していただきました。鏡板の調達・加工の手配も整えられました。

老松と竹の絵は、この方面では最も経歴に富む松野秀世師伯にお願いし、すでに江戸城本丸舞台の老松を模範とした構想による下絵も提示されました。

「老松の鏡板」の設置を願う多くの方々の熱意に支えられ、今秋末の完成を目指して各方面で準備が進められています。

経費には、制作上の実費として、一千五百万円が必要です。この金額を寄付金によって集めて参りたいと存じます。

なにとぞこの趣旨にご理解、ご賛同を賜り、より多くの方々のご支援で「老松の鏡板」の設置が実現致しますよう、ご協力をお願い申し上げます。

平成九年九月一日

名古屋能楽堂に「老松の鏡板」設置へ

寄贈する会が募金活動

「名古屋能楽堂に老松の鏡板を寄贈する会」(呼び掛け人) 飯島 宗一、おくむら文洋、北村 利弥、小島 廣次、谷田 武彦、中田 政雄、本山 ちづこ、泉 嘉夫、飯富 雅介、衣斐 正直、佐藤 友彦、竹内 澄子、久田 徹二、吉川 周子

「名古屋能楽堂に老松の鏡板を寄贈する会」(呼び掛け人) 飯島 宗一、おくむら文洋、北村 利弥、小島 廣次、谷田 武彦、中田 政雄、本山 ちづこ、泉 嘉夫、飯富 雅介、衣斐 正直、佐藤 友彦、竹内 澄子、久田 徹二、吉川 周子

【注】「老松の鏡板」は、制作の準備、調整等のため、当初の予定より若干遅れますが、年内には完成したいとありますが、これにより「募金は年内いっぱい受け付けて頂きます」と事務局では語っています。(編集部)

豊春会秋の能

創立35周年記念
10月19日 金剛能楽堂

大倉流十六世家元 大倉源次郎
藤田流十一世家元 藤田六郎兵衛

「入場料」五千円、学生二千円(全自由席)
チケットぴあ、花伝の会事務局(TEL 052・571・3464)にて取り扱います。
共同プロデュース

京都 金剛能楽堂で創立三十五周年記念「豊春会秋の能」を開催する。午後二時開始。入場料一級六千円、学生三千円。

番組次のとおり。
一編「龍太鼓」重本昌三、曾和正博▽仕舞「白楽天」今村慶子
「経正」中尾六三郎「松風」小倉春子「通小町」岩切直次「玉之段」
舞鶴幸洋
舞鶴子「歌占」豊嶋訓三
狂言「佐渡狐」茂山千三郎、茂山正邦、茂山あきら
能「六浦」シテ豊嶋三千春、ワキ清水利宣、笛・藤田光広、小鼓・曾和正博、大鼓・谷口正喜、太鼓・前川光隆、間・松本眞、後見・地謡中敷文、谷口雅彦、岩切直次、豊嶋晃剛、竹市幸可ほか。
豊嶋後援会 京都市東山区知恩院山内林下町四五五、電話〇七五・五六一・五四〇八番。

鶯

赤松 碩友 能
大槻 文蔵 能
福王茂十郎
河村真之介
大倉源次郎
藤田六郎兵衛
上田 悟
藤田六郎兵衛

大倉流十六世家元 大倉源次郎
藤田流十一世家元 藤田六郎兵衛

花伝の会特別公演
蠟燭能「鶯羽」
十月十一日(土)
午後六時三十分開演
名古屋能楽堂
対談「能の世界に生まれて」
大倉源次郎
ゲスト 網世 栄夫

邦謡発表会

十月十二日(日) 午前十時開始
名古屋能楽堂

番外狂言 田キリ 今沢 英和
素謡三 輪 高橋 和成 竹内 英雄
杜 若 峯 光子 高橋 樽子
楊 貴 妃 伊沢 歌子 飯島美津代
班 女 三村 律子 溝口 乙子
採 富士太鼓 西川喜代子 河村総一郎 鹿取 希世
采 女 高沢寿美子 河村総一郎 鹿取 希世
美奈保之伝 河村総一郎 鹿取 希世

素謡花 高木 町子 都築 健二
三 口 謙介
素謡経 正キリ 南原彩希子 笠 之 段 箕浦美智代
通 小 町 加藤井知子 雨 之 段 半田 智子
鉄 輪 丸井 寿子
深川寿美子
深川 勝久 藤田六郎兵衛

仕舞遊 柳ヶセ 小川富美子 夕 頭 山本 泉
野 宮 三口 謙介
素謡松 垣 木村 ひで 田中 純一
舞鶴子 養 老 堀 みどり 河村真之介 助川 龍夫
水波之伝 河村真之介 藤田六郎兵衛

卒都婆小町 高安 勝久 藤田六郎兵衛
一度之次第 杉江 元

仕舞 後見 河村 和重 地謡 青木 道喜
野 宮 三口 謙介 武田 邦久
素謡松 垣 木村 ひで 田中 純一 山本 泉

舞鶴子 善 知 鳥 宮川 千尋 河村真之介 藤田六郎兵衛
パンシキ 河村真之介 鹿取 希世

仕舞 獨脚野 守 佐藤 英生 半田 智子
網 之 段 盛ヶセ 二木 輝子 松 風 牧野あい子
女 郎 花 三浦百合子 蝶 丸 佐藤 壽子
徳田 文代 河村真之介 鹿取 希世
大和舞 河村真之介 鹿取 希世

素謡 田中 美子 加藤井知子 河村真之介 鹿取 希世
番外舞鶴子 葛 城 梅田 邦久 河村真之介 鹿取 希世

附 祝 言 大和舞 河村真之介 鹿取 希世

〔御来場歓迎〕 主催 邦 梅 田 邦 久 会

熱田神宮能楽殿演能案内

幸謡会大会
十月十日(祝)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞	若木幸太郎	河村真之介	鬼頭喜太郎
舞	若木幸太郎	河村真之介	鬼頭喜太郎
松	風増田保雄	河村真之介	大野誠
通	小町田中米子	福井啓次郎	大野誠
西	行桜川河泰子	福井啓次郎	大野誠
実	盛村邦子	河村真之介	大野誠
素	花 笹子	高取良屋	小林俊雄
景	清 荒川志づ	大見富美子	加藤マサ子
仕	舞 村キリ近藤幸子	九 寺島洋子	
井	高 鷺見良子	田キリ 百瀬永三子	
葛	城キリ石河フサ子	上 柿木園子	
柏	崎道行荒川俊子		

熱田神宮能楽殿演能案内

名古屋市民芸術祭'97参加
第15回鳳の会公演
十月十九日(日)午後二時開演
熱田神宮能楽殿

オープニングトーク	名古屋女子大学教授 林和利
狂言組	井上祐一 井上祐一 井上祐一 井上祐一
八幡前	井上祐一 井上祐一 井上祐一 井上祐一
連歌盗人	佐藤友彦 野村小三郎
文山賊	井上祐一 佐藤友彦

名古屋能楽堂定例公演

十月十七日(金)午後六時半始
名古屋能楽堂

舞	松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司
仕	舞 鐘之段	宇高 通成	竹市 幸司
松	虫 豊嶋三千春	地謡 百々 康治	百々 康治
狂	言 幡堂 井上祐一	佐藤 隆	後見井上礼之助

名古屋能楽堂定例公演

十月十七日(金)午後六時半始
名古屋能楽堂

能	子方羽多野響子	飯富 雅介	助川 龍夫
能	子方羽多野響子	飯富 雅介	助川 龍夫
能	子方羽多野響子	飯富 雅介	助川 龍夫
能	子方羽多野響子	飯富 雅介	助川 龍夫

名古屋能楽堂完成祝い

名演・絢爛「伝統芸能」
十月十八日(土)午後一時開演
名古屋能楽堂

狂	言 幡堂 井上祐一	佐藤 隆	後見井上礼之助
狂	言 幡堂 井上祐一	佐藤 隆	後見井上礼之助
狂	言 幡堂 井上祐一	佐藤 隆	後見井上礼之助
狂	言 幡堂 井上祐一	佐藤 隆	後見井上礼之助

武田謡楽会秋季大会

十月十九日(日)午前九時十分始
名古屋能楽堂

仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司
仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司
仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司
仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司

武田謡楽会

十月十九日(日)午前九時十分始
名古屋能楽堂

仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司
仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司
仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司
仕	舞 松 豊嶋三千春	宇高 通成	竹市 幸司

87歳、現役で能舞台に活躍

能笛 藤本利三郎氏

「伝統文化振興」伊勢市長表彰



能笛の演奏として、八十七歳の現在も舞台をつとめ、伊勢能楽連盟相談役として活躍する伊勢市在住の藤本利三郎氏は「多年能楽を通じて伝統文化の普及振興に寄与した功績」が顕彰され、去る九月一日、伊勢市の市制施行九十一年の記念日に水谷光男伊勢市長から表彰状が授与された。

受彰の栄誉に輝く藤本氏は、明治四十二年十二月十七日生れ。母田流の笛の奏者、西井巡太郎氏に師事、昭和六年「大江山」で初舞台、以来六十七年の長きにわたって一色神社例祭奉納能を本拠地として通町、鳥羽市をはじめ三重県下の各地での演能に現在も活躍、昭和二十四年十月神宮奉納能で、

坂田昭二氏著

「浮瀬」上梓を祝う会

9月9日 新阪急ホテルで盛会

大阪城新能の推進に参画すると共に、「近代能楽研究の先達・横山仙人の歳月」をはじめ芸能文化史の研究、著作に活躍する明石市在住の坂田昭二氏は、このほど大阪・和泉書院より「浮瀬(うかむせ)奇杯ものがたり」を上梓、この出版を祝う会が九月九日、大阪・新阪急ホテル二階「紫の間」で開催された。

祝う会の発起人は天野文雄、伊藤正義、関屋俊彦、江崎金治郎、林屋辰三郎、河村隆司ほか、世話人に前西秀雄氏が当たり、能楽

外の石川、富山の国民文化祭、今年の四国、丸亀の文化祭にも高踏にもかかわらず元気一杯舞台を動めていられる。とくに本年は米寿というおめでたい年であり、今年お元気で舞台を動められている現状を喜ぶ。

忠三郎狂言会

全国4都市で開催

平成九年度「忠三郎狂言会」は十月九日(木)東京・国立能楽堂、十月十七日(金)福岡・大濠公園能楽堂、十一月一日(土)大阪・大槻能楽堂、十一月十一日(火)京都・観世会館の全国四会場で開催される。

第15回梅若盛義

「こころみの会」

梅若盛義後援会自主公演の「こころみの会」は十五回を数えるが、本年度二回目の公演が十月十二日(日)東京・国立能楽堂で開催される。

東京

「太刀奪」茂山良鶴、茂山七五三、茂山千三郎、茂山千作。「月見座頭」茂山忠三郎、茂山千作。入場料S(正面指定席)五千五百円、A(脇・中正面指定席)四千五百円、B(脇・中正面席)四百五十円、C(当日券四千五百円)学生(二階席)二千五百円。申し込み先 忠三郎狂言会事務局(京都市左京区北白川東小倉町二八、TEL075-231-0085)

二井栄逸師画抄集

98能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1998年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の美麗カレンダーです。◎予約特価 1部1800円、郵送の場合送料とも1部2200円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律600円、例・3部の場合送料とも6000円)◎予約申込み期限11月20日(それ以後は部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい)◎お申し込み方法 ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。(電話での受付はいたしません)FAXの受付は致しません。FAX番号 052-733-2837

申し込み先 能楽の友社

〒464 名古屋市千種区千種2-18-18 FAX 052-733-2837 振替口座 00800-6-36393

青陽会定式能(第44期)

十月二十五日(土)十二時半開演 名古屋能楽堂

Table listing performers for the 44th regular performance of the Aoyang Club. Columns include roles like 能山, 仕舞, 狂言, 能融, 能班, 能半, and names of actors such as 岩船, 松風, 梅田邦久, etc.

都 謡 会 大 会

十月二十六日(日)午前九時半始 名古屋能楽堂

Table listing performers for the Grand Meeting of the Dō Ryū Kai. Columns include roles like 連吟, 小袖, 法師, 俊成, 草子, 須磨, 葛城, 須磨, 須磨, 須磨, 須磨, and names of actors such as 小袖曾我, 福島中子, 天野到, etc.

平成9年10月・11月放送

- 放送スケジュール: (10月) NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時~8時57分) 5日(日)「揚貴妃」〜観世流〜橋岡久馬, 12日(日)「殺生石」〜宝生流〜渡辺三郎, 19日(日)「夕顔」〜喜多流〜内田安信, 26日(日)「松虫」〜観世流〜藤井徳三. (10月) 教育テレビ (午後3時~4時) 10月11日(土)能「松山天狗」〜金剛流〜豊嶋三春・森常好. (11月) NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時~8時57分) 2日(日)「遊行柳」〜観世流〜梅若恭行, 9日(日)「班女」〜宝生流〜佐野三朗, 16日(日)「花籠」〜観世流〜藤波重潤, 23日(日)「野宮」〜金剛流〜福田道雄, 30日(日)「求塚」〜観世流(再)〜坂井音重.

熱田神宮能楽殿演能案内

猶惠会秋の大会
 十月二十五日(土) 午前十時始
 熱田神宮能楽殿

田村
 杉山 房子 橋本 雅一
 大河戸 こと 梅若 善久

千手
 川田 昭子

野宮
 安藤美恵子 梅若 善久
 熊沢恵美子 神谷 千津 梅若 善久
 井戸 良祐

舟弁慶
 竹中 隆子 河村総一郎
 藤井啓次郎

雲林院
 河合紀代美 河村総一郎
 藤井啓次郎

自然居士
 谷 節子 河村総一郎
 藤井啓次郎

山姥
 安藤美恵子 河村総一郎
 藤井啓次郎

法師
 外山 聖子 岡田 晃一
 中村 悦子 池内光之助
 熊沢 光俱

恋重荷
 池内幸三郎 熊沢 光俱
 熊谷 り江 井戸 和男

高砂
 日下すみ子 寛 敏一
 八段之舞 藤井啓次郎
 助川 龍夫

松風
 杉浦 一枝 寛 敏一
 福井啓次郎 鹿取 希世

桜川
 鈴木 ふく 寛 敏一
 後藤孝一郎 鹿取 希世

巻絹
 神谷 千津 寛 敏一
 後藤孝一郎 鹿取 希世

小督
 熊沢恵美子 寛 敏一
 後藤孝一郎 鹿取 希世

附祝言
 主催 猶 恵 会
 熊澤 恵美子

〔御来聴歓迎〕

晩夏から初秋への舞台

「花傳の會特別公演・小鼓の世界」
 「衣斐正直後援会能」 「普及能」と
 「熱田神宮能楽殿改修祝賀能」 「大
 阪梅酒会」

竹尾 邦太郎

「小鼓の世界」は笛方藤田流宗家六郎兵衛主宰の「花伝の會」が企画した昨夏の、笛方全三流の集う「笛・秘曲の會」に次ぐ小鼓方全四流の「秘曲の會」である。番組は、小鼓の一調と一調一声を交互に配し、小鼓の特徴を印象付けるため冒頭二番に太鼓と太鼓の一調一音を置く、即ち「五様蘭曲、治・市和」と「班女、良助・六郎兵衛・文蔵」に「屋島、富司志・清司」「玉鬘、純三・栄夫」「小香、正昭・邦久」「松虫、遠志・曉夫」「三井寺、源次郎・文蔵」である。

四流(大倉・觀世・幸・幸清)の手付(楽譜)の相違は調子術も無いが、「玉鬘」あとの休憩後に解説があり、本邦初演、小鼓四流を揃えた大小「楽」の奏で演奏(市和、源次郎・純三・遠志・富司志、良助)が成程と見所を感らせた。

調子の掛け方の縮短、掛声の有無長短、間(ま)の取り方などなど実際に見聞き出来る、当然のことながら曲の寸法はぴったり合気実に面白く、所謂粒(打ち)ポ・ポ・チ・タ・ツに松本たかしの句集「野守」の一句「チ、ポ、と鼓打たうよ花月夜」を思い出したりもした。

市川 眞陰 個展
 10月22日(土) 津市市
 能面作家・市川眞陰氏の個展が十月二十二日から二十六日まで五日間、津市の三重画廊(中央一八一)で催される。

新作能面展
 朝日カルチャー
 朝日カルチャーセンター面打ち教室では、十月十二日から十八日まで七日間、名古屋市中区栄の丸栄スカイル10階、朝日ギャラリーにて「第19回新作能面展」を開催する。

物着は柱杖を預けるだけ、クセから羯鼓、小歌、は散を油断させるといふより生真面目なシテ、の印象、地(乾之助・良助)の浮きやかさに比して遊狂の気分は薄く、一松、湖上に出現、の腰に数拍子、舞台に入り宝珠をワキに捧げると、艶々、波を蹴立てる乱れ足音が少々不安に思えたが、絡めて爽快、トメは三ノ松、乗込拍子二ツ、飛返り左袖懸、立つと袖ハネ、地一杯に右ウケ袖返シ留拍子、引き締った若々しい舞台だった。(1時間14分)

「山伏伏」(包つと)は包み、ここでは弁當包。機・増浩の弁當を食って何食わぬ顔の通り掛かりの者・小三郎、偶々傍に熟睡の山伏・陰に罪を転嫁するが結末は如何。口角泡を飛ばし難詰の増浩、苦境打開は法力に物を言わせんと息巻く陰、横着にも山伏を見越せる小三郎、名のり座間人の脱演は気合が入る。逃げる小三郎が二ノ松から法力で引き戻され、シテ柱に自ら張り付けられる所、「もはや御無用ござる」と去る二人の背後へ「この行を解いてから去て下され」と哀願、鼓をひいて入る結末もながしのかのベソッスがあり結構。(23分)

「放下僧」 放下は中・近世の春間芸能の一、小切子と操り、小歌を唄い、八拍(やつぱち)を打ちなどし、僧形の者が多かったといふ、即ち放下僧。出家のシテ兄、在家のツレ弟小次郎の親望もだし難く放下に身を委し親の敵ワキ利根僧徒を討つ。

前場、ツレ弟太郎、若気の直情径行は文字通り時分の花に似、後温順慎重なシテ正宣と対照。後場、シテは金襴の角帽子を沙門帽に、水衣は濃紺を菊色に替え、白大口を穿き、羯鼓を掛し、杖を持つ。ハ定めなき世に古川の、と独りツツと勾欄に寄つて膝をつき流れを見るところ、感慨は一抹の不安か。下人アハ一拵の経路な窓で世間を覗きたいワキ雅介とやすどりの充実は、ハ金龍殿の、と柱杖を軽く二ツ突くのはシテの緊迫はいかに血気に逆るツレ

あろう。人の心を種とする大和歌が万の言の葉、万葉集となる如く、想いの丈が長ければ、心象も具象と化する、がメインテーマ。亡妻恋慕のワキ武士が出遇うシテ影(幻)が黄泉へ誘えば、現(うつ)のツレ女はそれを遮る、の構図に見える。影と女の連舞の、序ノ舞は時に形影相重なるが、相克の様相は武士の目に映る心象風景であろう。幻影を断たんとする武士の虚しい太刀風、二の太刀の塚への突きも手応えはなく茫然、のワキ雅介が好演。

シテ泥眼・機白・白練腰巻、白舞衣(星辰文)重折、ツレ節木増・機白赤・灰色地腰巻・赤地縫箔重折・持枝・喜夫・雅一郎の、蝶が戯れるかの風情に底流する無常感も佳。(56分・8月24日・普及能第一部)

「小鏡治・黒頭別習」 熱田神宮能楽殿改修祝賀式能は当神宮に因む草薙剣の靈験譚をクセにも「小鏡治」、小香は黒頭より更に重く一子相伝という。地(邦久・雅和)、嚙子(六郎兵衛・啓次郎・眞之介・龍夫)全て長持。シテ喜夫、前は喝食姿で種徳を、シテ喜夫、赤地縫箔(龍目花ノ丸)着付・赤地縫箔(扇扇花ノ丸)着付・赤地縫箔(扇扇花ノ丸)着付の装束は爽やかな印象。ハ攻撃的、と居立ち、ハ火焔を放ちて敵を討つ、と立つ敏捷は以下も飄爽。中入はハ必ずその時節、と構態に入り踏みとめ、ハ参り会ひて御力、とワキを見込み詰めて左手サシ、ハ夕雲の、と軽やかな獸足で走り入るのも胸がすく。後は黒頭に面狐蛇の特異。一旦幕ハ退き、両袖張って乱序で出るのは獅子そのもの、獸足の疾駆は三ノ松を往復の一ノ松、勾欄に左足掛けてハいかにや宗近、とワキに見せる威厳も舞動からキリへ、獅子に紛う豪快な味は薄いように思えた。ワキツレ正樹アハ一拵。(60分・9月1日)

「女郎花」 夫頼風の安心に入水した妻、その姿から生えた女郎花を懐かしむ夫が近寄れば忌避する、という。前場、旅僧にその女郎花の因縁を言い聞かせる思い

消えるシテ基徳、散しい面の附に内股の不思議な色気は後シテにも投影し、何かとつく感じは上ゲ端の後追い入水の型、キリでハ媚しやとて、と膝行する所など、その粘性がみられユニーク。(1時間13分)

「雁陣」 射る前に横合いかから磔で仕留められた雁の所有権を主張し、己れの拙劣な弓の技倆は自覚しないシテ老大名・幸四郎は仲間人も呆れ返る頑固。近年その飄逸味は益々味わい深く、チャップリンを凌駕する。(15分)

「花籠・鏡ノ伝」 シテ和男、面増・機白・金銀杖重折文相着付の気品は、前は段唐織の豪華、後は女笠・赤地縫箔腰巻・白綾重折に守袋・文巻。狂は花沢山の籠の重味気にならなくも無いが、ハ花を手向け礼拝し、と扇の上の花籠を置き下居合傘の裡、込み上げる懐かしさにシオル所、いかにも哀れを誘い、クセではハ(それかと思ふ面影)の、あるか無きかにかけるへば、と面を細かく遣う所、美しかった。(1時間14分)

「養上・梓ノ出・空ノ折」 シテ善高、面泥眼・機白・赤地金縫箔着付・黒地金立羽火焔太鼓文縫箔腰巻・金地枝重折御所事文唐織。三ノ松で既に気品の中に妖気を孕む。小香で一ノ松、勾欄を車の長柄に見立てて送り付きシオル所、唐織の文様に豪華の音が重なり、遣る方ない悲しさはいや増す。クドキはツレ善久と連吟。枕ノ段はハ光とぞ契らん、と沢辺の鼓を右下に見て面を左へぐぐと上げてゆく所、ハ尚も思ひは、と扇を抱き、出小袖(養上)眺め付けて殆どと扇を投げつける所、涙の恨みの吐露の強烈。後は機長袴に白綾を被く、ワキの折りに裾シテが被衣を脱くと、長巻を左手に取り、右手に手繰って巻きつけて、静かに立つところ、折るワキの面前ハその長巻を投げつけワキがシテを見失うところ、鬼氣迫り善高完実ぶりをみせた。(49分・9月6日・梅酒会・能楽会館)

〔訂正〕 前号「放送案内」で、10月26日「松虫」喜多流・藤井傳三氏とあるのは観世流の誤りでした。お詫びして訂正します。

発行 能楽の友社

名古屋市中区千種千種2丁目18-18 (郵便番号 464) 電話 (052) 731-7 9 8 4 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円 郵送の場合 1年 1800円 一 部 100円

親世流・金剛流 宗家本元 榎書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話 03(3291) 2488 振替 00130-7-3552 下 604 京都市中京区二条通鉄屋町東入 電話 075(231) 1990 振替 01010-0-113

能楽の友

名古屋能楽堂 演能カレンダー

〔11月〕

9日(日) 名古屋親世会定式能 (有料)(番組①面)
15日(土) 名古屋市民芸術'97主催事業 (有料)
16日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料)(番組②面)
22日(土) 名古屋桐葉会創立40周年記念大会 (来場歓迎)(番組②面)

23日(日) 久田親正会秋季大会(来場歓迎)(番組③面)
24日(月) 大蔵狂言会(来場歓迎)(番組③面)
28日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)(番組③面)
29日(土) 秋の清調会(来場歓迎)(番組③面)
30日(日) 名古屋淡交会大会(来場歓迎)(番組③面)

〔12月〕

6日(土) 名古屋園花会(来場歓迎)(番組④面)
7日(日) 歳末助け合い運動協賛能 (有料)
12日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)
13日(土) 名古屋市・京都市職員謡曲文交会(来場歓迎)
14日(日) 壺泉会能 (有料)(番組④面)

熱田神宮能楽殿催能

〔11月〕

23日(祝) 和泉会 (有料)
24日(振休) 狂言・なのり座公演 (有料)(記事④面)

〔12月〕

6日(土) 名大親世会定期自演能 (来場歓迎)
20日(土) 尾州座公演 (有料)
21日(日) 叶石会大会 (来場歓迎)



土谷喜八郎会長

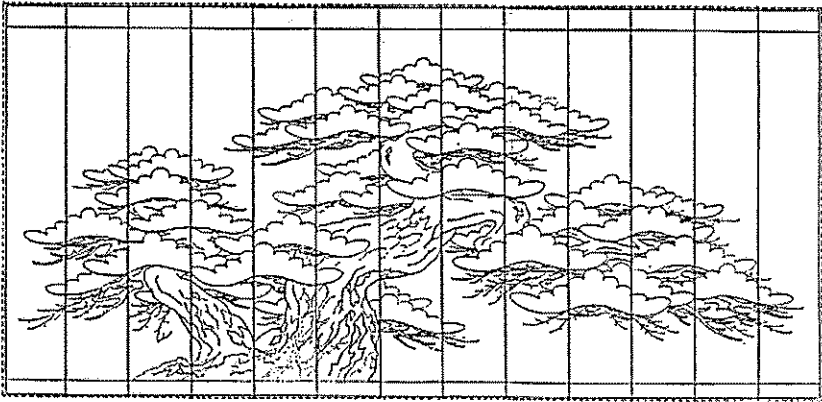
室町時代から現在に至るまで毎年三月十一日伊勢市の一色神社例祭で絶えることなく奉納され四百年の伝統をもつ「一色能」は、このたび文部大臣から「平成九年地域文化功労者」として表彰され、十一月七日東京・如水会館で授賞式が行われた。

「一色能」が文部大臣賞 地域文化功労者表彰の栄誉

地域文化振興への功績が顕彰されたものである。文部大臣表彰を受けた同保存会土谷喜八郎会長は、その喜びを次のように語っている。

「今日まで一色能を守り続けてこられたのは先人のご努力によるものであり、まずは心から感謝の意を表したい。と同時に、能、狂言能装束着付け等について、ご指導を頂いている先生方ならびに町民町役員、そして保存会のみならず、対しお礼を申し上げます。」

この賞はひとり保存会に対してのものではなく、平素のご理解とご支援を賜っている町民ならびに町の役員各位に対してのものである。今後ともこの賞に恥じないよう更に精進し、一色能を通じて地域の文化の振興と活性化のお役に立つべく努力していく所存であります。



名古屋能楽堂 「老松」の鏡板、鋭意進捗 年末までに完成めざす

名古屋能楽堂の鏡板について本紙前号既報のように「老松」の鏡板を設置しようとの要望が高まり、名古屋能楽堂に老松の鏡板を寄贈する会が主体となって募金活動がすすめられており、愛好者を中心に募金が進められている。

「老松」の制作は、松野秀世画伯により下絵が提示され、能楽協会名古屋支部ならびに寄贈する会の有志との相互の交流と懇話による下絵の手直しなどが進められ、完成に向けて鋭意進捗中である。

この下絵の手直しにより、当初の製作予定がずれ込み、完成は年内一杯の見通しとなりました。より素晴らしい鏡板製作のために、やむを得ないことと本会でも判断いたしています。どうか皆様方にもご了解いただきますようお願いいたします。

なお、完成予定の遅れにもない、募金期間も年内一杯を募金受け付け期間とさせていただきますことといたしました。まだまだ目標額には遠いものがあります。関係者一同一層の努力を致して参る所存です。どうか皆様方におかれましては、ご協力をお願いいたします。

お言葉と、ご寄金とが寄せられつつあり関係者一同大変心強くあらためて感謝申し上げます。鏡板の製作につきましては、現在尾張旭市の広徳寺を画室として拝借し、松野秀世画伯と、製作協力をお願いしている画師の方との共同作業により、竹の部分からの製作が進められています。最初の下絵のご提示をいただいた後にも画伯と能楽協会名古屋支部との間で懇話がもたれ、相互の対話と理解のもとに、松野画伯が下絵の若干の手直しをご快諾下さるなど、老松の鏡板製作に寄せる関係者の熱い思いが、一丸となって進められていることをご報告させていただきます。

能で観る 平家物語 シリ 明春4月から毎月公演

「能で観る平家物語」として、来年四月から十二月シリーズで毎月名古屋能楽堂で上演される。この企画制作、主催は、親世流シテ方大槻文蔵師と藤田流師方、藤田六郎兵衛師。

リザーブシート(全十二回、指定席六万円。コーディネートとして、作家の井沢元彦氏が解説。公演内容・チケットに関する問い合わせは、052・571・3464(藤田六郎兵衛事務所)06・762・6393(大槻文蔵事務所)。

名古屋能楽堂 定例公演好評

名古屋能楽堂の定例公演は、その第一回として十月十七日金剛流能「那耶」が金剛水師により上演され、満席の観客で終わって盛況にスタートしたが、第二回公演は十一月二十八日(金)親世流能「野宮」(泉嘉次郎)狂言「柳ない」(野村又三郎)の上演(番組本号)面掲載。

さらに第三回は十二月十二日(金)宝生流能「海人」(衣笠正宣)狂言「千鳥」(佐藤友彦)で上演される。

問い合わせは名古屋能楽堂(電話 052・231・0088)

平成9年11月・12月放送

- 〔11月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時57分)
9日(日) 「班女」 ~宝生流~ 佐野 萌
16日(日) 「花篋」 ~親世流~ 藤波 重満
23日(日) 「野宮」 ~金剛流~ 種田 道雄
30日(日) 「求塚」 ~親世流(再)~ 坂井 音重
〔テレビ〕教育 11月29日 14時~15時15分
能「船井慶」親世流 大槻 文蔵
- 〔12月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~8時57分)
7日(日) 「小督」 ~親世流~ 梅若 万紀夫
14日(日) 「船井慶」 ~宝生流~ 近藤 乾之助
21日(日) 「袖崎」 ~寶多流~ 大島 久見
28日(日) 「和布刈」 ~親世流~ 山中 義滋
〔テレビ〕 12月12日 12時15分~14時15分
衛星第二
(1)新作品「伽羅紗」・梅若六郎舞台生活45周年記念公演
梅若六郎・梅若晋矢・山本東次郎ほか
(2)器楽曲「田園の驟雨」金春惣右衛門作詞
藤田大五郎・幸清次郎・植原崇志・金春惣右衛門
~平成9年10月21日・サントリーホールで収録~

朝日カルチャーセンター 能楽会

十一月八日(土) 午前九時始
半能「胡蝶」(シテ水野すま子)能「玄象」(前シテ橋進、後シテ田中米子)狂言「清水」(増田昭典)素四番、舞孺子八番、仕舞十一番ほか一調、連調、連吟、独調など。
(御来場歓迎)

名古屋親世会定式能(第五回)

十一月九日(日) 十二時半開演 名古屋能楽堂

鉢 久田 敬二 関根 祥六 宝生 開 野口 隆行 高島 良一 須部 一政 祖父 江藤 一 野村 又三郎 野村 小三郎 野村 又三郎 後見 野口 隆之

今 後見 梅田 邦久 地謡 須部 一政 野村 又三郎 後見 野口 隆之

殺生石 親世 芳伸 高安 勝久 河村 真之介 松田 高義 柳原 富司 志房 地謡 正邦 一 四時半頃(終了)

附祝言 後見 小島 一英 地謡 高橋 加賀 幸親 正邦 一 四時半頃(終了) 当日券 八千円 主催 名古屋親世会

越前池田 新作能面を公募

福井県池田町(杉本博文町長)では、明春二月六日から十七日まで、同町で「越前池田 能楽・能楽祭」を開催するにあたり、芸術文化の振興と能面作家の育成を目的として、新作能面を全国から一般公募している。

池田町は「能楽の里」を町づくりの大きな指針とし、平成四年から「全国民俗芸能伝承交流大会」を開催、「能楽の里歴史交流館」を開設、平成七年にはその集大成として、組立式の能舞台を備えた「能楽の里・文化交流会館」を建設、今年、さらなる伝統文化の発展への一役を担い、地域活性化を図るため「越前池田 能楽・能楽祭」が開催される。

なお大賞の作品をつかって能が演じられる。出品は一人二点まで▽出品料1点につき千円▽応募期間11月1日(11月10日)▽入場券12月1日(11月20日)▽入場券12月1日(11月20日)▽入場券12月1日(11月20日)...

観能隨想

「江口」に酔う

「世の中を厭ふまでこそ難からめ飯の宿りを惜しむ君かな」西行。この贈答歌の後者が「江口」の能の主題である。神崎川が淀川の本流からわかれ所にある江口の里は、旅人を慰める遊女が集まっていた。繁華した遊樂の地であった。

君の仮りの姿であることは自明のことであるが、後シテ江口の君は、説話にあるように、能の途中、キリの部分で、普賢菩薩になるのであろうか、それと始めから、後シテ江口の君は普賢菩薩の化身なのであろうか。月澄みわたる水面に漕ぎ出された江口の君の川道通の月の夜舟、ワキ旅僧は、眼前にはなやいだ舟遊びを見るのである。

愛欲に染む浮草のはかない生に對する仏の救いを示している。クセから最後までシテは舞い続けるのであるが、この場合、象徴性というものが中性的になっていく。「ありがたくこそは覚ゆれ」とワキは合掌し、謡のうちにシテは舞にはいるが、情緒的なものを(鶴田都彌子)

能「道成寺」

30日、名古屋淡交会、名古屋生会、名古屋三才会、名古屋三才会、名古屋三才会...

能「花鏡」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「山姥」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「舟橋」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「花鏡」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「山姥」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「舟橋」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「花鏡」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「山姥」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

能「舟橋」

名古屋生会、名古屋生会、名古屋生会...

二井栄逸師画抄集 98能画カレンダー ご好評を頂いております。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の美麗カレンダーです。

名古屋生会定式能(第41期) 十一月十六日(日)午後一時始 名古屋能楽堂

記念能楽囃子大会 十一月二十二日(土)午前九時半始 名古屋能楽堂

久田観正会秋季大会

十一月二十三日(日・祝)十時始

名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Kudakansei Kai Autumn Festival'. Roles include '舞竹', '小袖', '巻', '仕舞', etc. Performers listed include '飯沼比奈子', '飯田きょう子', '倉地芽里', etc.

大蔵狂言会

十一月二十四日(月・振替休日) 午前十時始

名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Daizō Kyōgen Kai'. Roles include '狂言末広', '名取川', '鷹', '吹布', etc. Performers listed include '小野加津子', '余語将母', '牛田明伸', etc.

名古屋能楽堂定例公演

十一月二十八日(金) 午後一時三十分始

名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Nagayoshi Nohka Kyōka Seirei Kōgan'. Roles include '雨之段', '殺生石', '綱ない', etc. Performers listed include '梅田邦久', '久田徹二', '野村又三郎', etc.

秋の清謡会(第二十回)

十一月二十九日(土)午前十一時始

名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Autumn Clear Song Meeting'. Roles include '菊童', '蜘蛛', '連吟三井寺', etc. Performers listed include '西野志保', '中村正一', '山本博子', etc.

名古屋淡交会大会

十一月三十日(日)午前九時始

名古屋能楽堂

Table listing performers and roles for the 'Nagayoshi Awaiji Kaigi Taikai'. Roles include '高五之段', '通小', '遊屋', etc. Performers listed include '田村富士雄', '中村立子', '坂崎耕三', etc.

名古屋幽花会

十二月六日(土)午前九時三十分開演

名古屋能楽堂

番外 菱 老片山 仲香 河村真之介 前川 光長 吉阪 一郎 杉 市和

東 連吟 龍 中入前 中井 雅也 長崎 敏明 寺田 豊 月キリ 中島 佳子 浦キリ 小沢 宣子 崎道行 富岡 道代 阿 柏 酒 小田 和季

遊 行 柳 富田まさ子 富田 フク 経 村木 玲子 河村真之介 杉 市和 輪 森 万紀子 河村真之介 前川 光長 三 島 徳川 輝夫 徳岡 孝二 高宮 正彦

野 宮 高安 勝久 河村総一郎 杉 市和 合掌留 野村又三郎 村木 玲子 奥村 昭男 波方 晃 松枝寅太郎

石 橋 梅田 邦久 河村総一郎 杉 市和 舞 小 督 東山 清和 吉阪 一郎 杉 市和 衣 松久 祐子 河村総一郎 前川 光長 和合之舞 河村総一郎 前川 光長

山 姥 比江崎孝子 河村総一郎 前川 光長 吉阪 一郎 杉 市和 仕舞 島 山崎 立英 女アト 伊藤やす子 口キリ 小泉いく子 石原 雅子 岡本 耕蔵 岡本 耕蔵 片山 清司 片山 慶次郎 片山 九郎右衛門 片山 九郎右衛門

附 祝 言 (六時過終了予定) 主催 名古屋幽花会

〔御来場歓迎〕 片山 慶次郎 片山 伸吾

仲秋の舞台から 大衆能第一部「観世会」「九臈会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「井筒」シテ幸江、全てに控 え目な品の良きで、しつとりとし た風情。面は小面、前は四方の 秋の空、と右ウケル頼り無げな眼 差の孤愁からワキ備、勝久との間 答のあと、ハ一撥ずすき、と目を 遣ると、荒筋を痛みつづ懐旧の思 いで近寄る辺り、寂寥感一入。居 クセは上ケ端、ハ筒井筒、と沁々 踊いつつワキから直ルところ、往 時をじっくり反答する趣も上々。 たゞ、素性をハ言ふや、立つに些 かの安定感を欠く極み無きにしも あらず。アイ里人は友彦、情人の 許へ通う楽平を氣遣う妻の心情を 切々と語り余情。 後シテは初冠(巻綴・道懸)・ 赤地縫箱(金霞・露露扇散シ文) 腰巻・紫長相(白藤花・金扇面ニ 楓落葉文)・着付の指箱も観世水 から四ッ唐花菱文の古びたのに、 髪帯と共に替える。(ハ我筒井筒の と氣持の昂りは、ハ形見の直衣身 に触れて、慈しむかに左袖を見詰 め、右袖を重ねて胸に抱く辺り、 切ない。楽平を真似る序ノ舞の慎 ましさは、舞の後、ハ楽平の、と すらハ筒井筒に寄り、扇で芒を右 に軽く押し除け、ハ面影、と静か に覗き込むの奥床しく、ハ我な がら懐かしや、と退りつつ左袖で シオリ、ハ潤める花の、は巻上げ た左袖と扇で面を隠す下層の姿も 美しい。庭く踏む四ッ拍子に松崎

壺泉会 能

十二月十四日(日)午後一時半始

名古屋能楽堂

解説采 女 美奈保之伝について

芭蕉 泉 嘉夫 八神 孝光 殺生石 多丸島利之 山本 正人 泉 嘉夫 八神 孝光 後見 井上礼之助

狂言 秀 句 傘 野村又三郎 松田 高義 後見 井上礼之助

女 高安 勝久 福井啓次郎 藤田六郎長 美奈保之伝 野村小三郎 加藤 春枝 黒田 博 泉 雅一郎 後見 泉 須部 市 地蔵 八神 孝光 多丸島利之 鶴 克彦 山本 正人 泉 嘉夫 八神 孝光 後見 井上礼之助

狂言 長刀応答 (井上禮治、野村又三郎、井上祐一、佐藤友彦、今枝瑞雄、佐藤 隆) 入場料S三千五百円、A二千五百円、B二千円。チケット取扱いは「星屋」(佐藤隆、野村小三郎、井上禮治) 電話062-832-3185

名古屋在住の若手狂言師三人の会「狂言のり座」の第二回公演が十一月二十四日(振替)熱田神宮館楽殿で開催される。午後二時始。狂言「星屋」(佐藤隆、野村小三郎、井上禮治)

の鏡の音を聞かせ、袖返シハ明るれば、と臨往を見上げる面が可憐に見えた。(1時間38分) 「仏師」シテすっぱ一、アト田舎者・築港を証して吉祥天女を即製するが、印相が気に入らぬ注文主の眼前では企業秘密で製作過程は見せられない。ところがその裡に化けの皮が剥がれるが、田舎者からかつて自身も染しむというシテの気分がからって出て居り、生一本のアドと対照(25分) 「野守・居留」「野守」は異称「野守鏡」、野は春日野、鏡は野中の水鏡、実は鬼神の鏡という。ワキ山伏・雅介、水鏡の事を尋ねれば、前シテ野守ノ翁、騒その故事を語り、後シテに鬼神は天地の真相を映す鏡を持って出現する。 隣、前はいかにも春日野の番人運は力強く、杖を突くとはいえその杖も三本目の脚に思える。シテ・ワキ問答も自信に溢れ、居語から「御鷹の水の底にあるべきぞ」と、とパツと杖を引掛いて立って出る速さも目覚しく、ハあるよと見えて、の返シに正へ出るところも力がある。中入は、鬼神の鏡をもし見れば、とワキを睨め付け恐ろしいから水鏡を見よ、と杖を手放し塚に入る際も峻拒の強さがよく現われて上々の呼吸である。 アイ里人・高義はワキとの問答・居語はきくとも明快が良い。 ノットからワキは立つて塚へ進み、右膝着くとハ南無彌陀仏、で珠敷を激しく揉み、後シテは塚の中で謡い出してハ鬼神に横道(豊りなく、と塚を出る。面小恵見・唐冠・赤頭・赤黒段(亀甲鱗地飛雲文ト背海波地龍文)厚板着付・赤地(山道ニ唐花文)半切の紫若胴姿である。鏡の扱い方の鮮やかさは挨拶だが豪快味は薄く、小書で黒頭か、の期待が外れて、ハ大地を叩けばと踏み破つて、からトメまで、前シテの充実比べて平凡に思えた。(1時間10分・9月7日・第39回大衆能第一部) 「井筒・物落」シテ四郎、面小面・金地唐織(菊楓松文)の豪奢は、小書で腰巻を着込むが豪奢酒は流石。初同(院夫・邦久ら)ハ一撥ずすき、と井筒に向き、ゆっくり一足退くと離れて見込むところ、ハ露深々と古塚の、と右から左へじっくり見渡す辺り、空しく過ぎた歳月を改めて噛み締めるかである。ハ跡懐かしき気色かなと返シ一杯に常座へ廻り直ると、クリ地に床几に掛る。クセも床几ハ恥かしながら、とワキ勝久にアシラヒ、直ルとハ長き世を、と立って井筒へ進むと、その陰に消える様に二・三歩退ると、中入地一杯しずかに右膝を着いた。 物落アシラヒで後見座へゆき、装束を改めると直ぐ常座へ徒なりと名にこそ立てられ花、となる。初冠(巻綴・老懸・梅花ヲ翳ス)・浅黄赤段縫箱(霞ニ菊文)腰巻・紫長相(蒲公英・鉄線花ノ丸文)は、愛嬌のある鼻に豊頬の可愛らしい小面には、お澄ましの余所行きと見える。序ノ舞を優美に舞上げると、ハ寺井に澄めると扇で、芒を右へ静かに分けてハ月さやけき、と水に映る月を覗き込み、返シには月ノ扉に空の月を眺めるのを離子がアシラフ。ハ何時の頃ぞや、と懐旧に四辺を見回し彷徨する心のようなイロエが入るのも面白い。ハ冠直衣、と扇で指すとその徳利扇、ハ楽平の面影、と扇を握り込む様に井筒を覗き込むと、キリはハ我ながら、と左袖で面を掩つてたらハ退りハ潤める花の、と扇で更に面を隠してひっそり下層の風情も煽やか。ハ匂ひ残して、と立つと右ウケて耳を澄める様に鏡を聞き、ハのはの、と四ッ拍子軽く踏むが、ハ明ければ、左袖返す速く芒を眺めるところ、現実の世界に立ち戻ったことを強く印象付けて絶妙だった。ワキ勝久、静かな傳説にはピタリと嵌り品位充分。(1時間37分・9月14日・観世会) 「松虫」 往時、互いに野に遊んで酒を酌み、虫の音を受てる風流、男ならではの聞かない。そこで松虫の音に惹かれ、友を残して草叢に入った男が、戻らずに果てれば男の友情は徒らなれないことになろう。その亡霊が姿を変えた男が前シテ宜夫、襟黄・段翼斗目着付・白大口・灰色水衣(肩上)・笠は空留気も暗い。酒を酌うワキ元の間に、松虫の音に友を想い謂れを、努めて淡々と他人事の様に語るシテは、ハ友を偲びて松虫の、のリフレイン(聲句)に堅持が揺らぎ、素性を明かし恥かしとワキに伏目でアシラフところなど心持をみせる。ハ市人の(人影に隠れて)、と立ち、すでに暮へ入ったツレ二郎・圭一の後をハ松へ抜け、踏み留まると静かにワキハ振り向き、ハさてはこの世にもと勾欄に寄るのも、ワキにはまだ何か言い足りない思いがあるのだろうか、再び舞台へ戻って来るところもよかった。 後シテは、ワキの用いを奉謝する亡霊の姿、面怪士・黒頭・紫文無紅厚板着付・浅黄地灰色藤文半切・拾法被。風流を受てる男の亡霊にしては恐ろしい。クセに、菊の水を汲み、酒の故事を言い、ハ舞ひ奏で遊ばん、とは言い糸その気分には遠いが、黄鐘早舞はツマミ風舞ネ、両袖返すところなど爽快。キリに正中からハ入り入りん、と面退りに前へ出るのも松虫の再探り当てた敏拙、とも思えた。因みに松虫は平安時代、鈴虫と名称が入れ違つて居り、現在「ちんちりん」と鳴くのがそれである。(1時間22分) 「掃箒」 縛られた不自由な身体にも怯まず、却って闘志を燃やすシテ太郎冠者・又三郎が若々しく、目端の利くすばしこきは年齢を感じさせない。酒の匂いに「虫が込み上げて分別がならん」のは肩衣の蟋蟀の所為?酒舎開扉はいきなり「ガラ、ガラ」、錠前の掛金を外す「ピン」は無く、また縄掛けがあるのも又三郎家演出か。(28分) 「園橋」 濁流を逃れる幼帝(子方・駒瀬佐子君、涼やかで上品)を戴き、落ち延びたワキ侍臣・勝久と興正樹・信広を毅然たる態度で迎えるシテ漁翁・喜之郎、共に舞台を引き締めて、立派。供御の残りを放つ粘ノ段の鮮烈な裏と、追手アイ小三郎・高義をはぐらかし亦敢然と襲って寄せつけない気遣い、も胸がすく。 天女ノ舞は喜久、緋大口に紫地べた金の長絹の焔やかに劣らず華麗に舞い、紺無地腰斗目被きハ松へ出た後シテ蔵王権現を招けばシテは被衣を挽ね大飛出・赤頭・輪冠・赤地半切・立演火焔太鼓文紺地拾衣の豪華な姿を見せ、夜間59分・9月21日・宝生会)

観世流・金剛流 宗家本発行 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488 振替00130-7-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替01010-0-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話(052)731-7984
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年1100円
郵送の場合 1年1800円
一 部 100円

名古屋能楽堂 演能カレンダー

〔12月〕

- 6日(土) 名古屋幽花会 (無料)
- 7日(日) 歳末助け合い運動協賛能 (有料)(番組①面)
- 12日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)(番組①面)
- 13日(土) 名古屋・京都市職員謡曲交歓会 (無料)
- 14日(日) 壺泉会能 (有料)(番組①面)

〔平成10年1月〕

- 3日(土) 名古屋の文化を考えるライブ(抽せん当せん者のみ招待)
《能・狂言の楽しみ方》
- 4日(日) 学生能・狂言の会 (無料)
- 11日(日) 狂言「風の会」 (有料)
井上祐一舞台生活50年記念
- 15日(祝) 第20回大槻清順会全国大会 (無料)
- 18日(日) 同上 (無料)
- 25日(日) 名古屋能楽堂定例公演 (有料)(番組②面)
- 30日(金) '98名古屋万之丞の会 (有料)
- 31日(土) 青陽会定式能 (有料)

熱田神宮能楽殿催能

〔12月〕

- 6日(土) 名大観世会定期自演能(来場歓迎)(番組②面)
- 20日(土) 尾州座公演(有料)(番組②面)
- 21日(日) 叶石会大会(来場歓迎)(番組②面)

〔平成10年1月〕

- 3日(土) 能楽協会名古屋支部初式
(協会能楽関係者のみ)
- 10(土) 恵比寿会 (無料)

歳末助け合い運動

協賛能

能楽協会部 12月7日公演

能楽協会名古屋支部(泉路夫支部長)主催による平成九年度の歳末助け合い運動「協賛能」は、十二月七日(日)名古屋能楽堂で、観世流・宝生流による能三番、和泉流狂言、金剛流舞踊子、金春、喜多、観世流による仕舞など協会支部能楽師の出演で開催される。この歳末助け合い運動協賛能は毎年能楽協会名古屋支部の主催で行われ今回は第二十九回目となる。昨年は愛好者の協力により、義援金として愛知県へ二十六万六千七百七十七円、名古屋市へ同じく二十六万六千七百七十七円、合計五十三万三千五百五十四円が寄付された。

演能は、観世流能「通小町」(シテ加賀敏彦ツレ瀬戸三津子) 観世流能「半部」(シテ古橋正邦) 宝生流能「那那」(シテ竹内澄子、子方鈴木慶祐) 狂言「蝸牛」(野村小三郎、井上靖治、佐藤融) 金剛流舞踊子「胡蝶」(牧野元子) 仕舞は喜多流「松風」(長田駿) 観世流「巻」(生駒里翠) 「葉上」(高木美智子) 金春流「天鼓」(前田茂徳)

午前十時半開演、入場料前売り二千五百円(当日三千円)学生千五百円。

前売券は、市内各プレイガイド、チケットぴあ(052・320・999)チケットセンター(052・290・999)各出演者宅。

当地二百七十年ぶりの上演

翁 毘沙門風流

1月25日 名古屋能楽堂 定例公演

名古屋能楽堂では、一般市民にひろく能楽鑑賞の機会をもつてもらうと「名古屋能楽堂定例公演」の自主演能を企画、能楽協会名古屋支部の積極的な協賛により、本年十月から毎月一回の定例公演を開催してきている。その第一回は金剛流能「那那」(シテ金剛水鏡

師)で超満員の観客で、舞台の隅の隅まで熱演で、定例公演の関心が高まっている。

新春一月の公演は、稀曲「翁・毘沙門風流」(おきな・びしゃもんふりゅう)の上演で、名古屋では実に二百七十年ぶりの演能といわれ、当地和泉流の絶力をあけて

の所演である。

※当地での上演記録は、享保十年(一七二五)に古渡稲荷社で行われた山崎和泉主権の狂言興行以来となる。

(この上演にちなみ、本号ではとくに「狂言風流について」特集した)

歳末助け合い運動 協賛能 (第二十九回)

十二月七日(日)午前十時半始
名古屋能楽堂

能組
瀬戸三津子 加賀敏彦
後見 近藤 幸江 地謡 黒田 孝博
泉 嘉夫 地謡 八神 孝充
蝶 牧野 元子 後藤 孝一 地謡 須部 幸親
胡 蝶 牧野 元子 河崎 一 地謡 清沢 一邦
舞踊子(剛) 胡 蝶 牧野 元子 後藤 孝一 地謡 竹市 幸司
舞踊子(剛) 胡 蝶 牧野 元子 後藤 孝一 地謡 竹市 幸司

仕舞(喜) 松 風 長田 駿 地謡 和谷 寛治
古橋 正邦 野村又三郎 福井啓次郎 地謡 長田 郷

能(龜) 半 部 杉江 元 吉田 定男 地謡 長田 郷
間 野村又三郎 福井啓次郎 地謡 長田 郷

仕舞(和) 蝸 牛 野村小三郎 井上 靖治 地謡 佐藤 融
後見 今沢 雅和 地謡 高橋 一夫
中川 雅章 地謡 高橋 一夫
後見 今沢 雅和 地謡 高橋 一夫

能(雀) 郡 竹内 澄子 橋本 幸 地謡 河村 幸之介
高安 勝久 後藤 嘉津幸 地謡 竹市 龍夫
杉江 元 佐藤 友彦 地謡 竹市 龍夫

附祝言
後見 玉井 博祐 地謡 津田 節哉
衣斐 愛祐 地謡 加賀 山治
稲川 寿一 地謡 辰巳 正宜
鬼頭 嘉良 地謡 嘉良 正宜

入場券
前売 二、五〇〇円
当日 三、〇〇〇円
学生 一、五〇〇円
市内プレイガイド
チケットぴあ
(052)13201999
チケットセンター
(052)12901999
出演者宅

※協賛能の収益金は、愛知県と名古屋市に寄付させていただきます。

名古屋能楽堂定例公演

十二月十二日(金)

午後一時三十分始
名古屋能楽堂

花 籠 クルイ 竹内 澄子 地謡 戸田 博祐
衣斐 愛祐 地謡 戸田 博祐

船 舟 慶 キリ 寺井 良雄 地謡 稲川 幸和
鬼頭 耕司

狂言 官 主人 佐藤 融
酒屋 井上 祐一
後見 大野 弘之

海 人 飯富 雅介 河村 幸之介 鬼頭 耕司
橋本 幸 福井 良治 竹市 学

〔入場料〕
前売四千円、学生二千円
当日一般四千五百円
学生二千五百円

協賛能楽協会名古屋支部
〔前売券取扱〕名古屋能楽堂(052・231・0088)
チケットぴあ、チケットセンター、市内プレイガイド

壺 泉 会 能
十二月十四日(日)午後一時半始
名古屋能楽堂

解説 泉 女―美奈保之伝について

仕舞 芭 蕉 泉 泰孝 地謡 八神 孝光
殺生 石 多丸 島利之 地謡 須部 雨

能 采 女 高安 勝久 福井 啓次郎 藤田 大郎兵衛
美奈保之伝 間 野村小三郎

〔入場料〕一般券六千円、学生券二千円(全席自由席)
チケット取扱いは市内各プレイガイド、出演者宅
泉 嘉夫方(電話052・832・3185)

主の雅日記

(183)

萬葉の花紀行 (17)

えと文 二井栄逸

ていかかずら
石綱(いはつな)の
またをちかへり
あをによし
奈良の都を
また見なむ
田辺福徳歌集(巻六の一〇
四八)

「もう一度、若返って、あの美しい奈良の都を見たいけれど、はたしてできるだろうか。この歌では「いはつな」は「ちかへり」(若返る)の枕詞として使われています。つた。つぬ。いはつた。いはつたは、今のていかかずらを指して

いると思います。
そこでテイカズラのことで、旅僧が京都千本付近のあづま屋に、雨宿りすると、式子内親王の霊が現われて、生前契った定家の執心が寫りとなって蒸に絡んでいることを語るが、僧の回向によって成仏します。
本三番目物として、老女物をのぞいては、もっとも高級な曲で、幽玄の極致をなす能であります。後シテは渡(やせ)女をつけますが、求塚や碓の四番目風の劇的な要素を持ち、内容の了解しやすいのとくらべて、これは花やかな

若さがある理でなく、しかも若い朽ちた姿でもなく、惱(なや)み衰えながらも、ありし昔の風わしさを序の舞に示すのでありますから、高度の力量が要求されるのも当然であります。
このように藤原定家の執念がま

つわりついて花となったという言い伝えから、この名があるのとこ
初夏の山裾にゆくと、芳香をはなつて、テイカズラが咲いています。白色の花で後に黄色にかわるのはスイカズラに似ています。



能「俊寛」狂言「磁石」

1月30日 豊田市で能楽座公演

豊田市、豊田教育委員会、豊田文化協会では、明春一月三十日(金)豊田市民文化会館で「能楽座公演会」を開催する。
演能は、観世流能「俊寛」(シテ観世鉄之丞)和泉流狂言「磁石」(シテ野村万作)。
「俊寛」には、ワキ宝生開、ア1・石田幸雄、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原富司忠、大鼓山本孝の諸師がつとめる。午後六時開場、六時半開演。
入場料S席四千円、A席三千円、学生千五百円。
問い合わせは豊田市コンサートホール準備室(TEL0565・35・8200)。

平成9年12月放送

〔12月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時～8時57分)

7日(日)	「小 督」	～親世流～	梅若 万紀夫
14日(日)	「船 井 慶」	～宝生流～	近藤 乾之助
21日(日)	「柏 崎」	～喜多流～	大島 久見
28日(日)	「和 布 刈」	～親世流～	山中 義滋

熱田神宮能楽殿演能案内

第一回名大観世会定期自演会

十二月六日(土)

午前十一時開演

仕舞	駒之段	(利見佳宣)	岩 船	(宮島富久雄)
経	正キリ	(岸麻葉子)	葛城クセ	(玉置健太郎)
通吟	野 宮			
仕舞	熊 野	(三宅智美)	声 刈キリ	(池田 直樹)
舞臺子	那 耶	中沢 孝文	波 辺 剛	加藤 啓
仕舞	清 経キリ	(山根直爾)	安 宅	(三宅由里子)
旗		(山田 洋之)		

尾州座公演

十二月二十日(土)午後一時始

熱田神宮能楽殿

狂言	大 名	鹿島 俊裕	恒川 明子		
仕舞	蝶 丸	(中森健太郎)	合 浦	(内山 元子)	
狂言	小舞	名取川	(鹿島 俊裕)	葛城キリ	(吉田 敦史)
舞臺子	安	宅 佐治	光幸	吉武麻里奈	有流 文江
仕舞	田 村クセ	(大野 拓也)	天 鼓	(正木 良枝)	
舞臺子	胡	蝶	古儀美千代	関根 真雨	岸 麻葉子
仕舞	高 砂	(米田 真理)	屋 島	(加藤 尚子)	
仕舞	班 女	(足立 由起)	春日龍神	(中野 裕子)	
仕舞	吉野天人	(杉岡 里美)	女郎花	(奥田 宏子)	
細井 裕之					
能	小 鍛 治	加藤 洋輝	山田 洋之	玉置健太郎	
間		恒川 明子	川 瀬由起子	利見 佳宣	
後見	前野 郁子	地 謡	大野 拓也	吉田 敦史	
久田 徹二		関根 真雨	奥田 宏子	俊裕	
主 鏡	名古屋大学観世会				
附 祝 言					

一謡会・叶石会

十二月二十一日(日)午前十時始

熱田神宮能楽殿

融	熊 野	兼松 俱子	澄川 幸子	海田トシ子
連 吟				
高野物狂	熊 野	清沢 一政	池ヶ谷 豊	後藤嘉津幸
胡 蝶	高橋 暎一	内田 睦子	後藤嘉津幸	竹市 学
芭 蕉	長戸 花子	後藤嘉津幸	竹市 学	大野 誠
池ヶ谷 豊				
恋 重 荷	近藤 重治	海田トシ子	後藤嘉津幸	大野 誠
歌 占	久田 徹二	河村真之介		
三 輪	梅田 邦久	井上 苑枝	鬼頭喜太郎	竹市 学
江 口	嘉 夫	吉田敦史	後藤嘉津幸	竹市 学
藤 戸	福本 雅夫	林 喜久子	竹市 学	希世
卒都婆小町	河村 慎二	澄川 幸子	福井啓次郎	希世
景 清	三宅川公香	河村 慎二		
隅 田 川	中村多恵子	福井啓次郎	助川 龍夫	希世
狸 々 乱	高木 和子	柳原富司忠	助川 龍夫	希世
安 宅	林 博敬	柳原富司忠	助川 龍夫	希世
野 宮	村木 寛茂	福井啓次郎	大野 誠	
船 弁 慶	吉田 明	福井啓次郎	大野 誠	
附 祝 言	前夜之替			
(御来場歓迎)				
主 催	一 叶			
附 祝 言				
主 催	一 叶			
附 祝 言				
主 催	一 叶			

平成10年新春を飾る 名古屋能楽堂定例公演

二百七十年ぶり稀曲上演

翁 毘沙門風流

1月25日

金 春 流
和 泉 流

〔入場料〕
前売一般四千円、学生二千円
(当日一般四千五百円、学生二千五百円)
主催 能楽普及事業実行委員会
名古屋市・名古屋城振興協会
名古屋市文化振興事業団
協賛 能楽協会 名古屋支部
(前売券取扱い) 名古屋能楽堂(電052・231・0088)
チケットぴあ、チケットセゾン、市内プレイガイド

平成十年一月二十五日(日)午後一時始

翁

毘沙門風流

千歳 井上靖浩
三番叟 野村小三郎
毘沙門 野村又三郎
大鼓 寛 一
脇 藤 波 充
アリの奥の精 藤 波 充
西王母 佐藤 融

半能高

砂

シテ高砂 金 春 安 明
ワキツレ飯 富雅介
ワキツレ杉 江 元
大鼓 寛 一
脇 藤 波 充
アリの奥の精 藤 波 充
西王母 佐藤 融

後見 金 春 晃 実
金 春 穂 高
伊藤 雄 二 前田 茂 穂
佐久間 祥 夫 高 橋 汎
広瀬 雅 弘 本 田 光 洋
小島 芳 樹 加 藤 正 嗣

狂言後見 井上礼之助
松田高義
狂言地謡 丹 邊 文 彦 大野 弘 之
今 枝 靖 雄 野 口 隆 行
今 枝 郁 雄 佐 藤 友 彦
鹿 島 俊 裕 奥 津 健 太 郎

(午後三時頃終了予定)

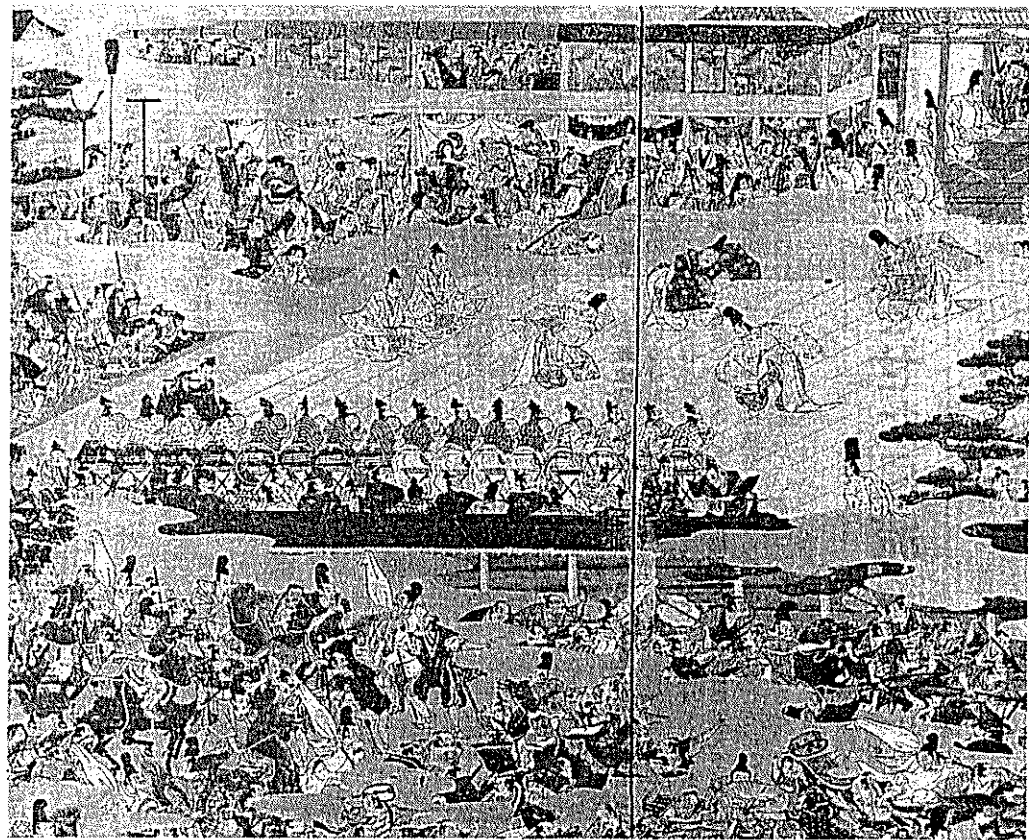
豊国祭「風流」

臨時祭礼行事

中部大学女子短期大学教授
小 島 廣 次

「風流」(ふりゅう)とはあまり耳なれない詞かもしれない。この詞のあらわす用語内容は数種類あつて一つではない。詞の意味だけを辞書でみれば、文安元年(一四四四)成立の「下学集」では「風流、風情ノ義ナリ。日本ノ俗、拍子物(はやしもの)ヲ呼ビテ風流トイフ」といっている。一六〇三年刊行の「日葡辞書」では「雑物を伴う踊り」としている。と、いうことは「風流」と名がつくかぎり、雑し物(笛・鼓・太鼓など)楽器を伴うことが公約数である。能・狂言愛好者のなかには、「風流」のうちの一つである「狂言風流」という詞を聞かれた方もあろう。本年四月三日、落成した名古屋能楽堂の開館記念の特別展に、寛永十二年(一六三三)山脇元宜等に宛てた狂言大夫大倉虎時の「風流伝授詞文」が展示された。この文書の真偽については、本紙の平成八年十一月発行第三五九号で、和泉流狂言方の佐藤友彦師が疑いをはさんでおられる。紙質や用紙の大きさなど様式的にみても原文書とは言い難い。真偽問題は別として、一七世紀初頭までは、「狂言風流」は狂言方にとって極めて格の重いものであつたことを象徴している。大倉(蔵)流の太夫が和泉流の太夫から風流を五番伝授してもらうために神文書紙を提出しているのだから、猿楽の能「翁」の祝言性を強調するための特殊演出で、狂言風流は華麗に着飾った狂言方が、しかも大勢登場する。今日では上演の機会も少なく、演者の人数からしても上演はむづかしい。しかし当地方ならば上演は可能であり、斯界のために復興が待たれる。

あらためて、ご専門の方に詳述していただくとして、狂言風流でなく、そのほかの当地方に關係のある「風流」を紹介しよう。徳川美術館で、六曲一雙金雲極彩の「豊国祭礼風流」をご覧になった方は随分多いと思われる。この屏風の右隻には、金春・観世・室生・金剛四座の太夫立会いという特殊演出の「翁」が描かれている。左隻は「祭礼風流」史上、最大で最高のしかも最後ともいえる風流踊りが描かれている。見られる祭り、見る祭りの風流が生きて今日に伝えられている。この祭礼風流は豊国社で毎年春秋二回行われる祭礼ではない。これは豊国大明神の臨時大祭礼で、秀吉の七回忌に因んで慶長九年(一六〇四)八月十二日(現行太陽暦の九月五日)から十九日までの八日間の臨時祭で、情熱年月日を確認できる。この祭礼を描いた屏風絵には五本ある。



徳川黎明会所蔵「豊国祭礼風流」部分

その第一は豊臣家の御用を勤めていた狩野内膳重輝(一五七〇—一六一六)筆で、二年後の十一年八月、豊臣秀頼の命をうけて片桐且元が豊国社に奉納寄進した豊国神社本で、現在、重要文化財に指定されている。第二は岩佐又兵衛(一五七八—一六五〇)筆を伝承され、江戸時代は高野山光明院に伝えられていた徳川美術館保管の徳川黎明会本。第三は狩野孝信(一五七一—一六一八)筆の原本を天明三年(一七八三)に写したという京都妙法院本がある。以上三本は後年の推測想像画ではなく、同時代の作成画で、絵画的な操作はほとんどなされておらず、情景の記録性は、充分に信頼がおける。その他に焼失した旧神宮徴古館本や「國華」一八〇五号に紹介された海外流出本がある。このときの風流は絵画資料だけでなく、太田和泉守(一五二七—一六一〇頃)の自筆「豊国大明神臨時御祭礼記録」(天理図書館蔵)の詳細な文獻資料も残っている。牛一には著名な「信長公記」や「大かうさまくんのうち」などの著作があり、信長・秀吉・秀頼に仕えた武人である。立場上からみても最も信頼できる情報源である。④面につづく

④面よりつづき

この祭礼で演じられた芸能には田楽・猿（申）楽・風流踊りの三種がある。その中で、あくまで主なものとして京都町衆による「風流踊り」であった。その理由は絶対権力者白秀吉も存命中、京都町衆の風流踊りを見ることのできなかったからである。

その代りとして猿楽の能を演じることで勘弁を願って、十三日の、関白の天皇拝賀の折に宮中で能が演じられた。風流踊りは豪華な服装、華麗な飾り、囃し物を伴っての群舞・行列で莫大な費用を要するものであった。しかし上京・下京の富有な町衆にとっては費用が問題ではなかった。「風流」という芸能に対する町衆の思入れ、見識が承諾を許さなかったのである。秀吉は死して七年目、わが七回忌にあたる臨時祭礼に、その折の命令を実現させたことになる。それだけに今となつては、町衆にとって特別な感慨が込められ、熱狂的な風流になった。

悪しく雨となった。豊国社の別当の神龍院梵僧（一五五三—一六三二）の「梵僧日記」に「天晴。後、雨降。豊国臨時、雨に依り延引」と記している。醍醐寺三寶院の義演（一五五八—一六二六）の「義演准后日記」には「シキリ二雨降ル。仍ツテ儀延引。終日、大雨也」とあって、予定の儀式行事は翌四日に延引されたことを伝えている。終日、大雨で、今でいえば二百十五日に当たっているが、台風ではなかったようである。

田利長や加藤清正等豊臣恩顧の小名五十四人が寄進した飾り馬に騎乗する神官二百人の二列に並んだ行列。豊国社の中門前で神官による天下泰平・国土安全・武運長久の願文が奏上された。第三番は「田楽」で、樓門前の石段下で奉納された。当時、春日若宮御祭や大坂住吉大社御田植祭に出動している本座・新座の田楽衆三十人が左右二列に並び、演目は三番である。「御祭礼記録」によると、小刀を品玉に取る芸の風流は黒雲神を払い、弓矢をつがえる芸は四方の悪魔の軍敷を防ぎ、鉦を振る芸は諸々の賊難を追払うものである。どの芸も悪魔降伏の祈禱として行われる。

豊国神社本・徳川黎明会本の屏風には、樓門中央の円座に衣冠束帯姿で笏を手にしている貴人を見物している情状を描いているが、

田利長や加藤清正等豊臣恩顧の小名五十四人が寄進した飾り馬に騎乗する神官二百人の二列に並んだ行列。豊国社の中門前で神官による天下泰平・国土安全・武運長久の願文が奏上された。

成天皇の御前で演じたほどの能狂であった。そんな秀吉のために、四座はそれぞれの日をめぐしに新たに書き下ろした新作能を競演することになった。「梵僧日記」によると、まず金春が「橋」を、ついで親世が「武王」・宝生が「太子」・金剛が「孫思淵」（「そんしはく」）の順で演じた。内容は不明であるが、武王とは中国の周王朝の第一世で名君であった武王のことであろうか。孫思淵は諸子百家の説に通じながらも太白山に隠棲し、隋・唐王朝からの招きに応じなかった隠士である。

新橋能一番つつかまつり、青銅千貫、四座大夫先へ罷り出候し也。金春大夫先へ罷り出ず。定めて豊国大明神の御申楽なり（「豊国大明神臨時御祭礼記録」）

家康を恐れさせた風流

祭礼次第の第四番は「猿（申）楽」の能である。屏風絵でみると、場所は田楽奉納場所より下段の中門の手前広場の敷板。舞台の広さは敷板数と舞台側面の柱間数からみて、五間四方ほどかと推定される。中門内には見物衆はな

問題には黎明会本には笛吹き役の袖の坊主頭の土足の男が数本の小刀を空中高くほうり上げて、これを用いる品玉の曲芸が描かれている。黎明会本では男は何か隠れているようで小刀にまじって白い玉もみられる。

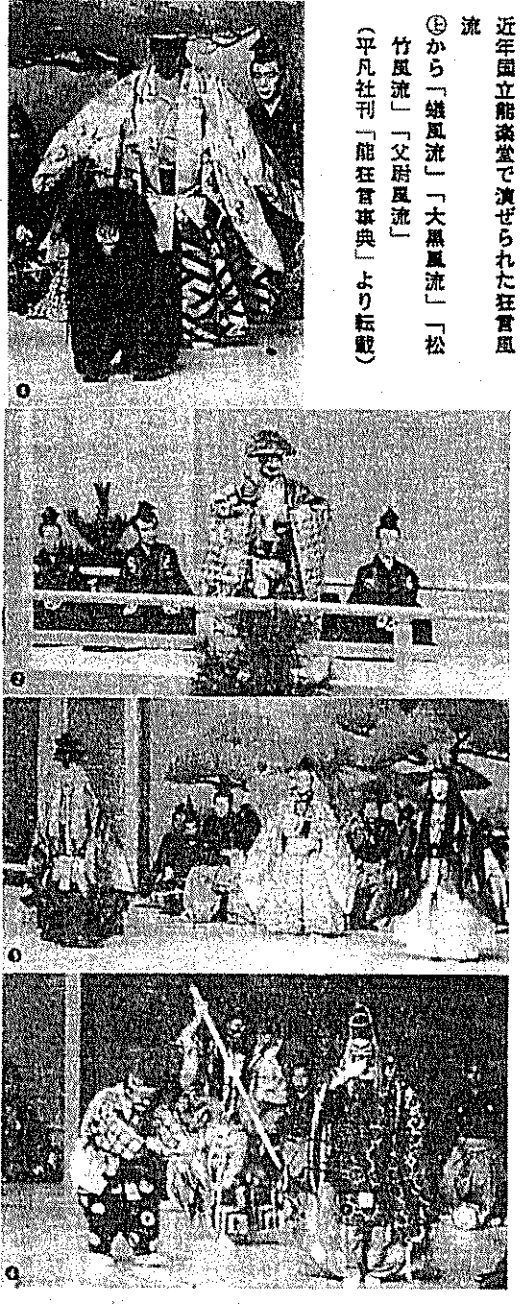
秀吉が特に景原にした金春大夫安照が代表で頂戴した。秀頼から褒美下賜は銭貨で千貫、枚数にして百万枚、重宝にして約三・七五トンになる。

昆沙門之風流

二十三日 三毒度風流 初位之鈴ノ清礼ト一也

昆沙門之風流 三毒度風流 初位之鈴ノ清礼ト一也

和泉流古伝書「昆沙門風流」の部分



近年国立能楽堂で演ぜられた狂言風流

④から「蟻風流」「大黒風流」「松竹風流」「父尉風流」

（平凡社刊「能狂言集」より転載）

誰か比定できない、括り袴に括り袖の坊主頭の土足の男が数本の小刀を空中高くほうり上げて、これを用いる品玉の曲芸が描かれている。黎明会本では男は何か隠れているようで小刀にまじって白い玉もみられる。

祭礼次第の第四番は「猿（申）楽」の能である。屏風絵でみると、場所は田楽奉納場所より下段の中門の手前広場の敷板。舞台の広さは敷板数と舞台側面の柱間数からみて、五間四方ほどかと推定される。中門内には見物衆はな

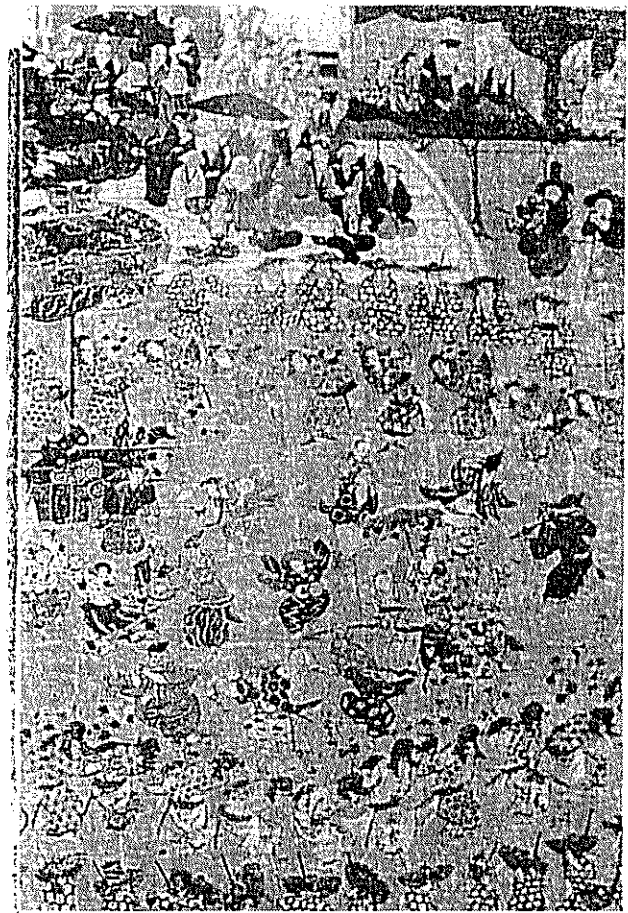
秀吉が特に景原にした金春大夫安照が代表で頂戴した。秀頼から褒美下賜は銭貨で千貫、枚数にして百万枚、重宝にして約三・七五トンになる。

祭礼第二日の祭礼次第は神官騎馬揃い田楽一猿楽と展開し、第三日には京の町衆による「風流踊り」へと続くのが自然の流れのように思われるが、最初からこのような順序ではなかった。計画は二転三転している。そこには徳川家康の政治的意図と京都町衆の動向に対しての思惑があった。

ており、この七回忌を機に政権の継承を京の町衆に誇示し、人心収服を目論みだつたのである。一方、秀頼は祭礼終了の二十一日、米五千石を大坂から京都に運び、踊り衆一人に米十石ずつを下賜して、その健康を祈るやうとしている。

京の風流は、永禄十一年(一五六八)九月、織田信長が足利義昭を率いて入京、三年後の元龜二年七月二十五日、上京衆の風流を將軍と織田親王が上覧、下京衆も負けじと踊りを演じた。その人数は二百余人、権大納言山科宗鑑(一五〇七—一五七九)は「前代未聞」と称し、見物人は十万余人もあったと記している(『言継卿記』)。豊臣家の風流を「当代記」は「見物ノ上下、幾千万ト云フ数ヲ知ラズ」と記している。

豊臣家の風流は勃勃の世といわれた元龜二年の風流を遙かに越える規模であった。屏風の左装六幅にわたって上京・下京の風流踊りが描かれているが、兩者の踊り衆が同時に踊りを演じた可能性はきわめて薄い。画面構成上の作りごとであろう。上京の踊り衆はまず内裏へ行って踊り、その後、豊臣社神前で踊り、おひ、下京は先に豊臣社で踊り、その後、内裏で踊っている。式部少輔舟橋秀賢(一五七五—一六一



豊臣神社蔵:「豊臣祭礼回屏風」部分 (平凡社刊「日本の美術・桃山の風俗画」より転載)

八月十五日、風流踊りの当日とす。今日は雨ふらず、風吹かず。天地穏やかに天津日影さやかに。貴賤老若、浮立ちて遊び申すなり。上京未代之見物、上を下へと群集して、晴れがましき御事なり(『豊臣大明神臨時御祭礼記録』)

伊藤安仲と「津島笛」南にて、名にしおふ津島笛をぞよかせける。上・下京五組の一組について、大太鼓・大鼓と笛三管・小鼓十一丁であった。伊藤安仲とは、その何者であるのか。寛延三年(一七五〇)、尾張藩が名古屋城下の旧家由緒を襲上りさせ、編纂した「寛延旧家集」(『名古屋叢書』第十二巻)に、
【名古屋叢書】「第二十二巻」に、名古屋本町の唐木屋市右衛門の書上げに
私先祖伊藤惣(宗)十郎法名安中より、代々尾瀬商團商人司仰せ付けられ、信長公より御朱印頂戴仕り、信雄公・信忠公・(豊臣)秀次公・(松平)忠吉公御朱印頂戴仕り、

源敬様(徳川義直)御意書、其外方々御判物物敷通頂戴、所持仕来り候。内、日没後、退出。禁中へ御目二懸ヶ、紫宸殿ニ於イテ御覽ナリ。終日二候。四)の日記「慶長日侍録」では、
ある。元龜三年(一五七二)十二月付けで織田信長から「尾瀬商團之唐人方並に呉服方面売司」を申付けられた伊藤宗十郎の法名が「安中(安仲)」である。
伊藤宗十郎安仲は大商人であるばかりでなく、能の笛の名手で信長の側近として恩顧を受けていたようである。
永禄十一年(一五六八)九月、戦国大名家を軋々とした足利義昭は信長の力添えによって上洛。十月十八日に征夷將軍に任官。十一月の「信長公記」によると、十月二十二日、信長は「道成寺」のとき、義昭は信長が小鼓の名手と聞いていたので、打つことを所望していたので、打つての藤澤元龜宗十郎に吹かせている。元龜元年四月十四日、信長主権の將軍御殿落成祝賀の七番能で、すべて専業者ばかりの御難子万の申し、ただ一人桑人の伊藤宗十郎がまじっている。
【信長公記】巻首によると、弘治・天文初年(一五五〇年代後半)、信長自身、津島の土家家田道空の庭で天人の仕立てで小鼓を打ち、女踊りをしてゐる。信長の「教習(風流)」は幸若舞の「小鼓盛」の一節(人間五十年)を口付けで舞い、そのほか「死のふは一定、しのび草には何をしよぞ、

一定かたりおこすよ」という「小鼓」であった。このことを武田信玄が天台宗の師僧天沢から聞いて「異な物をすかれ候」と信長を評している。
信長は若いとき、異様な服装・行動から「傾奇者」「カブキ者」であったことは衆知のことから、まさに「風流踊り」の豪華な異装にびびった性格である。と同時に、富田の聖徳寺内での齋藤道三との婿引会見のとき、一転して折高の肩衣袴の「公道なる仕立」からみて、足利御所御内能にも恥かしくない人でもある。
尾張人伊藤宗十郎安仲と尾張の「津島笛」が深い関係にあってもおかしくない。
津島笛は太陰暦の六月十四日の宵祭、十五日の朝祭の二日にわたる川船祭である。その祭礼囃子をかなり早い時期から、能狂言の笛に撰取り消化されて、能の「一管」であったことになる。
高桑いづみ氏の「津島」(『下流』)の世界——能管。一節切の交流とその背景——(国立音楽大学「研究紀要」第二五集掲載)と「能管と一節切」(『日本の音楽文化』所収)の論考に沿って、以下、記述をすすめていくことにする。
【糸竹初心集】・「宗左流尺八」
「安土・桃山文化」といえば、まず「金碧・極彩」の詞とともに、安土城・大坂城の金箔張りの屋根瓦や黄金の茶室を思い浮かべる。金色光輝く文化である。下京衆の一角として風流に参加した占出士町では金箔三百枚を費していた。もし一町当たり金箔三百枚とすれば、約二百五十町であるから七万五千枚の金箔が使われたことになる。「御祭礼記録」によれば「踏歌・草鞋に至る迄、何れも金々に隈付けたり」という。足に履き土を踏むのでさえこれである。かぶり物や衣裳に至っては、どれほど豪華華麗であったかは想像にかたない。

風流の終焉

「風流」史上、最大にして最高といわれた豊臣臨時祭礼の風流踊りが、風流の終焉となった。しかし、されることになった視座からみてみよう。
豊臣神社本殿の屏風左装には、樓門前の石段中央に、ひととき目立つ見物衆が描かれている。四本の大差掛傘の集団にかまれて老尼僧が坐っている。周囲には尼僧、法体の人や武士が多数待坐している。もしかすると秀吉正夫人高台院お赤さまであろうか。貴人風の男女はすべて棧敷席内で見物しているのに、この一団だけは外に出ている。高台院さまの思入れのほどを充分に窺わせる。

「楽器の笛も必要であり、祭礼囃子である「津島笛」の曲が用いられたのであろう。
屏風に描かれた風流踊りの一組の輪の中に、笛はたしかに三管描かれているが、いずれも横笛で「一節切」は見られない。ただし画面で能管が龍笛かの見分けはつかない。太鼓は二人組に担がれた銀打ち太鼓(宮太鼓)と能風の締め太鼓も描かれている。小鼓は多数見られるので、十一丁は確かであろう。
現在の津島祭は龍笛・銀打ち太鼓・能風の締め太鼓の編成で「桑」(「攻め」)のほかに三曲からなっているが、室町時代から同様の祭礼囃子であると断言できない。また豊臣家の「津島笛」そのものともいえない。
能の笛方のどの流派でも、一管専用曲である「津島」(「神道津島」)を秘曲・大曲として大切に扱ってきた。その背景に能とは異なる曲、津島祭の祭礼囃子もじつと曲という伝承があったためらしい。ところで津島祭の朝祭の車架船の屋台に「置物」と呼ばれる能人形を飾っているため、本来、能の曲であるものがくづれた曲になり、しかも龍笛に変わったと、本来、転調の誤解さえ生みだしている。
上京三組・下京二組の各組ごとに、目標とした組名を記した軍配形・團扇形の差し物を立てるはずであったが、実際には五組ぐらいではなかった。屏風絵でみると、上京だけでも西陣・小川組、上立売組・下立売組、一条組、新在家組、川西・川東組など六組。下京も中之組、川西組、丑寅組の三組の名が見られる。各組には花飾りの作り物に工夫をこらした巨大な「風流笠飾」中心に押立て、その周囲を飾る奇抜な笠をかぶり、服装衣装を身にまとった踊り衆がとりまき多数あって、南蛮人自身か区別がつかない。衣裳の材質は金襴・銀襴唐織・縫取り・摺箔など、あらゆる技巧をこらしたものである。踊り衆百人一組に「一つ物」と呼ばれる仮装行列が催された。「御祭礼記録」によると、大黒・

⑤面よりつづく) 忘れて乱舞の中へ飛込んでくるといふ始末であった。横敷席の見物衆までも「生死の眼も覚えず」エクスタシーの状況に陥入つてい

太田牛一は 國家豊饒に納り、目出度く躍りを仕り、天下御威光、有難き御代かなと、昔老若、浮立って悦び遊ばす也。上古・末代の見物、上を下へと群集して、暗れがましき御事なり。定めて神明・仏陀も面白く思召し、御影向し給ふらん

「翁」は能楽大成以前の、古い芸能の折りの姿と心を今にのこすもので、古くは式三番と呼ばれ、各役ともに多くの伝承や演出の異式を伝えている。 狂言風流は、三番の舞の間に様々な縁で、意表をつく神や精霊などが登場し、その場を華やかに彩り祝言を盛り上げるものである。

和泉流宗家である山脇家では古来十六番を伝える。 「鶴亀風流」「御賀松風流」「三盤風流」「四季神風流」「三盤風流」「風流風流」「千々野風流」「大黒風流」「昔風流」「陣神風流」「餅風流」「黒沙門風流」「しゃうれう地風流」「如意珠風流」

和泉流は元来、京都を中心に禁裏や堂上公家に入りして活躍していた手廻りの流れを汲むものであった。風流を得意としたのも、禁裏を中心に行なわれたことによるものであろう。その後も禁裏のほかは、江戸幕府、西本願寺、春日大社に上演の場は限られ、滅多に演ずることの出来ないものだった。狂言方の扱いは一子相伝とされ、和泉流ではかつて宗家のほかは三宅藤九郎家と野村又三郎家のみ許されており、その他の家では上演機会にその場限りの許しとされていた。三宅、野村の両家と

し状況であっただけである。「平等大界」は賢愚・道俗・貴賤・上下の別のない真如の世界である。「神明・仏陀も面白く思召し、御影向し給ふ」万物皆平等の世界、支配権力者の恐れる世界であった。

「当代記」は 豊国神事、京町人風流アリ；見物ノ上下幾千万ト云フ数ヲ知ラズ。夕夕シ在伏見ノ大名・小名見物コレナシと伝えている。伏見在任の大名・小名たちの多くが、家康の目を恐れて豊国社への社参はもろろんのこと、祭り見物することさえ避けていたようである。この期間中、伏見城にいた家康は祭礼の開催について了解を与えたものの、秀吉も流内での名家であるが、江戸時代を通じて京都にあり、禁裏御用を中心とした家であり、自然風流を勤める機会も多かったと思われる。

狂言風流について七代山脇和泉元業が書きのこした伝書のうち「風流之作法」の項があり、以下のごとく記している。 一 風流ノ極秘ハ、乱舞モ未ナキ時代、大昔ノ事禁中ニ、御吉事有シ節、色々ノ風流ヲシテ、御調物ヲ捧タル事ト見タリ。是今スル、乱舞狂言ノ風

追慕して町衆たちが熱狂的に狂舞しているのを聞いて、一歩も外に出なかつたといわれている。祭礼の全行事が終了した二十日、京の町衆は伏見城中の館の庭で踊り、家康の御覧に供した。町衆の心意気としては、風流踊りは豊国祭礼のものであり、天皇の御覧に入れたのは京の王者であつたからである。家康がそれであるならば、踊りを一覽に供するといふ筋を通している。

流ト云ハ、則是根本也、狂言ノ風流ハ、常ノ狂言ヨリハ、後ノ事ト見タリ。奥ニ差掛、当日、翁ノ言葉ノ縁ニヨリ、能ノ風流ヲ、スル事也。左有ニヨツテ、其時々ニ、作り、風流ニ、理屈成事ハ、悪シ。風流ニ、走りハ、是秘伝也。只目出度、ウキノトシタル事也。今、馬ノ頭ト云事有、是太昔ヨリノ風流ニ同様ノ事也。狂言、能ノ風流、古風第一ノ事、大切成事也。 さらに元業は次のごとく言いつ

狂言風流について

佐藤友彦 (和泉流狂言方)

よるものであるのに剣幕とは、秀吉直系の子孫が消滅しても、まだ京都の豊国社の存在は頭にはしかかるものであつた。 家康がそれよりも恐れたのは、民衆のエネルギー、集団の力であつた。中世室町期の為政者は、たゞ「風流踊り」を禁じている。豊国祭風流が見せつけた民衆のエネルギーは、一つ間違えれば、またすべての人の記憶に新しい下剋上の危険をもつていた。 身分制・管理支配体制を固つた徳川政権は、室町幕府のように「風流」という現象のみを禁圧するのではなく、まず手短かで直接原因の豊国社をなくしたのである。家康は京坂の経済力の分散を

換、徳川系政府の成長を図り、さらに民衆の自由な動きそのものを締めつけたために「風流」自体に手を付けなくとも自然に消滅することになつた。 田楽・猿楽・狂言・風流は公家や武家も民衆も愛好していた。民衆は、その芸能を野趣のまま自から演じていた。ただ田楽・猿楽・狂言には、当時すでに專業的芸能集団が確立していた。家康はその慶長二十年七月、一日・七日・八日と事あるごとに猿楽の能を厳行している。はやくも、公家の式楽の雅楽に對して、武家の式楽として能楽を確立させようという動きがみられる。 民衆は自ら行動することから鑑賞へと転じるのを余儀なくされ

能楽通史 (名古屋) ②

- 一八一八(文化十五) 弘小路神社にて三〇日間の辻能。このころから天保年間まで、堀井仙助一座を中心とする辻能が盛んに行われる。
- 一八二七(文政十) このころ、現在、狂言共同社が準拠している和泉流台本「雲形本」二〇冊が成る。
- 一八二八(文政十一) シテ方木下正三郎、召し抱えられる。
- 一八三六(天保七) 教順寺にて「狂言大夫山脇和泉流伝統之碑」建立される。
- (千種平和公園の同寺墓地内に現存) 山下大野舞台にて石井弥市・藤田清兵衛、能を興行。
- 一八五一(嘉永四) 徳川慶勝代替の祝能。尾張藩で行われた最後の町入能。
- 一八六九(明治一) 早川舞台(大乗院境内、現在大須地区)、大野舞台(西区井桁町、後上園町に移築され古春舞台、さらに木下舞台として変遷)を中心に活発に演能する。
- 一八八一(明治十四) 狂言方・山脇元清、東京へ移住する。
- 一八八三(明治十六) 木下正三郎追善能催される。
- 一八八四(明治十七) 名古屋在住の狂言師が集まり、山脇和泉元業・山脇得平・早川幸八、物故三師追善狂言会を主催する(古春舞台)。西別院にて「和泉流猿楽狂言記念碑」を建立する(現在昭和区八事山興正寺境内に移設)。
- 一八九一(明治二十四) 名古屋の和泉流狂言師の結社「狂言共同社」設立される。
- 一八九四(明治二七) 愛知県博物館内に能舞台が完成し、舞台披露が行われる。
- 一九〇〇(明治三三) 那古野神社能舞台が完成し、舞台披露が行われる。

平成十年二月(三月) 名古屋能楽堂 定例公演案内

◎平成十年二月十三日(金) 午後一時三十分始

能「楊貴妃」(台留)「観世流」

狂言「文山賊」(和泉流)

◎平成十年三月十三日(金) 午後一時三十分始

能「鞍馬天狗 白頭」(観世流)

狂言「膏藥煉」(和泉流)

- 一九〇一(明治三四) 愛知能楽会が発足する。
- 一九〇九(明治四二) 呉服町能舞台が完成し、舞台披露が行われる。
- ◎大正時代
- 一九一六(大正五) 井上菊次郎、東京へ移住、以後東京で活躍する。
- ◎昭和時代
- 一九三〇(昭和五) 名古屋能楽会、田鍋惣太郎を団長とする上海公演を実施する。
- 一九三一(昭和六) 布池町に名古屋能楽堂が完成し、舞台披露が行われる。
- 一九四五(昭和二〇) 三月の空襲で布池町の名古屋能楽堂全焼する。
- 十一月、戦後初の演能が大家能として、名宝会館で行われる。以後、熱田神宮能楽殿が建設されるまで、商工会議所ホール、松坂屋ホールなどを利用しての演能活動が行われる。
- 一九四八(昭和二三) 御座にて「名古屋能楽本格的復興第一回公演」が行われる。
- 一九四九(昭和二四) 能楽協会名古屋支部が発足する。
- 一九五五(昭和三〇) 熱田神宮能楽殿が完成し、舞台披露が行われる。
- 一九六七(昭和四二) 能楽専門情報誌「能楽の友」が名古屋で創刊する。
- ◎平成時代
- 一九九一(平成三) 狂言共同社結成百周年を迎える。記念狂言会、装束・面等の特別展などを開催し、この年の親世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞する。(平成七年に再演)
- 一九九二(平成四) 那古野神社能舞台が、放火により消失(平成七年に再建)。
- 一九九七(平成九) 名古屋能楽堂が開館。四月三日、舞台披露が行われる。(名古屋能楽堂提供)